女鑑

第拾參年第拾七號

明治三十六年九月一日發行

口繪

[illegible]

讀書に就て　　社説

[illegible]

花[illegible]記小説　　[illegible]女史

毎月二回　一日　十五日　發兌

女鑑 第拾參年第拾七號 目次

定價

一冊 金拾錢

六冊三ヶ月分 前金五拾七錢

十二冊半年分 前金壹圓拾錢

廿四冊一年分 前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行 金三拾錢

半頁 金八圓

一頁 金拾貳圓

表紙一頁 金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

明治三十六年八月卅日印刷

明治三十六年九月 日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

編輯兼發行人 渡邊素一

東京市京橋區南八丁堀一丁目十二番地

印刷人 曾木眞雄

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 株式會社 國光社

（電話新橋二六九三番）

（電話新橋特八八番）

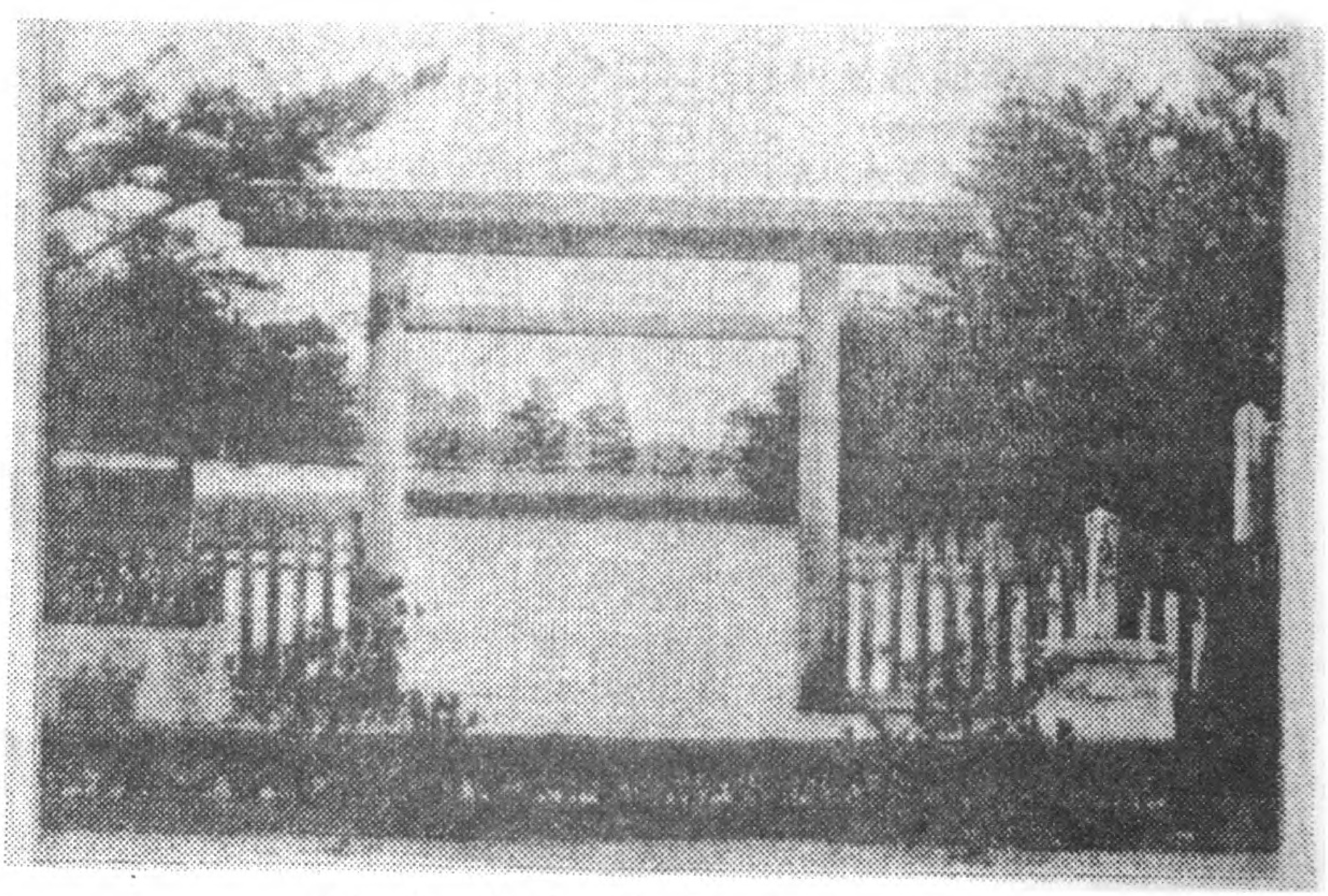


女子計算事務員養成所卒業生

女鑑兼題投稿優等者



森島靜子孃



神武天皇畝傍山東北陵

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

美術印傳物各種

最新流行意氣で高尚

千代田草履

婦人向

東草履各種

意匠斬新

美術江戸手形

價格壹圓五拾錢より

團州好

春雨傘

新意匠雨傘

御國花傘

登録 商標 香

淺草茅町二丁目壹番地

香取屋本店

(電話下谷千百九十二番)

市内ハ御一報次第參上御伺可申候

デシン石鹸



定價十二錢

此デシン石鹸は其原料を臺灣總督府専賣局製劑のデシンフエクトールに採りたれば各種の皮膚病を豫防するに用ひて頗る有効なる事既に諸大醫の證明せらるる所なり

デシンフエクトールは●にきび●たむし●いんきん●水蟲●しつ●ひぜん●あせぼ●其他一切の皮膚病に効あり

殊に消毒殺菌の效あれば本品も亦該使用の途あり

ゆゑに病院藥局産婆檢疫員の如き衛生的業務に就事するもの丶必ず常用すべき也

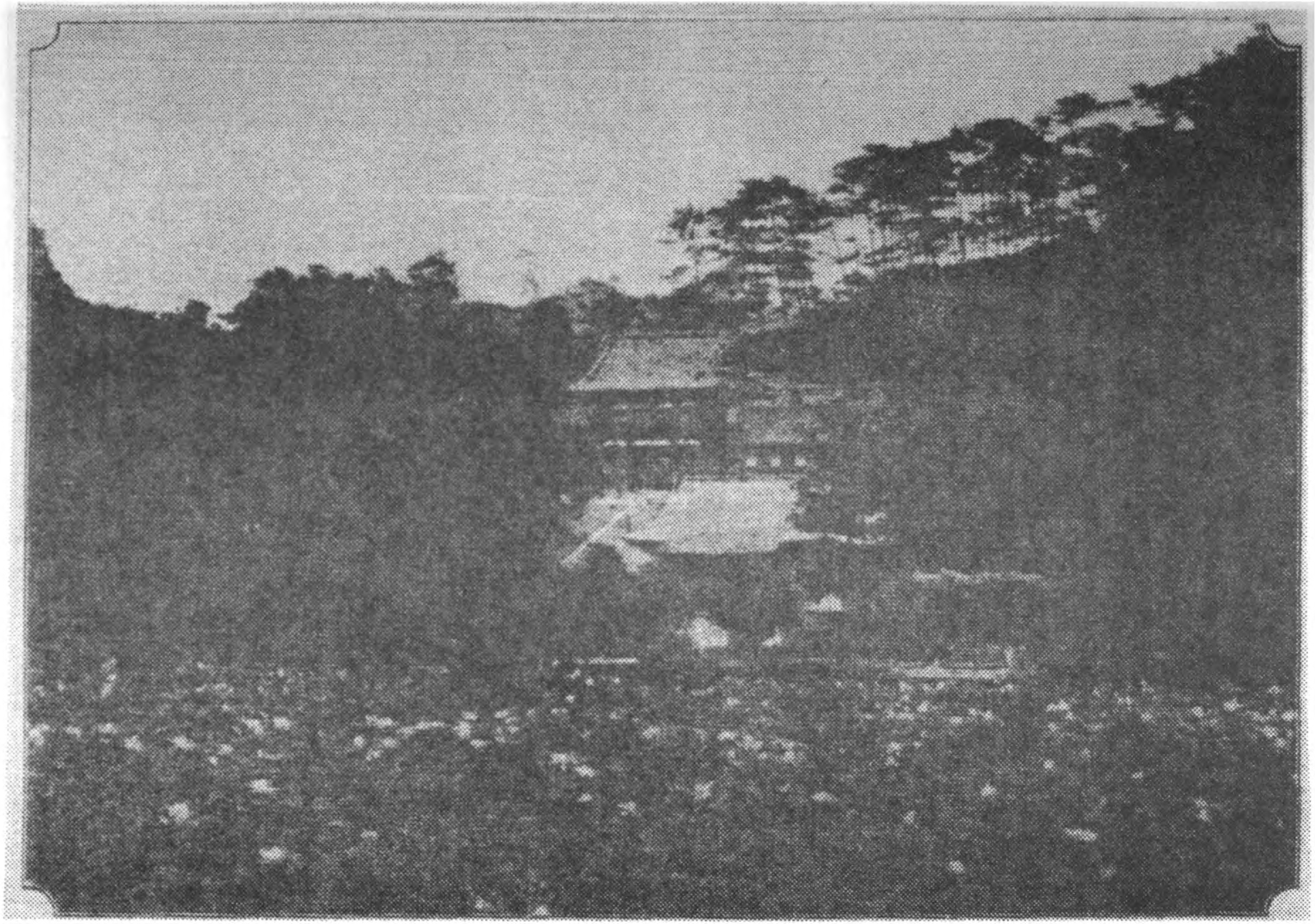
注意(養蠶家は養蠶操作の際洗手に之を用ゆれば消毒の効あり御試用を乞ふ)

發賣元 鈴木長兵衛

東京市日本橋區岩附町(東京衞生商會)

特電話本局一三六番

●賣捌所は各地の藥店〇賣藥店に有之候



鎌倉鶴岡八幡宮蓮池



淸國風俗（俳優）

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

定價 壹袋壱錢
罐詰五錢



此名題洗粉は皆々様の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の摸造品澤山顯はれ候に付弊舗製造品には袋の裏面に芝居櫓形の登錄商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覽の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也



東京淺草區黑船町
梅素亭謹製

◎東京女醫學校廣告◎

本校ハ明治卅三年ノ創立ニシテ爾來志望者日ヲ追フテ增加シ漸次改善ヲ加ヘ校務益々整頓セリ此際一層ノ擴張ヲ計リ汎ク生徒ヲ募集ス志望ノ姉妹ハ至急入學願書ヲ差出サル可シ

嚴重ナル監督寄宿舍ノ設アリ

東京市麴町區飯田町四丁目九番
東京女醫學校事務所

東京市麴町區飯田町四丁目九番地

婦人科
小兒科
專門

女醫 鷲山彌生

（御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候）

新奇發明 **増酒資料**（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍増し（即ち貳斗）となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり

（附錄）腐敗酒直し法、味淋酒醤油三倍増法、

速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍増法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者ノ大有益案内……右今回披露の爲拾萬部限り**無代進呈**す酒造家の營業者にして望みの方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あるとを確證す（注意）本館の隆盛を羨み近時當館廣告に倣せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸商現はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝと勿れ：（當館は去廿壹年の創立也）

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授産館**

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雑多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製八拾錢特別製分壹圓五拾錢

東京市神田五軒町拾九番地 專賣元 **日新館藥房**

月やくだし 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止もする特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にても必ず忽ちキレーに**快通流下**す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃すると確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名稱に注目し購求におらん事を乞ふ



わきが（腋臭症）**根治確證新發見藥**

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる變なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増の事（電話下谷五四六番）以上貳藥

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

女鑑 第拾参年第拾七號

讀書に就て

如何なる書籍を讀むべきや、如何なる方法によりて讀書すべきや、との問題は、當今に於ける多數の學生が、切に解答を求めんと欲するところのものなるべし。滋養ある食物も、過食するときは胃腑を害せざるを得ず、有益なる書籍とても、徒に多讀を貪るときは、腦髓を疲勞し、精神を攪亂するなきを得ざるなり。況んや有益ならざる多くの書籍を讀むは、有害なる食物を食ふと同じく、遂に中毒の害を免かるべからざることあるに於てをや。

文豪エマルソン嘗てボストンの大圖書館に至り、書架に陳列せる幾千萬卷の書籍に對ひ、喟然として嘆じて云はく、かゝる無數の書籍の中に於て、如何なるものが、果して善良なるものなるか、思ふにその最も善良なるものとては、やうやく吾が書齋の四百を以て充たすに過ぎざ

らんと、卓見ある至言といふべし。古今東西の書籍は暫らく云はず。現今吾國に於て、日々に發兌せられつゝある新刊の書籍のみにても、一々眼を通さんとするときは、日もまた足らざるの憾なきを得ざるべし。是に於て、善良ならざる書籍を措いて、善良なる書籍を讀むの必要は自然に生せざるを得ざるなり。唯だその選擇と鑑別との方法の甚だ困難なるを覺ゆるのみ。

近ごろ公私の高等女學校生徒が、敎師に向つてその讀みて可なるべき書籍雜誌を指示せんことを乞ふもの頻々にして、敎師もまた一々新刊の書籍を讀了すべきにあらざれば、之が答には殆んど困窮せざるを得ずと聞けり。蓋し讀書の趣味を有する女學生が、幾多新刊の書籍に就いて、好讀の思を起すは、尤の次第にして、育成の責任を有する敎師が、早計に之に答ふる能はざるもまた無理からぬことゝいふべし。さればとて、何時までも答ふるところなくして、生徒の欲するがまゝに放擲せんには、一方には多讀を貪ぼるの弊を生ずると同時に、また一方には有害なる書籍を繙きて、之が爲に身心を害することあるを免がれざるべし。

今の書籍雜誌といふものを見るに、多くは少年少女の好奇心を利用し、巧みに之を挑撥して、その好奇に投せんとするものなるが如し、故に小說たると、詩歌たると、雜書たるとに論なく、先づその表紙と口繪とを美麗にして、人目を炫燿し、その内容また艶文麗詞を双べて、うまく

人心を眩惑せんとするに汲々たらざるなき也。少年少女たるもの、安んぞ之に對して、燃ゆるが如き熱をして、益々熱せしめ、沸くが如き血をして愈々沸かしめざるを得んや、古聖いふ血氣未だ定らざるときは、之を戒むる色にありと、今の小說、詩歌、雜書の類にして、戀愛を說かざるものあるか。男女相對の關係を離れたる淸潔なるものあるか。ア、輕佻の筆、浮華の文字の社會に害毒を與ふることそれ幾許ぞや。若し選ぶところなくして漫然之を讀まば、寧ろ初めより讀まざるの優れるに若かざる也。是に於てか、書籍の選擇鑑別は當今の我國に於て、頗ぶる大なる急務ならざるを得ず。

出版後一ヶ年なること。有名のものなること。己れの趣味に適することの三ヶ條は、有名なるエマルソン氏讀書の三則として、讀書社界の服膺に値ひするものなりと雖も、年少男女に向つては、俄に通用し難きものあるのみならず、一般讀書家と雖ども猶ほ滿足する能はざる點あるべし、予輩は、此の三則に傚ひて尤も簡便なりと信ずる讀書の三則を左に記して以て世の識者に問はんとす。

第一　發兌書肆を知ること　一概にはいふべからざれど、書肆從來の經歷によりて、粗々其發兌書籍の性質を知ることを得べし、試に東京に於ける多くの書肆に就きて、其の發兌せる書

籍雜誌の如何を究め見なば、甲の書肆には割合に眞面目のもの多く、乙には淫猥浮華なるもの多き等の類を知るに於て、甚だ難からざるなり。

第二　著者　無名の著作者を除きては、當人是までの著述の如何によりて、その新著述の如何をも大方は知り得べし。

第三　廣告文及批評　新聞の廣告文及び批評の輕々しく信ずべからざるは勿論なれども、誇大なる廣告に眞面目の著述少なく、浮華なる批評に、輕薄の書籍多きは、少しく注意するときは、自然に明白ならざるを得ず。

書籍は固に讀まざるべからず。しかも徒らに讀むは寧ろ讀まざるに若かずとせば、讀書豈に輕々しくすべき者ならむや。予輩は以上所述の條件を以て大袈裟にも讀書の三則といふの甚潛越なるを知らざるにはあらざれども、仍りて以て聊かにても讀書の指導たるに補ひあるを得ば幸なりと信ず。

要するに女子の讀物は、近來一種の流行となり、恰も雨後の筍の如く、日一日より多きを加ふると共に玉石混淆して殆んど識別すべからざる今の時に當りては、注意にも注意を加へて、徒らに多きを貪ぼりて、濫讀するなからむことを望まざるを得ざる也



法律上より見たる誕生

法學士　蒲生行藏

誕生の語、之を物質的に解すれば、人の始めて現世に出現するの事實を意味す。佛陀をして言はしめば、是れ偶然の出來事にあらず、此果其因、玄妙の理法、凡俗の得て窮知すべからざるものありと爲さん。誕生の語、其觀察點を異にするに從ひ、名別異の内容を有す。隨つて之が研究の目的も亦た同一なること能はず。然れども、此に吾人が誕生といへる題下に於て研究を試みんとする所のものは、社會共存の需要に應じて組織せられ運用せらるゝ所の所謂法律上の關係なりとす。是れ極めて趣味なき問題に屬すといへども、人苟も登化仙たらざる以上は、時に沒趣味なる問題も、また自家頭上必須の要に供せらるべきを信ず。乃ち此に本題を掲げて解釋を試みんと欲する所以なり。以下本題を普通の誕生及び異例の誕生の二項に區別して之を説かんとす。

普通の誕生

人の出生は法制上公に爲したる結婚に原因して懷胎し、且其婚姻中に分娩するを正當且普通とす。而して出生に依りて此に親子の關係を生じ、夫は父、妻は母、子は嫡出子たるの身分を取得し、且つ子は當然其父の家に入り家族の一員となるもの

とす。但し公に爲したる結婚とは、定規の手續を盡し、戸籍吏に屆出つることを意味す。苟くも此手續を盡さゞる以上は、たとひ親族故舊を會し三々九度の祝盃を擧ぐるも、此に所謂公の結婚にあらずと知るべし。

出生は親子の關係を生ず。而して法律は親子間に於て種々特別なる權利義務を認めたり。例へば、父又は母は、未成年の子に對し親權を行ふ權あり。親權は子の愛護及び敎育を司どるの權利義務を包含す。又親子は一般血族の關係よりして相互に扶養の義務を負ふものとす。故に棄兒又は老父母の遺棄等は、刑法上の罪人たると同時に、民法上別に親權の拋棄若くは扶養義務違反の責に任ぜざるべからず。親子間の特別なる關係は右の如しといへども、尙ほ出生に依り、此に社會一般に對する法律上の効果を生ず。私權の享有卽ち是なり。

我が民法、而かも其開卷第一條に於て、私權の享有は出生に始まると宣言し居れり。然らば人は出生に依りて私權を享有するものたることは明かなるも、其私權といひ、將た享有といふは、果して如何なる意義を有する乎。

私權の意義については、學說多岐、且其名稱の如きも、或は天賦權といひ、或は人類權といひ、學者の見る所に隨ひ必ずしも一定する所なしといへども、要するに、私權とは公權に對する用語にして、國民が國家施政機關の運用に參與するの權(官吏又は國家及公共團體の議員となる權の如し)を除くの外、各自の安寧幸福を保持するに必要なる總ての權利を指示するものなることは疑ひなきが如し。而して其主要なるものを擧ぐれば、生命權、名譽權を始め、身體、信敎、言論の自由等に關する權利は正に此私權の中に屬すべく、又此等の諸

權を圓滿ならしめる爲め民法其他の私法に於て保護する所の所有權、債權、特許權等も亦た均しく私權の範圍に屬すべきものたり。

人は出生に依りて私權を享有するものなり。享有とは私權の主體となることを意味するものにして、其權利を行使すると否とは全く別問題なり。故に赤兒の如きは、信教、言論の自由を始め其他の權利の主體たるも、之を行使するの能力なきが故に、自ら之を運用することを得ざるのみ。從つて私權を享有すといふも、單に名ありて其實なきが如しと雖も、法律は別に法定代理人の制度を設け、其の必要に應じ、赤兒尚ほ且私權を行使し得るの擬制を設く。

人の出生に依りて或る身分關係を生じ、其身分關係より特別なる權利を生じ、又一般社會に對しては、廣汎なる私權の發生を惹起すること概略上に述ぶるが如し。然り而して法は實際人の出生せざるに先だち、尚ほ出生したると同一の效果を認むる場合あり、語を換ふれば、私權の享存は、民法第一條に依り出生に始まるを原則となせども、法律は特殊の事情を斟酌して、未だ出生せざるものといへども、苟も懷胎の事實存在するときは、其胎兒を既に生れたるものと看做し、之に私權の享有を得せしむ。

我が民法に於て、胎兒を生れたるものと看做すべき場合は、損害賠償請求權、家督相續、遺産相續及び遺言の四件に限れり。即ち以下分說する所の如し。

(一)損害賠償請求權　民法第七百廿一條は規定して曰く、胎兒は損害賠償の請求權については既に生れたるものと看做すと。抑も本條の規定は、果して如何なる場合に其實用を見るべきか、今試み

に其の一例を擧ぐれば、人あり、他人の故意又は過失に依り殺害の不幸に遭ひ、偶々其遺妻は懷胎しつゝある場合の如き、其の胎兒は正に本條の適用に依りて保護を受くべきものたり。蓋し他人の故意又は過失に原因し、父子相見るに及ばずして、早く既に幽冥地を異にす。是れ人世の一大慘事たるは勿論、子は生れながらにして孤兒となり、最も神聖なる慈愛を以て滿たされたる扶養者、敎育者は、終生彼が想像にだも上らざる可憐の境遇に處せざるべからず。その損害の多大なるは更に喋々を須たざる所、此の如き場合に於て、若し胎兒の人格を認めず、從つて損害賠償をも請求するの權なきものとせば、その寡婦、その孤兒の不幸夫れ果して幾干ぞや。父はいかにして慘害せられたるか、寡婦は孤兒を擁していかに寄る邊なき浮世の悲鳴を揚げつゝあるか、其慘狀は或は文學者の好資料となることあるべしと雖も、斯くの如きは、社會的共同生存の要件たる法の忍ぶべからざる所、是れ實に法の胎兒に對し私權の享有を認めたる所以たらずんばあらず。

(二)家督相續　民法第九百六十八條に曰く、胎兒は家督相續については既に生れたるものと看做すと。家督相續とは、一言にして之を掩へば、戶主たる身分を取得するの謂ひにして、我が國法の家族制度を認むるより生ずる所の一現象なり。抑も吾人が日夕營々辛苦して以て一家の繁榮を希ふ所以のものは、獨り自己一身の安寧と幸福とを保全するを以て足れりとするにあらず、否其の子孫の後を慮るに出づるもの多し。然るに一朝自己の不幸に際會するや、其子未だ胎內に在るの故を以て、多年辛酸の結果たる家產は何人の掌に之を委すべきやを知らずとせば、異日出生すべき遺子の爲め

に不利益多きは勿論、死者の冀望にも全く相反し、殊に家族制度を認めたる法の目的をも達することを得ざるに至り、啻に私人間の利害關係に止まらず、延いて國家の公益をも害するの患なしとせず。故に法は家督相續に對し、出生に關する擬制を設け、以て胎兒の利益を保護し、先人の希望を滿足せしめ、併せて家族制度の主旨を貫徹せしめんことを期せり。

(三)遺產相續　に就きては、民法第九百九十三條を看よ。

(四)遺言　に就きては、同千六十五條に、何れも家督相續の場合と同じく胎兒を既に生れたるものと看做せり。而して各條項の精神は殆んど家督相續に關するものと同一に出でたるものなるを以て、重ねて此に之を述ぶるの要なきが如し。

(次回完結)

夏季料理のいろ〳〵

△鐵鉢味噌　一名鐵火味噌とも云ふ中牛蒡を二ッ割にして一分位の厚さに切り之を水に浸して垢を取り笊に上げて水氣を切りたる後胡麻の油を沸立てたる鍋に入れて之を煎め其中へ粒味噌を落し又砂糖を少し入れて掻廻しながら煮詰め別に豌豆を能く煎りて前の味噌と間交ぜにするなり△二色卵羔　先づ鷄卵を割りて黄身と白身を分け置き又寒天を水に浸して鍋に入れ水を差して沸立ちたる時に砂糖を投じ例へば鷄卵三個なれば寒天一本水一合砂糖五十目の割合となすべし扨此寒天の水半分を取りて前の黄身に交ぜて重箱に流し又白身の方は茶筅にて泡の立つまで掻廻し之に殘りの寒天水を入れ例の重箱に流したる黄身の上へソロソロ流し込むべし即ち黄白二色となりて口取及び茶受などに妙なり



ジョゼフィン皇后と黒奴の豫言

前田越嶺

嬋娟たる二八の少女、マルチニックに上陸するや、一黒奴あり、之を凝視すること久し。

少女『汝、我を凝視す、吾顏に何等異相ありや。』

黒奴『異相あればこそ凝視するなれ。』

少女『吉相なりや、凶相なりや?。』

黒奴『我が相る所にては先づ凶相なり、されども亦吉相なきにもあらじ。』

少女『我が將來は如何なりと思ふや、幸ならんか不幸ならんか?』

黒奴『御身の將來は不幸ならむ、されども御身は後日佛國の皇后となるべし。』

嗚呼此の二八の少女は讀者之を誰なりと思はるるや、ジョゼフィンは則ち是なり。

熟らジョゼフィン一生の境遇閲歴を察するに、黒奴の言は不思議にも一々應驗あり、いでや余をして其傳の一斑を語らしめよ。

ジョゼフィンは十歳に至るまで、マルチニックの大氣の中に自由に育ち、樹影の下に嬉々として戯れ遊び、空飛ぶ鳥と何の撰ぶところもなかりき。

十歳より初等教育を受け、傍ら音樂と舞踏を學

ひぬ、敎育と云ふ敎育は、唯是のみ、嗚呼是れ果して佛國の皇后、豪漢那翁の配偶として立つ可き資格ありと謂ふべきか。

十六歲の半ばにして某士官との結婚早く既に成立ち、是が爲に佛國に渡航せしに、恰も此時コルスより一少年來航し、ジョゼフィンと同時に佛國に上陸せり、嗚呼此の少年誰とかなす、言はずして知る、是れ那翁なることを、那翁時に年僅に十歲。

ジョゼフィンの初婚は資産の方面に於て幸福なりしが如くなれども、夫妻和睦の點に於て甚だ不幸なりき、黑奴の言は早や既に此時よりよく適中せり、夫婦の間に一男一女を擧げたるにも係らず、家庭春温かならず、屢々風波起り、一時は破鏡とまでならんとせり、鄕里に歸ること一回、空房を守ること果して幾夜ぞや。

夫は功名心に驅られ、妻と離れんが爲に、故さら戰場に馳奔し、其後政界に遊泳して議場に出入し、頓て罪を獲て夫妻諸共囹圄に鎖さるゝ身となりぬ、然れども此時初めて夫婦相愛の眞味を喫するを得たりとせば、不幸中の幸と謂ふ可きか。

乍併夫は遂に晴天白日の身となるを得ず、あはれ斷頭塲裡一片の露と消え果てぬ。

妻亦同じ運命を免る能はざりしに、不可思議なる事象は、意想外の幸運を開けり、一日ジョゼフィンが獄舍の窓を開かむとしけるとき、一婦人遙か彼方に顯れ、何やら手眞似しつゝ、頻りに上衣を打振りぬ、ジョゼフィンは一聲高く『ロブ』「上衣」かと叫びければ、例の婦人は首肯す、次に又石を拾取り之を示すにぞ、『ピエール』「石」かと云へば、婦人の滿悅言はん方なし、最後に婦人は上衣と石とを持ち、頻りに己が首を斬る眞似しつゝ、

欣喜雀躍、手の舞ひ足の踏むを知らざる程なるにぞ、ジョゼフィンは初めて玆に其意をさとれり、『ロブ、エ、ピエール』〔上衣及石〕即はち彼のロベスピエールも亦斷頭臺に上ることとならんと思ひしに、果せる哉獄吏は忽まち其報を齎し來りぬ、ジョゼフィンは、是に於て自由の身となるを得たり。

出獄後しばらく慈善なる婦人の家に寄食したるが、間もなく舊に復し、頓て馬車あり、邸宅ある身となりければ、日々の訪問者も益々頻繁となり、那翁即ち往年佛國上陸の際相互に顔を見合せたる美少年との交際は實に此時に結ばれたり。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

那翁の眼光烱々として人を射ることは、人の皆能く知る所、然れども其眼の口ほどに物言ふことは、獨りジョゼフィンの能くさとれる所、交際は忽ち變じて交情となり、交情一轉して遂に緣談となりぬ。

此時妨ぐる者あり、曰ふ、年少の軍人、產なく資なく、將來亦恃み尠し、一たび戰場に斃れなば、御身は玆に再度の寡婦、子女までも不幸に遭遇するに至らむ、況や年齡に於て不相當をやと、然れども二人の交情は妨碍を排して遂に合巹の式を擧ぐるに至りぬ、幸か不幸か、黑奴の言是に於て自ら明なり。

初め那翁は非常にジョゼフィンを愛せり、戰地に出るときにも、ジョゼフィンを携え、彼の伊太利に出師せるときにも、ジョゼフィンを招きぬ、一日見ざれば千秋の思ひを爲す程なれば、ジョゼフィンが時に冷淡の狀を示すときは、那翁は大に之を悲み、是が爲には、戰場の疲勞よりも健康を害ふこと多かりしと云ふ、甚しきはジョゼフィ

ンの不機嫌の爲に、顔色蒼然、形容枯槁、敵其死の近きを卜して竊に祝杯を擧げて歡びたることありと云へば、亦た以てジヨゼフィンの一顰一笑が如何に那翁の心身を司配したるかを知る可きなり。

世、ジヨゼフィンを以て才徳高尙なる婦人となす者あり、謬れり、勿論交際の妙はあり、姿色の美はあり、閑雅の風亦全く之なきにはあらず、音聲の絶妙なるは、蓋し其が天禀に出づるものなり、乍併其の識徳に至りては大に缺如せり、那翁も漸やく其の無識を認むるに至りて、厭惡の念早く既に玆に萌せり。

那翁は着々成功して遂に皇帝の位に昇りしかば、自然の數によりてジヨゼフィンも亦玆に皇后の位にあげられ、佛國臣民歡呼塲裡に奉迎せられたり。

幸運の時には萬事幸運ならざるはなし、帝が時の羅馬法王ピオ第七世より皇帝即位式を受くると同時にジヨゼフィンも亦同法王の前に皇后戴冠式の特典を得て、其の滿悦言はん方なく、天に欣び地に喜び、永く其冠を紀念とし、帝と會食の時にも之を戴き、亦此冠のあらむ限りは決して離縁の憂なしと思ひたり。

然れども后の無識と又其の奢侈とは最早充分帝が厭倦の情を買ふに價せり、皇后の位にあげられ、臣民の祝賀を受くるとき、之が答辭を暗誦すること能はずして、大なる紙に答文を記して之を手に携帶したりとは、何等の無識ぞや、帝之が暗記を强ゆるも、后は之を以て一生の大難事とせりと云ふ、若夫れ其の奢侈に至りては言語に絶す、其の費す所遠く收入以上に達し、美玉珍寶は價を

問はずして之を買求め、是が爲に帝は年々六十萬法乃至七十萬法の借金を償還し、破鏡の時の如き二百萬法の多きに上れりと云ふ、亦以て其の奢侈の如何に甚しかりしかを推知するに餘あるにあらずや。

其外帝の禁ずるにも係らず、卜筮者を近づけて、密事を語り、吉凶を卜せしむるを常とせるも、亦是れ帝をして厭惡の情を起さしめたる原因の一なりとす、果せる哉是れによりて離緣は遂に行はれたり。

盛者必衰、會者定離、逢ふは別れの始なりとは之をジョゼフィン皇后の身に於て見る、帝の心は疾く既に之を離れたり、唯未だ斷乎たる決心を顯はすの機會なきに苦めり。

媢怨、嫉妬の有無は兎も角も、帝后相對して默然一語もなき事は屢々之ありたり、但だ后の涙は每に勝を制したり。

然るに機會は不慮の時に出來せり、一日帝遊獵より歸り、階を昇りて急ぎ后の室に入りしに、不運なる哉室には卜筮に巧なりと云ふ獨逸の間諜ヘルマンなる者（英國の遣す所なりと云ふ）と嘗て一たび帝より門外に追出されたることありし化粧品を商ふ婦人との二人居れり、帝は之を見て赫として怒り、霹靂一聲叱して曰く、

『何事ぞ、わが命に背くの一に此の如く甚しきや。』

后は戰慄して答ふるに辭なかりしが、那翁の母に書して帝に謝せむことを請ひたれども、后の室に間諜ありと聞きては、帝の身上の一大事なれば、その書をば其儘直に后に返し、且語りて曰ふ、

『事茲に到りては、帝も斷然決する所なかるべか

らず、啻に佛國のみならず、歐洲の安危さへ此に繫れり、離縁は必ず避く可からず。』

是に於て帝は后の許に到り、其手を握りつゝ、遂に離婚の宣言を下せり。

『ジョゼフィン、吾は汝を愛す、汝も亦之を知るなるべし、然れどもわが命運は朕の意志よりも强し、わが最愛の情も佛國の利益の前には默せざるべからず。』

后は今となりては諦むるより外道なしとや思ひけん、豫て期したるものゝ如く。

『多言は要なし、能く御意を了しぬ。』

されど流石は婦人なり、言未だ畢らざるに、茫然自失、倒れて立つ能はず、帝自ら扶けて之を其室に携れ往きぬ。

嗚呼是れ悲慘の境遇、吾は是より以上を語るを欲せず、若夫れ彼の那翁が政畧上の野心に驅られて、后を離縁して、澳太利の皇女マリー、ルイズを娶りたりと云ふが如き別箇の問題に屬す、又ジヨゼフィンが離婚後如何に生活したるや、果して新皇后を恨みたりや否や等の問題の如きも、余今玆に之を論ずるの意なし、余は后の全傳を綴らんとせるにあらず、但だ黒奴の言、不思議にも后の境遇に一々適中して殆ど其が一生否少くも半生の歷史を約言したるものゝ如くなるに感じて、斯くは記しつ。

（完）

老女瀧野の書簡

大林義方

石州濱田の城主松平武聰朝臣の夫人比佐子の貞操につきては、嘗て女鑑誌上に掲記するところありしが、夫人に仕へて艱難を共にしたる老女瀧野の書簡を見るに、能く當時の情勢を悉して、

文章また並々ならねば、今左に掲げて讀者の一覽に供せんとす、尤も此の書簡は先號に記したる慶應二年丙寅の六月幕府再び兵を擧げて、長州を征討せし時、長兵連戰幕軍を破り、進んで濱田の城に迫りし際、鳥取より江戸の咲尾といふ婦人へ贈りたるものなり。

幸便承り候まゝ鳥渡申上まゐらせ候、まづ〳〵上上樣御揃遊ばし御機嫌よく被爲成御座候御事、御めで度おはしまし候、左樣に候へば、此度濱田の大變定て御伺被成候事誠に〳〵恐入候事、何とも申上樣もなく、筆紙に盡しがたく、兼てより御近くにわのよふな御事御座候事故、如何と御案じ申居候得ども、只今頃個樣の御事とも存し不申候處、俄に樣子相替り、増田と申所へ押寄せ參り、其所にて軍始り、御家山本半彌殿始打死三四人、其外けが人も多く、見事な働きには候へども、何分御人數少く、殊に増田の町人、いつの間にやら長人に組し、手引を致し候との事と、其後この方大不都合敗軍に相成、誠に〳〵殘念の御事、其後戰の度毎に、御都合よろしからぬ御事ばかり、因州樣、雲州樣、福山樣御人數も餘程の働きに候へども、長州奇兵隊と申す浪人ども、命知らずの惡もの、御咄にも成申さぬにくき仕方誠に〳〵殘念、追々御領分へ攻入り、内田と申す御城より一里計の所へ攻來り、其日の戰ひ大筒の音やむ間なく、響き渡り、黑煙り立上り候を、居間より見物いたし、胸がはりさく計り、だん〳〵押よせ參り、七月十五六日頃は御城下ゑびす町と申す町方まで入込參り候由、何分御城むづかしく相成候に付、君樣ばかり御立退と相極り、十七日の夜、日の暮るをまちて御水門より御船にて御立退の御積りの處、急に御前には、兼て濱田の士に

成せられ候思召、殿様と御はなれ決して〱立退ぬと御意遊ばし、かれ是だん〱夜もふけ、御家老も二三度迄、御目通り願ひいろ〱申上られ、何か御内用も御座候て、よふ〱御得心遊ばし、御立退に相成、御家中のものゝふり合にならせられ、御髮は御櫛巻木綿御ゆかた召せられ、君様御ふだんのまゝにて御供女中も少き方よろしき由、右に付江戸より御供いたし候もの計り、留崎始、私、増江、千代田、おふみ、おそま、おのぶ、並留崎、私部屋方二人合九人御供、男は表御用人佐々木丑藏一人、奥御用人吉川庄三郎一人切、若殿様御供尾崎秀之丞、御近習吉田又右衛門、御醫師富川りうたん一人、てふけいじと申表の人二人、夫切にて御立退き、御船にて出候處、ふるきわたりにて夜もしらみ、よう〱五つ頃とふかねへ參り候處、風あしく御船浮つ沈みつ、先へは少しも參り不申、船の中にて大に氣をもみ、御前様には御後悔なま中立退長人にとらはれ候へば大耻辱と、御心配もしもの節は一同覺悟を極め、殊に船にゆられ、一ど〱大よひ、皆々病人に相成、御乳も病人と相成、御乳少しも不出、若様には御むつかり遊ばし、誠に〱致方なく、大困りの處、御出入の桶屋參り、色〱と御介抱いたし呉、飴を調へ參り候に付、其飴を紙にくるみ、若様御手に持せ上げ候へば、御よろこび遊ばし、すは〱とお吸遊ばし、其かなしさ申上様もなく、夫より船頭に幾人増にても宜敷、是非〱御船先へ參り候様申付、追々奥浦を越へ、わき村へ上り、休息候事と相成、脇村へ上り、桶屋の世話にて、其村の八左衛門と申庄屋へ申込候處、其庄屋至て深切に世話いたしくれ、家内若様へ御乳上げ、彼是にて晝九つ時過にも相成、如何いたしたら宜敷や、兎

も角も若様は陸を入らせられ候方御乳の都合もよろしく所々にて貰ひ乳致し候ても四五里は參られ候はんと、秀之丞御だき申、陸を參り可申哉と申聞候に付、どうぞ夫がよろしく私も若様御供致し度と、咄し居候内、其海邊へ矢はり親船にて殿様御立退き遊ばし入らせられ御不快方御船の中に御床をのべ、御寢入らせられ候、御供は生田小膳、竹腰杢之丞、小出新平、吉田安太郎、表役三宅斧太郎、てふけいじ二人右七人の御供にて入らせられ候處折よく雲州蒸滊船、濱田浦より雲州へ歸り候蒸滊船の由、右に出逢、早速御賴被遊候船大將速に承知、直に右蒸滊船に御乘移り被遊候處、先より小出新平御使にて御前様、若様も蒸滊船に召させられ候様仰進せられ、雲州よりも蒸滊船の人々、小船に乘り御迎に參り候故、直に其小船に召され、蒸滊船に乘移り、初て御三方御對面、御供の一同生拾ひ致候心地、天のたすけ、大社様の御利益か、只々涙のみに御座候、右の譯にて急の御立退き、殊に目立ぬ様にと申事故風呂敷包一つも出し不申、御上はじめ着たまゝ十八日の八つ時頃蒸滊船へ乘り、其暮方雲州きつきと申、大社の近所へ御着遊ばされ、雲州よりは、きつきに御固も出居候事故、右の御人數、御跡警固いたし、高張提灯、御三方様は御駕籠にて、きつき御本陣へ御着被遊候處、雲州御人數にて御固、夜中廻り御手厚く御世話被進、十八日の夜より二十二日迄御逗留、猶又きつきは海道のはし近故雲州松江御城近へ入らせられ候様と、度々御使者進せられ候故、廿三日朝きつき御出立、計田と申所へ御一宿遊ばし、廿四日七ツ時頃、松江の御城近へ御着遊ばし、御逗留に相成申候、因州様にも御案事被遊、日々御見舞御使者被爲進、殿様には濱田近く被爲入候

方御宜敷候えども、御前樣若樣には因州へ御引取、御世話被遊度由仰進候に付、御前樣、若樣には因州へ御引取、御世話被遊度由被仰進候に付、御前樣、若樣には因州へ被爲入候方御宜敷との儀、御家老初より申上、御據なく御前樣八月十日雲州御旅立、八月十二日因州鳥取へ御着の御日積の處折節因州雨降りつゞき大水出で、御家中、町方、在方、處々より家々流れ、けが人多く有之由、御前樣御住居に可被成、御茶屋も樣の上まで水上り、御住居相なりかね候に付、御茶屋御繕ひ出來迄、勝見村と申鳥取より三里も放れ候處にて、御逗留被遊候樣申參り、十日より十五日まで御道中被遊、いよ〳〵翌日は鳥取と申處にて御逗留相成、さてさて御不都合ばかり、殊に殿樣御不快故留崎、増江雲州へ御殘し置、御前樣若樣の御供は私、千代た、おふみ、おそま、おのぶ跡は御雇ひ御乳ばかり、御無人にて鳥取にさへ參り候得ば、御人も澤山とぞんじ候處、御途中にて御逗留相成、御不都合いたし方なく、何に致し候ても氣ばかりもめ、御察し被下度、勝見村と申御茶屋へ山浦樣、勢の川樣、御待受として御出、二夜御逗留いろ〳〵御世話上られ、私どもはじめ初て御めもじ致し、御嬉しく御親切樣に、よふ御世話成下され戴き參らせ候、御前樣十日の朝松江御出立、十五日迄御道中遊ばし候處、十五日朝より少々御胸痛み、御かろき御かくらん樣の御樣子、御途中にていろ〳〵御藥あげ候處、御吐瀉被爲在、夫にて御痛みは御薄らぎ被遊、夫より御駕籠に御ねかし申上、勝見村御泊まで被入候處、今に御胸御痛遊ばし、御あばらより御背中、御貝から骨並兩御うでまで、御いたみ御難儀遊ばし、見上候處とんと風しつの御容體、御醫師へ何の御病氣と承はり候處、先づ御時候當りに、御さそひ出し、一つには因州へ入ら

せられ、御安心候氣のゆるみより、日頃の御心痛御からた中に出させられ候はん急には御なをり不被遊候得共、深御案事申上候御事にも無御座、御快くならせられ候事と申され候まゝ、少しは安心いたし居まいらせ候、若様は誠に〱御丈夫様にて御道中も御おとなしくわらせられ、さりながら折々に御駕籠御わき遊ばし、一里位づゝおんぶに御なり遊ばし、皆〱大くたびれに御座候、水戸様へは、六月より御文も出し不申、長州一條にて五月中より、定飛脚も出不申、夫ゆへ存外の御無沙汰様に相なり、殿様の御不快神山様までなりと、御内々申上度と、文認めしまひ置、御飛脚の出るを日々待居候處、御表は大混雜、御飛脚どころでなしとしからられ、其後御便りのみ相待申居候へども、一向出不申、先様より御便りは、六月の分も届き參り、七月七日も夕方御便り着のところ、大取込の中にて封もとかず、其まゝ燒失に相なり、何とも申譯無御座、御無沙汰さまに相成り、さぞさぞ御案事、何とか思召しもやと恐入參らせ候、此旨是非〱福岡様、高崎様、神山様まで鳥渡御文さし上、此方様御様子委敷申上度ぞんじ候處、無人の中にて、御前様御不快、文認め候間なく、よふ〱此文亂筆ながら認置、山崎様へ伺候處、因州様より定飛脚二十日出との事に付、山崎様へ御頼申まいらせ候、此文届き候はゞ御まえ様より、御文御認め福岡様、神山様へよろしく御申上げ下されたく候よふいたゝき度御願申上まいらせ候、來九月はどふか〱都合いたし文さし出度心得に御座候、鳴瀬様へもよろしく猶澤野様へもよろしく頼上まいらせ候委敷申上度候得ども何分文認兼候まゝ、浦野様へも此文御見せ被下候よふ御頼み上まいらせ候時節とは申ながら上下とも宿なしに相成御察し下さるべく候、因州様にも誠に御手厚く御世話進ぜられ、一入難有安心いたし居まいらせ候めで度かしく



通俗土佐日記（承前）

北海道廳師範學校教諭　兒玉彌三郎

斯くて、舟引き上るに、渚の院といふ處を見つゝ行く、其の院、昔を思ひ遣りて見れば、面白かりける處なりけり、後方なる岡には、松の木どもあり、前の庭には梅の花咲けり、こゝに或る人の曰はく、是れは昔、名高く聞えたる處なり、故惟高親王の御供にて、故在原業平の中將の、世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心は長閑けからましと讀める處なりけり、

○舟引き上るに　とあるにて此の邊より水深くなれること思ふべし、是れより後には水の淺きことをいへる處なし、

○渚の院云々　渚の院は河内と攝津との境にて枚方の北にありたるなり、伊勢物語に「昔惟喬のみこと申す親王おはしましけり、山崎のあなたなる水無瀬といふ處に宮ありけり、其の時右馬頭なりける人(業平)を、毎に率ておはしましけり、時代經て久しくなりにければ其の人の名忘れにけり、狩は懇ろにもせで酒を飲みつゝ大和歌にかゝれりけり、今狩する渚の院の櫻殊に

面白し、其の木のもとにおり居て枝を折りて挿頭に挿して歌讀みけり、彼の右馬頭なりける人の讀める、世の中に絶えて櫻の無かりせば春の心は長閑けからましとなん讀みたりければ、或る人散ればこそいとゞ櫻は愛たけれうき世に何か久しかるべきと讀みて、其の木のもとは立ちて歸るに云々」とあり、

○昔を思ひ遣りて見れば　とは彼の伊勢物語にある事などを思ひ遣りて見ればといふなり、

○面白かりける處なりけり　とは昔の面白かりしを思はしむるが主にはあらで、今荒廢せる樣を知らせんが爲めなり、

○松と梅　とを特に記したるは、松は常磐樹にして梅は其の花昔に變らざるが爲めにて、是れ等のみ昔を存したる樣をいふにて荒廢を歎きたるなれど、表面には唯景色の面白きを賞する樣に詞を遣ひて、其の實、惟喬親王の不遇に同情を寄せたるなり、陶淵明の歸去來辭に「三逕就荒松菊猶存」といへると同趣なり、

○こゝに或る人の云々　是は、記者、女なれば、斯かる古事も知らずして唯他人の語りしを聞きたる樣に書きたるなり、

○故惟喬親王の云々　惟喬親王は文德天皇第一の皇子、母は紀名虎の女靜子、天皇深く親王を愛し給へども、親王は紀氏の出なるに、時の太政大臣藤原良房の女明子女御の腹に、第四の皇子惟仁親王生れ給ひしを以て、良房を憚り給ひて御心を枉て惟仁を皇太子に立て給ひければ、天皇崩御の後、親王は叡山の麓なる小野里に引き籠り、詩歌に心を委ね俗塵を避け給へり、在原業平嘗て雪の朝親王を訪ひまつりて、忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪踏み分けて君を見ん

とは述懐せしに、親王は夢かともなどか思はんうき世をば背かざりけん程ぞ悔しきと答へさせ給へり、世を詫しく過ぐし給ひしこと察するに餘りあり、斯くて寛平九年二月、年五十四にて薨ず、世に小野宮又は水無瀬宮と稱す、是れ等の關係より察するに親王の母は紀姓なれば、紀氏が之れに同情を寄せたること明白ならんには、當時に憚りあるを以て態と上文をも唯昔を思ひて見れば面白き處なりとのみいひ、此處も亦此の親王並びに在中將の昔を人の語りたるに爲して餘處々々しく書きたるなり、

○故在原云々　業平は阿保親王の子にして、其の室は紀名虎の孫なれば、惟喬親王とは姻戚の間柄なり、紀姓は名虎の父祖までは世々納言をも勤めて名家なりしに、有常以後轗軻不遇、僅かに受領に終りしにても藤氏の權勢に壓倒せられしことを知るべし、畢竟紀友則、貫之等の文學を以て著はれしも、仕途の望みなきに依りて却つて志を藝苑に騁せたるが爲めなるべし、斯かれば業平も親王薨去の後、世を厭ひて其の行ふに檢束なきに至りしなり、

○世の中に云々　の歌は、櫻といふものあるが爲めに、長閑けかるべき春の人心も、其の咲くに付け、散るに付けて靜かならぬを歎けるを表とし實は、櫻を以て二條の后に擬したるなり、二條の后は藤原良房の兄長良の女高子にして、良房が家の權勢を固めんが爲めに、清和天皇(惟仁)の女御と爲さんとせしとき、業平之れに慇懃を通じて一時其の入内を妨げたることありし人なり、

今、興ある人、處に似たる歌讀めり

千世經たる松にはあれど古の聲の

學藝

寒さは變らざりけり、
又或る人の讀める、
君戀ひて世をふる宿の梅の花昔の
香にぞ尙ほ匂ひける、
といひつゝぞ、都の近づくを喜びつゝ
上る、

○今興ある人　とは此の時宜を空過せず歌を讀みなどする人といふ程の心なるべし、是れ等も上に述べたる如く、總て彼の親王の不遇に同情を寄せ、且つ自家の歎きも添ひたるを、さもなき體に書きたるなり、

○處に似たる　とは此の渚の院に相應なる歌といふ心にて、塲處柄至極適當の歌といふべきを、迫らずして斯く似たるといへるなり、

○千世經たる云々　此處の松の皆古木なるをいふにて、兼ねて彼の親王の在しゝ世に照らさんが爲めなり、

○古の聲の寒さ云々　千世の昔松の聲の寒かりしまゝに今も尙は寒しといふにて、懷古の情勃然として禁じ難きをいへるなり、

○一首、松の久しく識らぬことを歎じたる由をいひ、然して松に比すれば甚だ近き世なるにも拘はらず、此の院の斯く荒れ果てたるを深く悲める心なり、即ち親王に同情を寄せたると同時に身の不幸を歎きたるなり、

○君戀ひて云々　君とは彼の親王を指せるなり、梅の花が君を戀ひつゝ世を經るが故に、昔にはひし香のまゝ今も變らず匂ふことよとの意なり、香に匂ふとは香で匂ふの心にて、匂ふを香のことゝせるは轉じたるなり、何にても槪して色に光澤あるをいふにて、萬葉集などに艶の

字をにほふと讀める心なり、故に香に匂ふとは香の浮き立つに伴ひて色に光澤の立つ樣をいふなり、此の歌後撰集に讀人知らずとして入れられたり、

○一首、無心の梅を有情の物に見立てゝ、其の、昔を戀ふる爲め今も變らず香に匂ふを感じたる心にて、眞意は斯く梅をして昔を忍ばしむるに託し、以て親王の不幸を悲みたること前の歌に同じ、

○といひつゝぞ　は上るに續くにて都の近づくを喜びつゝは挿入せるなり、斯く言ひつゝ且つ都の近づくを喜びつゝ上るといふにて、主なる渚の院のことをば客の樣に書き爲せるなり、

夏季料理のいろ〳〵

△揚出し豆腐　豆腐を算木に切り布巾の上へ載せて水氣を取り之を饂飩粉に包みて沸立ちたる胡麻の油の中に入れて揚げ醬油味淋煮出しを薄く割りたる汁を其上より掛けおろし大根を添へて出すなり

△紫蘇飯　紫蘇の葉を細く刻みて鹽を少し振掛け之を布巾に取りて汁をザット絞りたる後鍋に入れて煎り干かし飯を櫃に移す時前の紫蘇を振込むべし

△微塵豆腐　豆腐を微塵に切り水に浸してあくを取り更に湯にて温め置き濃き煮出しに醬油を强目に割りたる汁の中へ入れて煮立て器に盛りて出す時おろし柚子を添ゆるなり

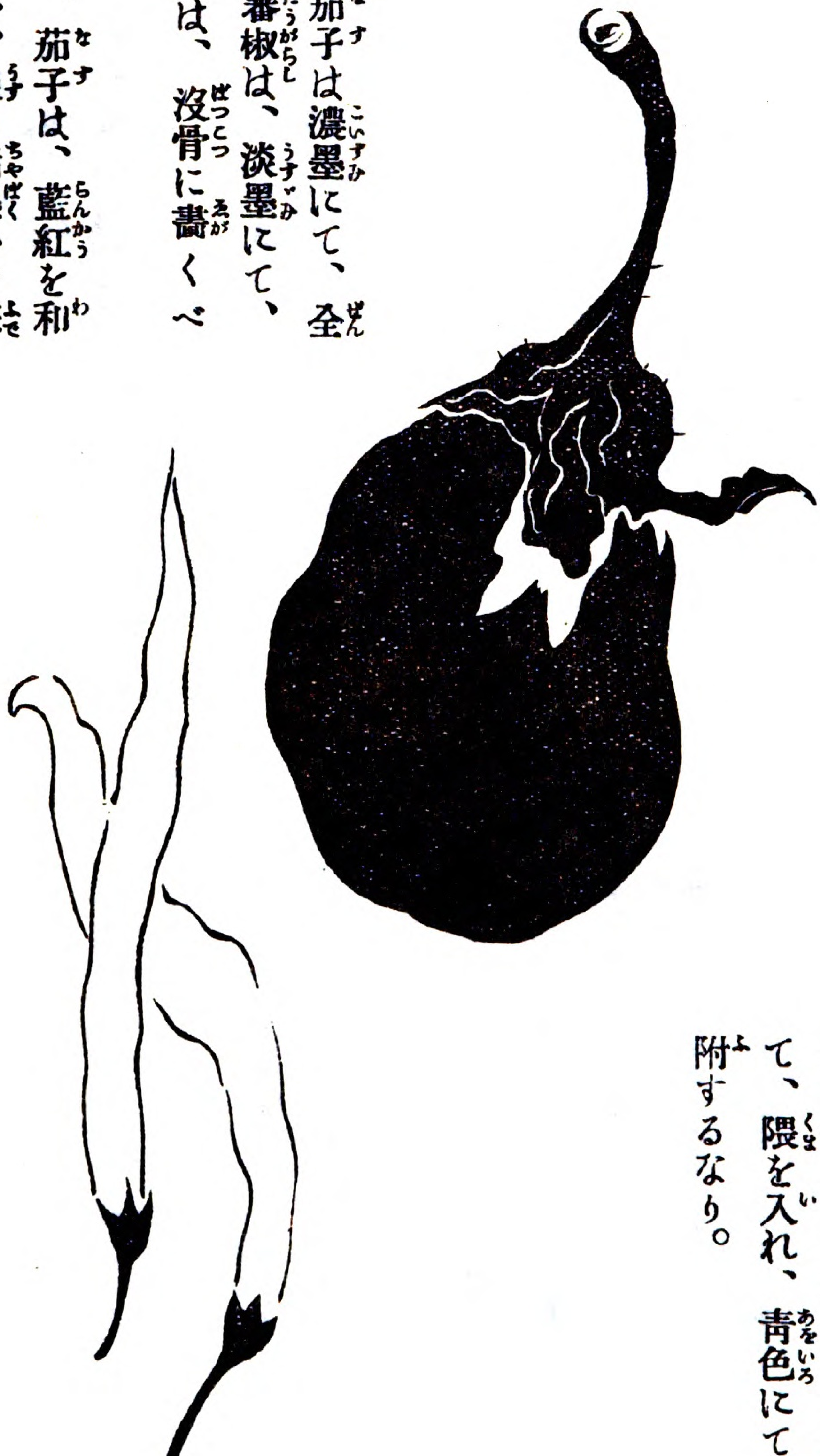
學藝

和畫通信講義

山崎隆子

墨畫にては茄子は濃墨にて、全部を書き、蕃椒は、淡墨にて、勾勒に、蔕は、沒骨に書くべし。

彩色にては、茄子は、藍紅を和したるものか、淡き赭墨かを筆



に含め、先へ充分に濃墨を附して書く。蕃椒は、通常の朱にて書き、乾きて後ち、凹形に從ひて、朱と胭脂とを和したる鮮紅色にて、隈を入れ、青色にて、蔕を附するなり。



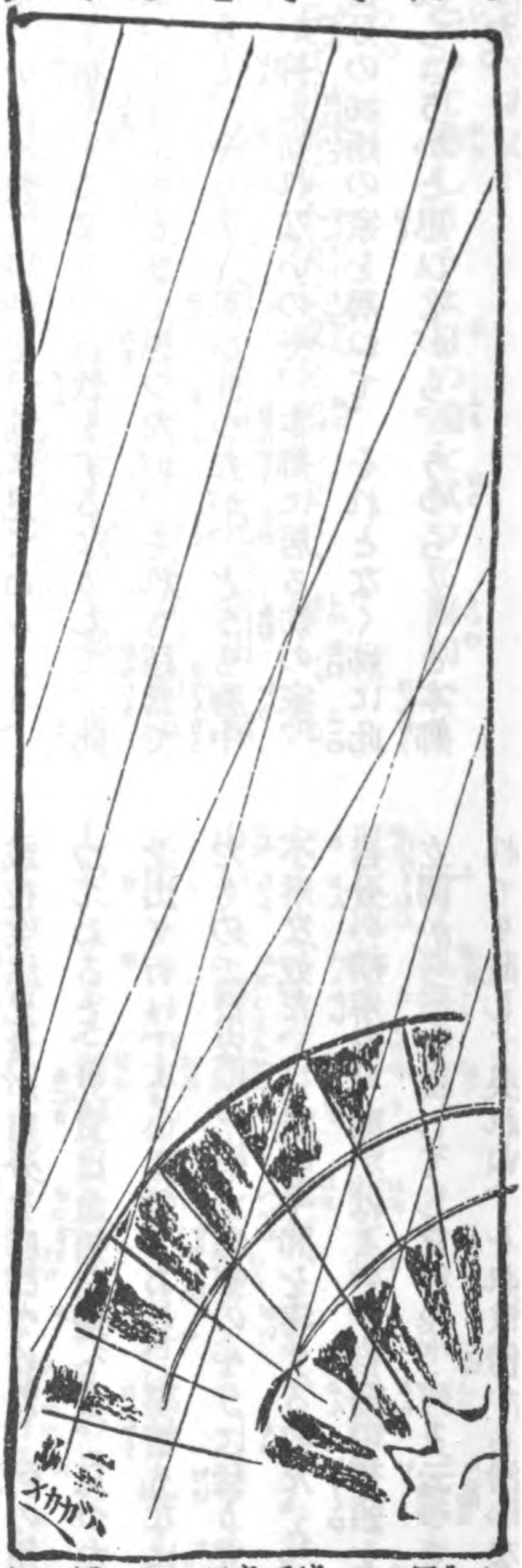
嫂物語（つゞき）

田村松魚

夫婦仲の好い程世に麗はしいものはない、兄貴の一家は頗る平和で無事で、朝夕笑樂の間に暮してゐて、自分もこの靜平な家庭に起臥し、兄と嫂の世話で、君も御承知の某學校に通つてゐたが、聽て一年二年となると、どうも嫂の仕草に腑に落ちないことが目につく、自分は極く單純な淺薄な考へを持つた男で、物事の裏面へまで立ち入つていろ〱と解釋する程の腦髓を持つてゐない男であるが、その單純淺薄な我が腦にさへも不思議と思はれるやうな事が、どうも毎々ある、一家の妻女としては、どうも陰陽のある致草だ、公明正大な行爲とは如何しても認められぬ、といふやうな事、例へば兄貴が朝出勤をすると、直ぐ嫂は近所に住つて居る里へ遊びに行く。その里といふのがさまで素性の惡るい家ではないが、大勢の家内で、嫂の父といふのは區役所の極く下の役人といへば人聞は好いが小使同樣の果敢ない勤務、母は此頃病身で平生は臥てゐるといふ始末、妹やら弟やらといふものが三四人もあらうといふのだから、云はずと家計は大の不如意、だから毎々それを氣の毒に思つて兄貴が心づけをする、正月と云ひ、盆と云ひ、これをお父上樣に、これをお母上樣に、妹に、弟にと云つて、兄貴としては氣のつ

き過ぎる程に目を掛けてやつて居るにも係はらず、嫂は兄貴が出勤するといふと、里へ行つてしまつて、大概半日位は何をしてゐるのか歸つて來ない、自分も學校に行くことだから能は知らぬが、下女の梅といふのから聞いたり、また午前は多く休みであつたりするのだから、餘り不思議に思つて能く注意をしてゐると、矢張り左樣だ、さういふことが每々あるにも係はらず、或時はこつそり風呂敷づゝみに自分の衣物や兄貴の衣物なぞまでも包み込んで、それを持ち出す、兄貴の月給は何處へ何うなるか、家政は凡て妻任せで、一向さういふ事は分らぬ、外交的の手腕さへあれ位だから、家政の切り盛は素羽らしいものだらう位に思つて、信じ切つてゐる、で嫂が帶が欲しいと云へば、二つ返事、指輪が流行おくれになつたから、細輪のルビ入のが欲しいと云へば、それも掉頭を縱に振るといつたやうな調子で、女房の事と云へば、それこそ嫌を云つたことのない兄貴、小遣帳を月末に調べて、ちよつとマア洒落にでも算盤をあたつて見るといふやうな事は、とてもしないから、家は暗闇になつても晩酌の膳のめぐりに新形の空氣洋燈が點つてゐれば、何處までも明るいことだと安心しきつてゐる。所が實際は前申すやうな次第で薄暗い所がある、月末にさほど兄貴が酒量の大いでもないのに、酒屋の小僧に斷を云つて返したり、肴屋に十四日まで待つて呉れの、薪屋に當月は不時な物入があつたからの、なんのと、少しでも拂うまい、出すまい主義にして、表札や玄關に對しても少しはきまりの惡るい程な斷りやう、それを此方の四疊の書生部屋で聞いてゐる自分は、何とも云へぬ嫌な思ひをして、もし、那樣いふことを兄貴に聞かせたら、嘸ぞ驚くこと

でおらう、また衣物を持ち出したり、一日も家を留守にして、兄貴の歸つて來る時分になると、そ知らぬ顔で、澌し込んで歸つて來て縫ひ掛けた羽織か何んぞを、さも〳〵忙しさうに縫つてゐたりするのを見たら、それこそ一驚を喫することであらう



ア、一層自分は此家の爲を思ひ、兄上の身を思ひ、此の不埒なる所業を密かに兄上に告げやうか、さなくば姉上の身の爲め、弟の義務として、忠告を試みて、それを聞き入れぬ後には止を得ぬ、明瞭に此の次弟を兄上に申し出て屹度した取り締りをする方が好からうか、と斯う思ひはしたが、イヤ〳〵なまなか餘計な口を利いて、一家の平和を傷るやうでは却つて一家の不爲になる、此所は先づ默して、じつと見て居る所で利發な姉さんのことだからどんな目論見があるのかも知れぬ、滿更なことを云つて、飛んでもないことになつては却つて此方の耻、また兄上にしても信じ切つてゐるのに、突然自分が斯ういふ事を云つた所で、その言葉を信じては呉

れまい、默するに如かず〳〵、と斯う思つて、じつと考へ込むのが常であるが、此時の不快さといふものは實にないので、歯がゆいやうな自烈たいやうな、腹立しくもあれば恨めしくもある、エヽ、一層斯ういふ不快な事柄を目前に見てゐるより、何處か下宿をするなり、自炊をするなりして、此家を去つて了ふかとまで思つたが、それも穏當でないからと、やう〳〵思ひ止つたが、どうも胸中の不平が抑え切れないので、本郷に居る姉の家、即ち自分の姉婿の家を尋ねて、それとなく姉に此事を洩らさうかと思ひながら、うつら〳〵と本郷へ辿つた。

姉に逢つた。其事が口まで出てゐたが、若し一言此所で云つてしまへば此後如何いふ事にならうも知れず、アヽ、困つたと屈托をしてゐると、姉がいろ〳〵と兄の近況や、嫂の日常を聞くので、ついつひ胸にあるものだから、實はこれ〳〵と始終を語つた。すると姉は、怪からん、といふて大層な立腹、女のことだから、種々な邪推を廻して事重大と成つて了つた。

或夜突然兄貴が自分を呼びつけた、何の用かと畏つてゐると、兄貴は血相を變へて、只つた今此所を出て行け！といふのである、事情もなにもあつたものではない、恰で狂氣のやうに猛り立つて、不埒な奴だ、一家の平和を害する奴だ、とばかり、自分の辯解をも聞かばこそ、自分の襟頭を掴んで玄關から衝き出してしまつた。何と云つて詫を入れても許して呉れぬ、それは傍から滑かな舌で我我兄弟の間を離間しやうとしてゐる悪魔がゐるからである、自分はもう此の後を明に云ふを好まぬが、併し、唯、嫂がその實家の爲に如何なる事を企んでゐるかといふことは君も想像されるであら

う、此の事件の爲に本郷の姉とも兄貴は絶つてしまつた。本郷の姉の家は豊な生計ではないので、自分は今それに身を寄せる譯には行かぬので、暫時何か口のあるまでと、茲に斯うして厄介になつてゐるのである。

と斯う云つて悲しさうに目の端を拭つて俯向いてしまつた。

此時自分は非常な不快な感を起したが、併し、此のあはれなる友人が、自ら墮落して兄の信用を無くしたのでないといふことを確めた時には、頗る快感を以て故人に接した。そして自分は忠實に此の人の爲に口を探すべく約して歸つた。

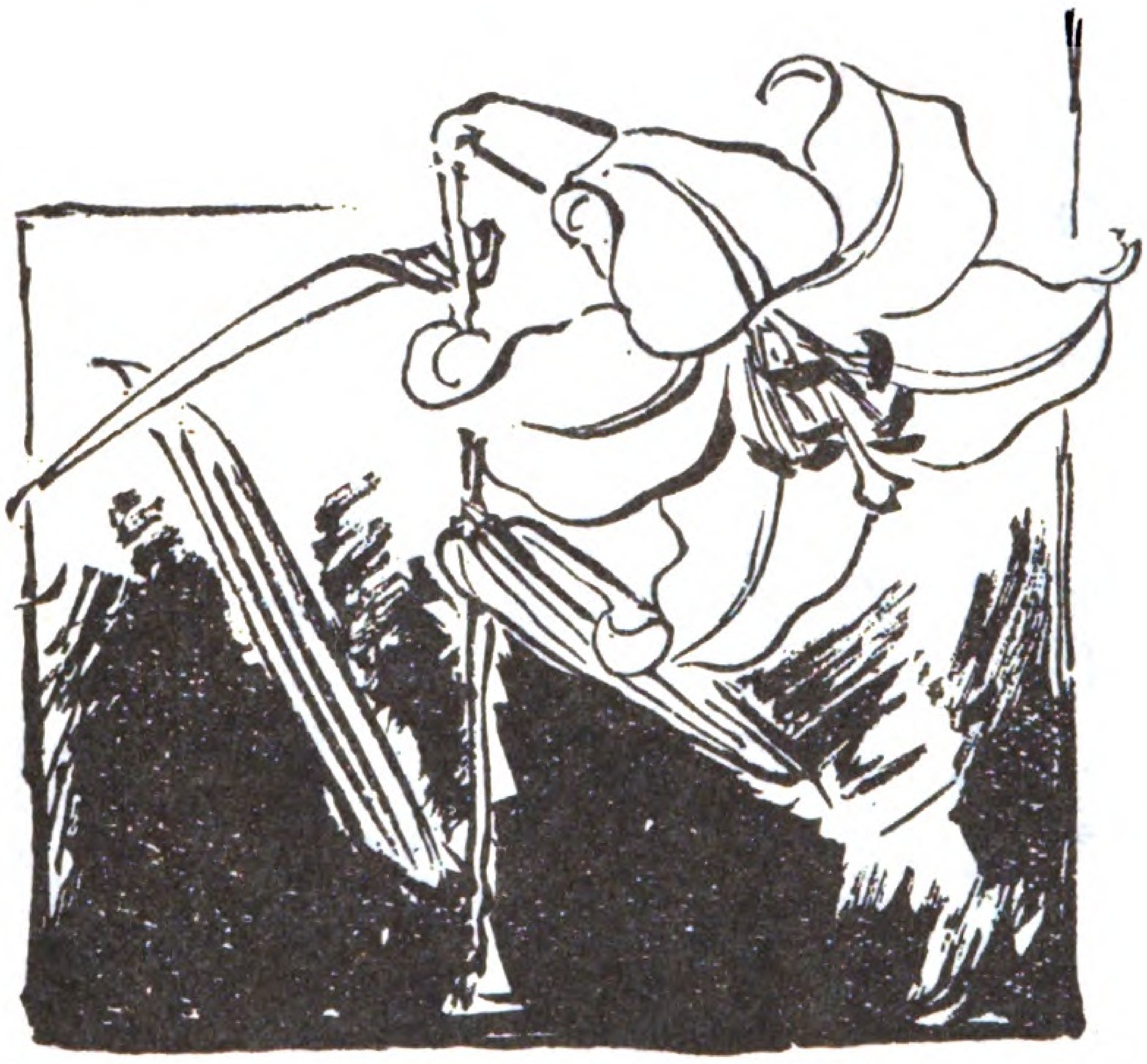
莊子に曰く、兄弟は手足たり、夫婦は衣服の如し、衣服破るゝ時は更に新なるを得ん、手足斷つ時は再び續ぎ難し、と、これは夫妻の愛情に溺れて兄弟友愛の心を忘るゝものを誡しめた金言である。世間には妻を娶つてから兄弟仲の惡るくなるのが幾許もある、誠に悲しむべきことである。(終)

山百合の採集

ゑ、はやし

予は或年の夏、サカといふ小女と、善といふ小兒を連れて山百合の花を採りに出掛けた、山にいたると、もう百合の花が、あちでもこちでも芒の中から、澤山顏を出して笑ッてる、二ッ三ッ折ッた頃、サカが『大きなシドメ見付けたア』と叫び出した、すると善がまた『此所へもあッた、あアあそこへも』といふやうに譯なく見付る。シドメとは樝子の方言で、田舍へ行くと、到る所の野山に生えて、花赤く、實は味から色澤まで、すッかり木瓜に似て、唯少し小さいばかり、けれども酸いが〳〵、話をしてさへ涎が出る、縱令黄色に熟し

ても酸いので、小供等にはたかが三個位しか食べられない、けれどもかゝる果實が容易に手に入いるから面白くて堪まらない、花なんか何うでもよい、眼を圓くして益々探してる、予は小供等の採るに任せ、あちこちと獨り山を駈け廻はり、百合の花を集めた。それから軈て小供等の所へ還ッて見ると、まだ探してる、で採ッたにも採ッたにも、サカは兩方の袂に一ぱい充め込み、袂が切れないばかり、自分でも重くて困るといふ樣子。善は筒袖で、カクシは小さし、已むを得ず、懐中へ入れた、背から兩脇、梔子の實で胸腹部を包んでる、其膨らんだ風的といふものが、何とも言ひ樣がない、



『こら〳〵慾をかいたな、好加減にしろッ!!そんなに採ッて何うする積り、佳いのを撰ッて、あとは捨てた方がよい』、

サカ『ウーンあッちやんにやるだァ』、

善『己アおトヨさんに出すだ』

『そーか、で歩けるか……慾張先生達は』

『あア、歩かれるとも〳〵』。

それから家に還り、座敷に上がるや否、サカは突然兩袂の角をつかみ、倒さに上げたから、梔子がボタ〳〵疊の上に落ち散ばり、障子襖が響くやら、鷄がかけ出すやらの騒ぎ、善がまた兩肌拔いて、ちよいと兩手を擧げたから、これもドサリバ

夕りと大騒ぎ、家内中が何事かと驚いて駈け寄ッたら、此始末で大笑ひでした。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

予の母は、矢張り山百合の花の香が大好き、樝子の騒ぎで來るや否、直ぐ山百合の香を感じ、手にとッて鼻に當て、頻に嗅ぎ入れてる『お母さん花粉が』『あアさうよ……:おやそーいふお前の鼻も』といはれ、思はず手で鼻尖を横撫ですると、花粉がべッたりで、あとはアッハハハー!!!。

予は性來天然の美しい色を好むが、また深く天然の香氣が好きである。梅、山梔、薔薇、忍冬、蜜柑、香橙、ジンチヨウゲ、木犀、タイサンボク、何れも佳い香である。が山百合の花の香が一番よい樣である。蜜柑の花の咲く時は、朝晩いや間がな隙がな、蜜柑畑に出て嗅ぎ廻はること、恰度花蜂が蜜汁を見舞ふが如くである。予が母も亦此時節には花蜂も同然、能く蜜柑畑に出る。花の香の中、秋の菊が一番終ひである、予は能く菊の花瓣をむしり、鼻の孔へ挿込むの癖があッて、時々人に笑はれることがあります。(完)

佛國結婚事情(つゞき)

土肥月巴

◎其の二十六

贈物及び嫁粧束は、總て客間に次げる一室に展列す。

◎其の二十七

通常新娘は白服を着用す。

▲註に曰く　白色は潔淨を意味し、純粋を意味し、無辜を意味す、之を以て情意に象り、言語を代表せしむるに於て、禮法に關する頗る大なり、今人生の四大儀禮たる、結婚の式

に臨むに及び、特に服裝の白きを擇むもの、抑々寓意深遠なりと云ふべし、此事我の彼に於る、期せずして一揆に出づる者。

◉其の二十八

緣女の親類に女子なき時は、其の姉妹若しくは其の親友の女子を介副女とし、新郎の兄弟或は朋友を介副男とす。

○○○○

▲註に曰く　是れ又た本邦と稍々相似たる者あり、唯だ其の所謂る介副女、介副男たる者を、必ず未婚者に限るとするは、聊か我れと趣を異にす。

◉其の二十九

介副女の役を委托されたる婦人は、早朝より緣女の身邊に在つて、化粧を始め、萬端何くれとなく手傳ひ、寸時も側を離るゝことなし。

◉其の三十

緣女は婚禮の式場に至る爲め、父母其の他の關係人と共に、發足し、又は到着する時は、成るべく永き時間衆人に目擊せらるゝの嫌を避くる爲め、餘人の全く乘車し了り、或は全く下車し了り、行列順序整頓するまで、上車及び下車を見合す、況や、途上頭首を左右して、忌憚なく周圍を見回す如きは、輕卒の極として最も戒しむる所なり。

◉其の三十一

緣女式場に在る間は、假令如何なる事故に依つて、感情を鼓動することありとも、其の悲觀的態度を示すことは、獨り新夫の不快を招くのみならず、列席の人々に對しても、不禮の最も大なる者として、深く戒むる所なり。

◉其の三十二

席に列る所の客人は、假令如何なる深交あるも、新夫婦、或は其の父母に對し、獨り管々しく長話

するを禁じ、唯だ中心より流露する所の、熱き祝福の數語を述ぶるを以て足れり。

◉其の三十三

最近親者の偶々故障ある爲め、婚儀の席に列るを得ざりし者あるときは其の翌日或は兩三日の中に、夫婦同伴訪問す。

◉其の三十四

前條の場合、若しくは親族の家に催さるゝ宴會に參ずるの外は、一ヶ月を經過するにあらざれば、決して訪問を始むることなし、但し婚禮の席に列し呉れたる面々と、交際上互に往復するは別問題なり。



▲註に曰く ○○○ 旅行すると、旅行せざるとに論なく、此の一ヶ月間の日子こそ、新夫婦の地位に馴るゝ爲め、極めて須要の機會なれば也。

◉其の三十五

新夫婦の訪問を受けたる家は、或は婚禮の時に於ける祝宴の答禮として、或は自ら新婚を祝賀するの意に於て、有り合せの酒肴を陳ねて饗應す。

◉其の三十六

新夫婦は避くべからざる關係者、朋友、組合等の家々を、一應訪問を終へたる後、總べて招請し懇親の宴を饗す。

（なはり）

以上は全豹の一斑のみ而も記者曾て親しく游んで其の習慣を目睹せしにあらず唯だ友の久しく彼地に駐留し此程回槎歸東するに逢ひ青燈夜雨肱を取つて十年の故情を叙す話頭一び轉じて山に入り再び轉じて水に入り尚は進んで政治に入り宗教に入り經濟に入り終に風俗習慣の微に及び人情世態の細に亘る所謂――佛國結婚事情――なる者亦た實に其の間に得來る者而して本編收むる所既に冒頭示す所の如く彼と我と東西其の土を異にし黃白其の種を別にするに拘らず天地の經義に根柢し人情の自然に胚胎し發して禮となり展べて用を爲すに於て往々符節を合する者あるを看取し即ち試みに之を記して大方讀者の參考に資し併て言外の趣味を頒つと云爾。

だねどころ

東京女子美術學校講師　石井湧太郎

○總て料理をするにも其の季節の魚鳥貝蔬類を知らんければ其の時期に適合する献立を作る事が出來ぬ、されば其の季節に依つて用ふべき品を諸嬢に御知らせしようと思ふ、之れに由つて料理すれば先づ其の季節に適した料理が出來ると云ふ譯である。

○九月頃

いな　一名　名吉　とも云ひ　畿內にては
くちめ　と云ふ　加賀にては　ちよぼ

伊勢にては　めうぎち　と云ふ　土佐にては　いきなご　此の他諸國に依りて方言多し。

○初生をおぼこと云ひ少しく育ちたるものをえふな二歳をいな三歳をすはしり四歳をぼらと云ふ十歳以上之れをとゞと云ふとなん。

○五月頃より九十月頃まで眞味のある者にして此の使用方は種々あれ共次に載するは重なる處である。

○いな筒切汁、
之れは鱗をふき腹を明けて後ちよく洗ひ而して筒切(一寸或は八分)となし味噌に入れて煮込むなり椀に盛りたる時上より粉山椒をかけて用ふべし。

○いな鹽燒、
之れは鱗を取り脊の方より首共に開らきて鹽を振り二三十分間置き凡鹽氣の浸染したる頃一度水にて洗ひ而して布巾を以てよく其の水氣を拭ひ取り金串にさし又鹽を少しく振りかけ直ちに燒くべし之れを化粧燒と云ふなり、

○いな饅頭蒸
之れは前と同じく脊より開らき一度鹽をして洗ひ(薄鹽)此の腹中に味噌を詰め、味噌の分量は並味噌、或は紅赤味噌、等を裏漉にかけ之れに砂糖、味りん、水、等を加へ適宜の鹽梅を付け火に上せて少しく堅き位に煉り用ふるをよしとす之れを蒸籠に竹の皮を敷き其の上に置きて、魚肉の白色になるまで十二三分間蒸すべし後ち之れを取り出し少時間冷して皿に盛るべし、附合物には甘酢漬冬瓜などをよしとす。

○酢の物、
之れは其の身を三枚に卸し皮目を引き(皮を取

るゝと）刺身の如く作り又はへぎ身に切りて少しく鹽を振り置くか或は鹽酢に洗ふ位に浸すもよろし、つまものは、白髪白瓜（至極細く切りたるもの）木茸せん、紫蘇葉せん等盛り合すべし之れは甘酢の加げんになして用ふるをよしとす（甘酢は酢一合、砂とう四匁、味りん三勺、鹽二匁、）一度煮返し冷して後用ふべし。

○菓子道明寺くわん

原料品及び分量

道明寺一合を　（水一合五勺に浸す）

角天二本半　（水四合に解く）

砂糖百五十匁

之は角天と道明寺を水に浸し置きて角天を水より出し絞り上げ細かに刻みて鍋に取り水四合を加へ攪まわし之れを馬尾篩にて漉す、此の漉したるを暫く冷し前に浸し置きたる道明寺を別の器に取り又角天の溶液を少し入れて解き暖め段々に解きて多くある液中に投じ攪き交せて器に流し込み風通しよき處に置き固まりたる時拔きて適宜に切るべし



雜録

米國獨立祭

シヤトルにて　澁谷馬頭

◎安藝丸が明十一日出帆歸航に付て一書を呈します。此度の通信は米國獨立祭の景况とシヤトル市の開祖の話とを申上ます。

◎獨立祭は御存知の通り、北米合衆國が英國の覊絆を脱して獨立を宣言したる紀念の大祝日です。七月四日に當りますから『フオース、ジユライ』と申します。

◎當日は朝來微雨蕭々として降り出しましたけれども、婦人は別として男子は傘も持たずに、賑はしく町の中をかけまはりました。まづ午前十時半過に市民の行列が繰り出しました。それには陸軍第十九聯隊とブレマートン海軍兵と及び工業學校生徒一同　太鼓持參で加はりましたので一層の景氣の上に、更に日本人の一列が馬車六臺、花車一臺で加はりました。花車には饒山の飾をなし鎧を着た武者二人、薙刀持つた女武者一人、烏帽子直垂の將軍一人、雜兵二人を載せました者だから非常に見物人の注目を引きました。これが當日の最もすぐれた趣向だと白人等が話して居ました。

◎行列は町の目ぬきの場所を巡つて十二時頃すみました。町の中、どこにもかしこにも、昨三日から若者共は小さな花火の玉を人通りの處へなげ付けて、ズトン、ズトンと鳴らして、時には丁度人

の足もとへ殊に若い女の足もとへ打ち付けてズトンと鳴らして其人が驚いて飛びあがるのを見て、喜んで居ますのです。四日の當日に至つては更に甚いのです。私なども數度飛びあがりました。

◎今一つはこれも御祝のしるしです。赤、白、青、紫等色々の紙を細かく截つたやつを袋に入れて賣つて居ます。それを買つて町の中を通行しつゝ、男は女に、女は男に一寸目にとまつた者に出くはすと一つかみづゝ花咲爺のやうにパラパラ振りかけるのです。中々盛んに振りかけます。私も一二度振りかけられましたが、これはのろけと云ふやうな下びた話ではございません。全くアメリカン、レイデイが私のわきを通る男に振りかけましたのが、まぐれて私の頭にかゝりましたのです。



花火で人を驚かせる事は男が多くするのですが。女の人も致しますよ、切紙を振りかけるのは男も女もまけず劣らずやります。以て當國女子氣風一般を知るべしでせう。

◎よけいな御話ですが、夜分に町の中に放歌するのは男よりは女に多くあるのです。最もあまり素性のよい女ではありますまいが。

◎さて此次は當市開祖のお話です。先便にも申上げたかと思ひます。當市はもと一寒村で、それが開けてからまだ十幾年にしかなりません。其以前にはインデヤン(亞細亞の印度人ではない)即ち亞米利加土人の一部落でありました。其中に庄屋さんが一軒ありました。だんだん白人が入り込み來るに隨つて多くのインデヤン住民は他地方に退去し、庄屋さんも死んでしまひましたが、庄屋さんの娘さんのアンジエリヌと云ふ者が近年まで生き殘つて居て、市中あちこち廻り食ひをしてあるきました。これは只今のやうな都會になりましても、市民は昔の事を忘れずに、庄屋さんの娘さんを優待しましたので、此娘は市中どんな家へ行て、どんなに飲まうが食うが、勝手に出來ると云ふ事になつて居たのであります。又市民は庄屋さんの紀念として市中第二繁華の岐に（第一街と云ふ所に）紀念標を一本立てました。高さは七八間もある大きな柱です。其柱の上から下まで一面に、インデヤン人の崇拜する神體を彫刻しましたのです。其神體はどんな者かと申しますると、大天狗小天狗烏天狗等の面です。どうも日本の天狗面を、彫り付けたやうに見えますので、日本人の目には甚だ注意を引きます。インデヤンは日本の天狗ををがんで居るのかしらんとヒョット考へ付きましてから、なほよく考へて見ると、或る學者の說にア

メリカ北部のインデヤンは蒙古人種で日本人と同人種だと云ふ事があつたやうに覺えて居ました。かれこれ考へ合せて、そしてたまに市中インデヤン人が歩いて居る所を氣を付けて見ますると、色こそチット黒いが、どうも日本人によく似て居るのじや、日本人とちつとも違はないやうなインデヤンも見えるのです。同人種で果してあつたのかしらんと思ふと、インデヤンの末路が哀れに感ぜられてたまりませんのです。丁度、我が内地人が北海道に入り込んで、アイヌがだん〳〵退去し減少して、遂には滅絶しやうとする運命と同一なやうです。

◎シャトル會長の紀念標（インデヤン、トーテム、ポール）の圖と、同會長の娘アンジエリヌの肖像と、編輯局まで差上げて置きますから、讀者諸孃はよろしく雜誌に挿入してもらつて、御覽あそばせ。

（記者曰追て掲載すべし）

◎此次ぎの通信は、何を申上げやう。シャトル大學の女學生のことか、或は當市民の家庭の狀況か或は此前に豫告申上げました「夜のシャトル」か。いづれ考へまして申上ませう。

七月十日シャトル市ノールス、ウエスターン新聞社編輯室に於て

釋迦堂

文學士　濱田紅於

仙臺市の東邊に躑躅ケ岡公園あり、古は躑躅の名所にして、都々茲摺といへる名物をさへ産したりとかや、古歌にも、東路や躑躅ケ岡を來て見れば、赤裳の裾に色ぞかよへると詠じけるに、今は其花皆枯れ盡して、名殘をだにもとゞめず、されど

枝垂櫻の古木若木、數もしられず栽ゑられて、春三月東風吹く頃ともなれば、滿園花をもて掩はれ、向島、忍ヶ岡にもおさ〳〵劣るまじきながめなり、されば青葉城下數萬の足は、皆そなたにむかひて、その雜沓繁華云ふばかりなく、物狂しげに立騷ぎのゝしるものも、飛鳥山に讓らじとぞ思はる、しかはあれど一夜春雨降りしきりて、落花さながら蝴蝶に似たらむ折は、またこれを顧るものなく、さびしさのみぞいやまさりゆく。

此公園の北邊に、さゝやかなる佛堂あり、釋迦堂と云ふ、方十間ばかり、葺くに赭色の瓦を以てし、一見銅板を列ねたるが如し、花咲く頃は更にも云はず、人目も草も枯れ果てし折も、尙香花の烟消ゑず、梵鐘の音絕えず、變り易き人の心も、さすがに信仰の念の深く見ゆるぞ心にくき、抑も此釋迦堂は如何なる由緒あるや、これこゝに陳べむとする所なり。

堂傍に古碑あり、その由來を誌せり、もと漢文なれども、讀者諸子の便宜を謀りて、こゝには假字交り文となす、その文に曰く、

此

久成如來の尊像は、尊妣源初子淨眼院了岳日嚴大姉、昔年赤栴檀香木を以て、分寸の尊像を刻し、常に護持して、不肖綱村の爲めに、福壽圓滿を祈る所なり、尊妣常に語りて云ふ、後來須らく堂を城外に造り、貴賤をして順逆の緣に觸れしむべし、乃ち是れ不肖が增壽長福の基、之れに加ふるなし矣と、

尊妣辭世の後、常に之れを思うて占レ時年あり、相レ攸月あり、遂に殿を城東躑躅岡に築き、此に安置して、以て彼の所願を成し、且つ尊靈の無上成等正覺を祈る、凡そ此に請ふ所は、人の母

たる者をして、尊妣が慈仁の志を慕ひて、各々子の爲めに災を除き福を招くを得せしめ、人の子たる者をして、不肖が誠孝の志に習ひて、各々存亡母の爲めに罪を滅し善を生ずるを得せしむるなり、乃ち一切此を過ぐる所の人及び牛馬の類に至るまで、縁に觸れ因を結びて、竟に一も成佛せざるなからしむ。

元祿八龍集乙亥年三月八日

奥州太守藤原朝臣綱村謹誌

乃ち知る、淨眼院の慈仁と、綱村公の誠孝とを、この淨眼院は院本伽羅先代萩に所謂政岡なれども、こは俗説にして信ずるに足らず、淨眼院は碑誌に云へるが如く、源初子にして、氏は三澤、綱重公に嫁して綱村公を擧げ、伊達家内訌の際、よく幼兒を保護して恙なからしめたり、その詳細は昨春の女鑑にものせられたればこゝに云はず。

しかれば所謂政岡(實錄には淺岡とあり)の事蹟は抹殺せらるべけれど、三澤初子が慈仁の跡は、大に婦女子の鑑となるべきものなり、凡そ實用史は通俗倫理の資料を示すべきものとも見るべくして、各自修身の模範を仰ぐものなれば、あながち考證抹殺すべき必要もなけれど、明白なる誤謬は改めざるべからず、政岡の事蹟の如きこれなり、文學博士大槻文彦氏は仙臺藩儒の出にして、久しく藩史編纂にも關係せらると聞く、故にその言説は信用して可なるべし、博士が「伽羅先代萩の話」は載せて史學雜誌第拾參編第九號及び復軒雜纂にあり、先代萩の誤謬を糺して、伊達家内訌の一端を考證せられたるが、その末尾に「伊達騷動の事に就ては、舊藩に委しき記錄がない、それで編輯したらよからうと云ふことで、私は十年程いいいい材料を集めて、三十卷以上にもなつた、鼠が巢を

作るやうに集めた、材料は悉く其頃の實物ばかりであるから中々面白い、當年は脱稿させるつもり、十冊か十五冊位にならう、大方出版にならうから、それを御覽なされ、隨分面白い」とあり、予はその出版を待つこと切なり、此中政岡の事蹟には言及せられざりしが、只「私も斯んな所で、舊藩主のことを言ふのも不本意であるが、已に滿天下に知られて隱すことも出來ぬ、唯々歴史の上の考證を話すまでの事である、それから例の政



岡、松前鐵之助の事、是亦事實は更にない」と云はれたり、故に政岡が淺岡にても、この一段は根無草となるべし、その墳墓については、女鑑第拾參年第拾壹號所載内田茂文氏の「名婦の墳墓」に、府下荏原郡中目黒村日蓮宗正覺寺に在りと云へり、予の見たるは、宮城縣仙臺市の東南谷地塚に在りて、花崗石の方柱に「三澤氏之墓」と刻せり、おもふに後者は一見新しきのもの丶如く、又享保四年の作なる奥羽觀蹟聞老誌にも、これを記

せざれば、それより後の建立なるべし、諸侯の妻子を江戸に置くてふ、幕府の法度より推論する時は、正覺寺にてその幽魂は眠らめ、内田氏は「老女淺岡」と記して、「本名は三澤初子」と註せられたれど、こは如上の俗説を傳へられたるものにして、三澤氏は老女にあらで夫人なり、故に法名淨眼院殿と云ふ、何ぞ女中に殿字を附せんや。
予は三澤氏について知る所甚だ少なけれども、釋迦堂を過ぎる毎に、假説の政岡の名のみいや高くして、實在せし三澤初子夫人は、名をだに知るもの乏しきをなげき、いさゝか堂の由來を記して、三澤氏の慈仁、人の母たるものゝ鑑となるべきものあるを告げ、併せて世間の俗説をたゞすこと然り、時にさみだれ霽れつくして、雨後の新緑轉あざやかなり、夫人の仁德を慕ひ寄りしものやありけむ、釋迦堂の鐘の聲沈々として我室をおとづれぬ。

咲く花と色を爭ふいさをしの
　薫りはうせじ年を經るとも

新公園の感

山岡超舟

◎今更事新らしく書き立てる迄でもないが、世が文明に進むに從つて、生存競爭とか自然淘汰とか云ふものは、日一日よりも甚だしくなつて來て、結局弱者の肉は强者の食となるのである。でなくても、社會の下層に位する貧民は、終日汗水を流して働いても稼いでも、豪商や紳士が其の愛犬一頭を養ふ爲に費す飼養料よりも、得る處は遙かに尠ない。
◎炎威燕すが如き盛夏の頃も、寒風膚を劈くが如

き嚴冬の日も、晨には星を戴いて行き、夕には月をふんで歸へらんければ、朝顔の花の脆さよりも、なは果敢ない露命をつなぐ事が出來ぬかと思へば、洵に哀れである。

◎男子はまだしもの事、かよはい婦女子が其の良人の病を醫せんが爲に、或は良人に訣れて獨暮の生活を營まんが爲に、旦夕の糊口に逼られて、一縷の烟をすら騰げ得ぬに至つては、實に悲慘である。嗚呼彼等婦女子の心事を顧たならば、誰か一掬同情の涙を催さないものはなからう。

◎か丶る婦女子や、下等社會の人々の不平と憂愁とを、匆忙繁劇の裡に慰めて、精神上の慰安を與へ、身體の健康を保たしめやうと思ふならば、ドーしても閑雅清曠の自然境に向つて、求むるより外に方法はない。故に人口稠密、人家櫛比し、車馬絡繹織るが如き熱鬧繁雜の巷に於ては、最も公園の必要がある。

◎處が其の名は公園であつても、其の實公園でなく、所謂公園たる目的に反するものは、公衆の樂園ではなくて、たゞ曠地と云ふもので、殆んど無用の長物に過ぎないのである。

◎歐米諸國では、公園は實に市民の肺だと言つて居る通り、寔に貴族的遊樂場でなくて、寧ろ平民的必要物である。語を換へて言へば、多數市民の行樂のために、其の必要上開設せらるべきものであるから、平民の爲には、浮屠氏の所謂極樂淨土か、又は西洋人のいふパラダイスを理想とせねばならぬ譯のものであると思ふ。

◎我が首都でいつたら、山伏町とか萬年町とか云ふべき、彼の英京龍動の貧民窟では、去る年幾多の小公園が開設せられてから、死者の數が年々著しく減少したといふ事であるが、實に是れは研究

すべき一大問題であると思ふ。

◎それは兎に角、早い處が彼の文王の囿は、方七十里の廣さであつたが、民と其の樂みを同うしたから四民猶は以て小としたが、齊の宣王の囿は、方僅かに四十里であつたが、恰も陥穽を國中に作るが樣であつた爲に、民は猶は以て大としたと云ふことは、尤も適切な比喩である。

◎だから公園としては、數萬坪の土地も、數十萬圓の金も決して惜むに足りない。又規模が小さいといつて云々する必要もない。要はたゞ衆民をして、眞に是が我々の庭園であると云ふ感を起さしむれば足るのである。故に吾人はあり來つた、上野、淺草、芝に於ける、道路の如き公園や、山林の如き公園や、興行塲の如き公園や、神社佛閣の附屬地の如き公園よりも、其の設計及び設備が如何にも私人の庭園らしくて、土地に歴史といふ程のものもなく、全く公園の爲に作られたる公園なる、日比谷の新公園を多くの欠點あるにも拘はらず、雙手を擧げて大に歡迎する所以である。

◎動機善なれば果も亦善なりで、日比谷公園が市中の眞中に、衆民遊樂の爲に出來たのは、從來の公園の歴史的古蹟より變化して、やうやく公園の名稱を附せられたのとは、全くの相違である。

◎世上では此の新公園に對して、兎や角批評するものが甚だ尠なくないが、手前勝手に好きなことを云つた日には、如何ばかり麗はしい龍宮城の乙姫樣の御顏にでも、點の打ち處は幾ケ所でもあらうと思ふ。月でも滿つれば欠くる世の中に、何物によらず完滿無欠のものを得やうとするは、甚だ無理なことである。

◎從來の公園は共同腰掛に乏しく、其の多くは殆んどロハ臺の名稱の下に、汚されたり毀たれたり

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

第五回博覽會
歯磨中
貳等
賞牌受領

シカゴみやげ
象印はみがき

東京
安藤井筒堂

新刊
萬國女子風俗
澁谷愛編纂

著者高等女子教育に從事する十餘年今は萬里の波濤を越へて歐米觀光の途に上る亦たゞ斯學に裨益せんが爲なり本書世界各國女子の面相服裝風俗習慣化粧結髮法等を平易に記述して洩らす所なし此人にして此著あり又何ぞ觀察の奇警にして文字の飛躍せるを疑はんや

四六版洋裝
定價廿五錢
郵稅四錢

東京築地二丁目
國光社發兌

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

畏れ多くも **東宮殿下** の行啓を辱うし御買上の榮を賜

畏れ多くも東宮殿下の行啓を辱うし御買げの榮を賜りし越後岩の原葡萄園主人川上善兵衛氏の造品なり

發賣元
東京神田旅籠町三丁目
(電話下谷百〇二番)
日本葡萄酒株式會社 東京支店

高等滋養飲料



岩の原葡萄園
於第五回内國勸業大博覧會一等賞受領

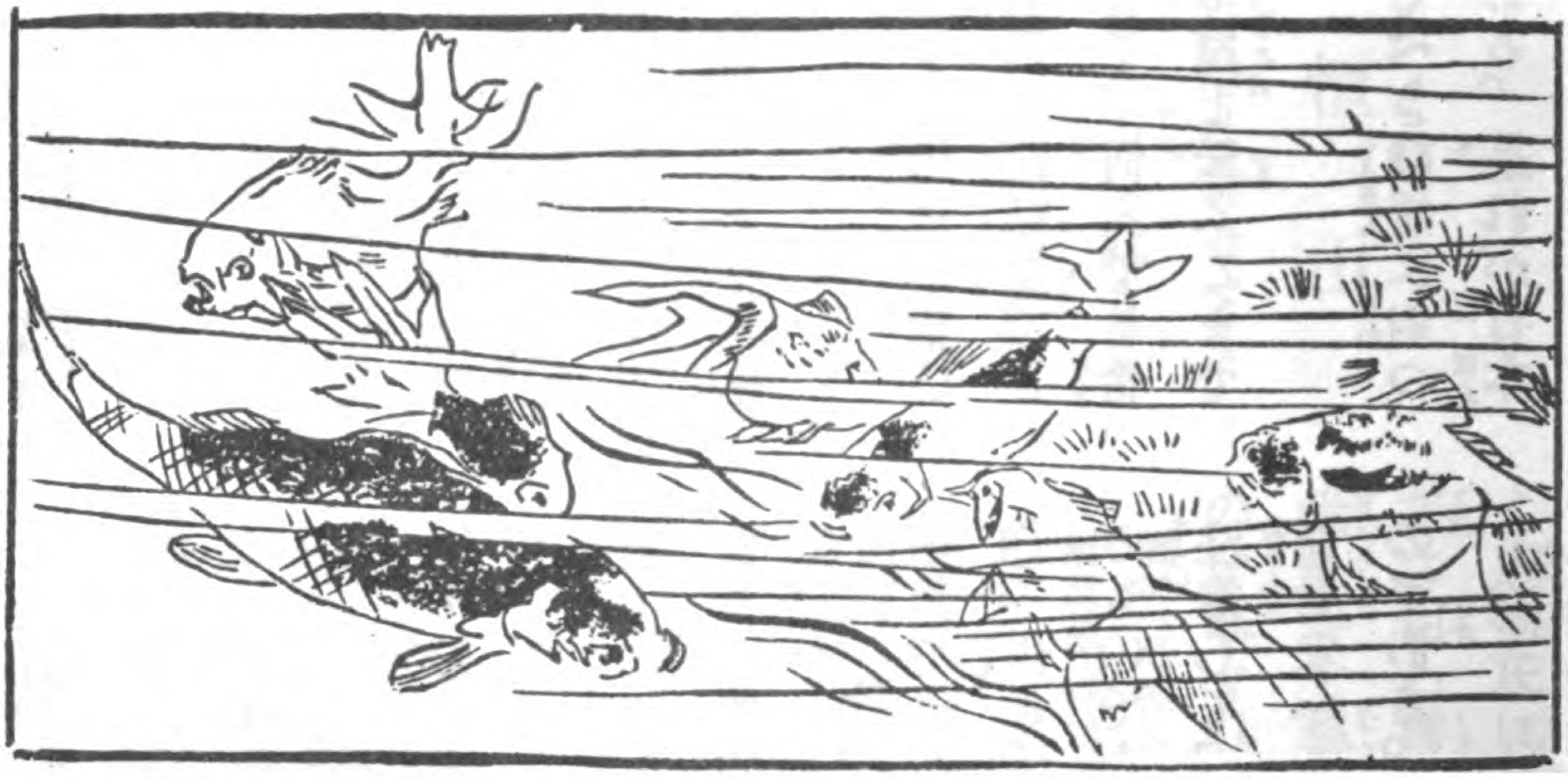
衛生試驗所の分拆報告及諸大家の賛評は本品の純良なるを證明す

販賣所
各府縣有名なる **藥舗洋酒店** にあり

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

して、甚だしきは、無宿者の寢臺とまで綽號さるゝに至つて居るのは、寔に遺憾である。それのみでなく、形勝の處には赤毛布を敷た多くの椽臺が無いではないが、そはロハではなくて、茶代を拂はねば休む資格がない。さても公園といふものはかく不便なもので、直に金が敵の世中と嘆息さするものであらうか。だが新公園には、到處にベンチがあつて、かゝる不足を云ふ餘地が少ない。

◎歐米諸市の公園には、淸潔なるロハ臺や、雨宿りの四阿や、春夏秋冬の花卉や、珍禽異獸及



び鹹淡の水族等に富むのみならず、其の動物園も、植物園も、音樂堂も皆ロハで、おまけに飮食物は市内よりも遙かに低廉であるとの事である。又巧妙なる器械組織のロハ的飮料水もあつて、なに一つ不自由のない實に何處よりも愉快なのは、公園であるとは外人一般の通語である。願くは我が日比谷の新公園も、さうまでに進歩さしたいものである。

◎まだ遠く海を渡つたことのない我々にも、他の文明國のパークなるものの、何んな鹽梅式に出來て居るだらうかと、略思ひやることが出來るのは、實に日比谷公園の御蔭である。又西洋の草花をまのあたりに見て、其の名を

覺えることも、また新公園の賜である。だから苟も玆に遊ぶものは、此の無言の一大恩人を愛護しなければならぬのは、勿論のことである。

◎さて本公園に於ける概略は、旣に本誌上を以て諸媛に紹介したから、特更に再びするの必要はないが、たゞ雲形池と、心字池との汀に行儀よく配列したる團子的の川石は、實に俗の俗なるもので、何程贔負目に見ても、雅致を傷ふこと甚だ尠なくないのは遺憾である。

◎或る論者は鶴の噴水を見て、かゝる道理が無いと云つて難ずるけれども、予は寧ろ意匠斬新だと思ふ。是れは東京美術學校の製作で、何んでも希臘邊の或る神話から思構したものだと云ふことである。

◎終に、予は未來の良妻賢母たるべき諸媛に對つて、囑望するのは公德の養成である。是れが日本の習慣であると云つてしまへば夫れまでゞあるが、兎に角習慣でも何んでも、惡いことは何處までも打破せんければならぬ。先づ一寸杖を公園に曳ても、公德を重ぜない人の尠なくないのは、實に不愉快極ることである。子供でさへ憎らしいのに、まして大人までが噴水に石を投げたり、或は猥りに花を折り、又は筍などにステッキを突刺したり、木の實を叩き落したり、繩張りの中に入つて芝をむしつたりなどするのは、實に不都合なる振舞ではないか。

◎子供と云ふものは、母親の心次第で善惡の別れるものであれば、人の母たるものは能く此の邊に注意して、第二の國民が成長する頃には、公德を重ぜないものは一人もないと云ふまでにしたいものである。

（完）

文字の書き方

林恒山

曩には文字の讀方に就きて初學の心得と爲るべき事と思ふまゝを記したるが今度は書き方に就きて覺え置くべき事と思ふ節の二三を云はんが古諺にも「讀むは讀めども書様は知らず」といふことありて字を書けぬことをも甚く恥としたるものなり殊に初めに間違なりに覺えたるものは改たむることの容易ならぬを知らば書き方の大略なりとも心得置くべきこととなるべし。

一　字に種々の體ある事

文字に種々の書體あるも今日普通我邦に行はれ居るは楷、行、草の三體にして之に隷書を加へて四體とし又之に篆書を加ふれば五體にして篆に大篆小篆あり以上を六體とす支那にて文字の起原は遠く庖犧氏に在りて黄帝の史倉頡に至りて大に心を之に用ゐ書契を造り爾後歴代數百種の字を造る後世是等を總稱して古文といふ今諸書に見えたるものを擧ぐれば

龍書(庖犧氏の作)　穗書　(神農氏の作)
慶雲篆、垂雲篆、[illegible]篆、捲雲篆　(軒轅氏の作)
鳥迹書　(蒼頡の作)　鳳書　(金天氏の作)
蝌蚪書(陽高氏の作)　仙人書　(高辛氏の作)
龜書　(陶唐氏の作)　鳳尾書　(有虞氏の作)
鐘鼎書(夏后氏の作)　倒薤書　(務光の作)
虎書、烏雀篆、赤雀篆、[illegible]篆、　(以上文王史佚作)
龜書、魚書、(以上武王作)　奇字篆(同代の作)
籀文、大篆　殳書、刻符書、關稱署書、鳳鳥書、蚊脚書、芝英書、氣候
直時書、蜒書　(以上史籀の作)
墳書　(周媒氏の作)　金錯書　(周官保氏の作)
騏驎書　(孔丘の作)　蠶書　(秋胡妻の作)
蛇書　(唐綜の作)　轉宿篆・星宿篆、星斗篆、以上月馬子常の作)　鳥書、鵠頭書(陳遵の作)
此外制書、列書、記笏、車書、蟲篆、複篆、懸針書、垂露書、虎爪書、偃波書、鶴頭書、雁書、纓篆等あれど作者詳ならず何れも戰國以上のものならんか

雜錄

秦に至りて八體書を用ゐ大篆、小篆、刻符、摹印、署書、殳書、蟲書、隷書、是れなり漢には六體書を用ゐ古文、奇字、小篆、佐書、繆篆、鳥蟲是れなり此古文とは前にも云へる如く古代の文字を一括するの名稱なるも又專ら蒼頡の作る所を指す小篆は又玉筋篆と稱へ又秦篆とも云ひ李斯の作りし所にして實に後世隷楷の祖なりといふべし。

隷書は即八分の事にして秦の王次仲といふもの小篆より作り出して頗る簡便なりしより大に行はれたるものにて秦隷、漢隷、唐隷、散隷あり又虞元威が諸古篆に基きて作る所二十種あり。



星隷、墳隷、幡信隷、鐘鼓隷、龍虎隷、鳳魚隷、麒麟隷、仙人隷、科斗隷、雲隷、蟲隷、魚隷、鳥隷、龍隷、龜隷、燕隷、蛇龍文隷、一筆隷、古文隷、小科斗隷

佐書は秦の程邈といふもの小篆より作り出して八分よりも一層便利にして又隷書とも云へり是れ今の楷書なり（此外漢の蕭何の作に縮書あり魯人唐綜の作に蛇篆あり唐の承禎の作に金剪書あり唐の呂向は連綿書を作り韋昭は五雲體を作り重光は擷然書を作り又七國の時に龍虎書、鳳魚書、水藻書あり）行書といふは後漢の劉徳昇が作りし所にして正書より簡易にして大に行はれしより行書といひ書家の之により名を著すもの多し章草は前漢の黄門令

史遊の作りし所にして正書の規矩を存して體を解散し急龍章を作る故に章草といふ今の草書は更に後漢の張伯英の作りし所にして章草は字々區別あるも今の草書は上下牽連して區別なきの差あるのみ。

二　書に種々の流派ある事

書體に種々の別ある外に又種々の書風あり之を大別すれば唐樣と和樣となり唐樣とは支那の名家の書風にて我國にて其書風を摸擬して傳ふるものは晋の王羲之、唐の歐陽詢、顏眞卿、宋の蘇東坡、米天章、元の趙子昂、明の文徴明、董其昌等なり是等は多くは儒者等の書に現はれ通俗の書風殊に和歌俳句又は女子は專ら和樣を習へり和樣にも流派多し且起源より云へば弘法大師、嵯峨天皇、橘逸勢を三筆と稱し小野道風、藤原行成、藤原佐理を三蹟と稱し又弘法大師と橘逸勢とを二聖一説弘法大師と嵯峨天皇ともいひ弘法大師、小野道風、菅原道眞を聖賢蹟といひ後世數多の流派の出づる所は此三蹟にあらざれば聖賢蹟なり。

各流派中最も著はるゝは世尊寺派、法性寺流及び御家流にして世尊寺流は藤原行成を祖とし行成は道風に出で道風は弘法大師、嵯峨天皇に出でたるが行成の子孫相傳へて行能、經朝を中興とす法性寺流は法性寺關白忠通の流にして忠通は遠く佐理に出で佐理も道風に出でたるが法性寺流は優に一大流を爲せり御家流は靑蓮院尊圓法親王（伏見天皇第六子）の創始にして行成より出でたるが一時最も世に行はれたり。

是れより先き紀貫之、藤原公任、藤原基俊、源俊頼の四家あり之を上代樣といひ是れより後京極流（攝政良經）、定家流、伏見院流出でたり又御家流より尊道流（後伏見天皇第二子）、尊應流（一條攝

政持基の子)、尊鎭流(後柏原天皇第二子)、尊朝流(正親町天皇の猶子)、尊純流(後陽成天皇の猶子)、尊澄流(後水尾天皇第三子)を生じたり(御家流の外に尊圓流と稱するものあり其祖同一にして書風稍々異れり)

尊圓流より鳥養流(鳥養宗慶)、傳內流(建部傳內)尊鎭流より三條流(三條西實隆)、世尊寺流より通村流(中院通村)、素眼流(素眼法師)出で廣く是より先き諸流を折衷して勅筆流(後圓融天皇)、古人の書を慕して飛鳥井流又榮雅流(飛鳥井雅親號榮雅)三蹟を宗として加茂流又甲斐流(加茂詞官藤木甲斐守敦直)あり勅筆流より後柏原院流。飛鳥井流より二樂派(飛鳥井雅康號二樂)及び尙通流又古近衞流(近衞尙通)、尙通流より三藐流(三藐院近衞信尹)、近衞流(近衞信尋)、近衞流より光悅流(本阿彌光悅)、加茂流より志津摩流(佐々木志津摩)光悅流より角倉流(角倉素菴)、志津摩流より養拙流(寺井養拙)、又堯孝流(法印堯孝)、白雲子流(筒井吟龍軒)大橋流(大橋重政)も御家流より出づ此外瀧本流(瀧本坊照乘)は近衞流より出で後大師流(照乘後弘法大師を慕ひ)となり岡本半助は天皇流(嵯峨天皇の書風)を創め荒木素白(內膳)は上代樣を中興し此外宗祇流(連歌師宗祇)、堺流(牡丹花肖柏)あり尙は諸流派頗る多けれど一時の流行に止まり所謂俗書の流派に過ぎざれば略す。

(未完)

太宰府參詣記(東海道及浪花)

羽皐隱士

六日空よく晴れて氣清し、心地すが〳〵しく新澤庵一合入の瓶詰とり出し、先づ朝淸めの大御酒聞召せ道祖の大神に捧げまつらくと白す、斯く聞召

ては船上車の上平らく安らかに守り幸ひ玉へと白すと拍手三ツうてば車中の乘合皆な笑ふ、澤庵大機嫌にて、いかに槻の舍の大人彼なる田の中に碑の見ゆるは今井の四郎兼平の墓とこそ承はれ、また向ふに見ゆる松の並木をば粟津の松原と申て候ふ、これより一里餘りにして木曾殿のおん墓も候ぞかし、つら〳〵案ずるに木曾殿六條河原にて打負て今井の四郎が生死の覺束なさに瀬田の方へ打せたまふに兼平も主の行衛の覺束なければ瀬田の戰をうしろに見て都の方へ登る程に大津の打出の濱にて主從寄り合て、一條の二郎が七千餘騎にて扣へたる瀨田の此方の陣へ打て入り散々に戰ふて粟津の松原さして退きたまふ處へ、石田の二郎に内兜を射させ、田の中にて討れたまふ、兼平は木曾殿最後と聞て思ふ儘に戰ひ、やがて切死をぞしたりける、と先づこれが平家物語、盛衰記に記せし處にて候ふぞ、然るに木曾殿の墓は粟津の松原よりは西南の方二十町許りにあり、これは松原のこなたにあるべき筈也、石田が大音あげて鬼神と呼れさせ玉ひたる木曾殿をば打取つたりと呼はる聲を聞て兼平、いまは誰が爲に軍をばすべきとて、散々に戰ふて自殺すと見えたれは、今井が戰死の場所は、木曾殿の死所と遠かる可らず、石田いかに大音とても二三十町の隔てある處まで音聲の達すべきや、さればこの今井の墓、眞物ならんには、木曾殿の墓は死後に供養せし處にもや候ふらん、木曾殿打死の場所に墓を築きたるにはあるまじと扇拍子とり〳〵演立たるに、車中皆々興に入りて洋服着たる三十許りの男、失敬ながら貴君は歴史のお調べが餘程お悉い樣です、僕は伊勢の小學校に職を奉じて居ますが先月生徒を連て大津へ參つた時、こゝが明智左馬助馬にて坂本へ渡つた處で

すかと問れて、どうも變に思ひました、いかに名馬でもこの湖中を泳ぎ越す事は出來まいと心付ましたが、貴君のお考はどうで御座いますか、新澤庵これを聞てぐッと得意になり、成程……いかにも御不審御尤、狩野永德が雲龍を描いた陣羽織を着て、ザンブと飛こみですか、アレは眞書太閤記と云小説七分事實三分、七分三分の曲尺合で書のめした狂言綺語でげす、この湖水は享保の頃までは今の縣廳の前まで湖水さし入つて、只今の市中は元龜天正の頃は、海中ですから、湖水は餘程廣かつたものですナ、其れは兎も角も、向ふの坂本の城跡を見宛に、一騎海へ乘こむとして、二里餘りありませう、馬はそれ程の長い處を泳越す事は出來ないです、ですから甫庵の太閤記には左馬助小船に取乘り坂本へ渡ると書てあります、左馬助程の武士ですもの鎧甲きて海へ飛こみ土左衞門になつて、天下の胡盧になる樣な、馬鹿な眞似はいたしますまい、教員先生大きに感心して分りました、甫庵と云人の太閤記は出版になつて居ますか、見たいもので御座ります、などと言ふを、新澤庵程よくわしらふ中に、逢坂山の



「トンチル」へ掛る、大谷を過て山科へかゝる、新澤庵曰く力彌さまのお屋敷はこゝかいなア、と小浪孃が嬉しがつた處だ、その由良の助の閑居を尋ねてはどうだろう、イヤ〳〵そんな鹽梅に道草を喰て歩いては、いつ太宰府へ着か分つたものでなし、今日京都を横目に睨んで大阪へ着としやう、京阪地方は度々見物したから珍しくもない、御尤〳〵それでは先づ一献聞召て元氣を付たまへと盃を出す、「吾等晝の酒は閉口なれど、新澤庵の勢ひに厭せられて二献のむ、肴のない酒は味くない、何かありませんかと問ば、澤庵「ビスケット」を出す、愈々閉口するを、田舎のお嫁さんらしい人、十四五の娘と二人重箱を更紗の風呂敷に包み、傍らに卯の花を折て持て居たるが、急に重箱あけて筍の煮付たのを三切紙へ乘て、あんたはん、味なふおますが、これ抔あがつてはどうどす、と言ながら出す、コレは難有いなんですか孟宗ですナどうも難有い、サア槻の屋大人これを肴に今一献とすゝめ、懐ろ紙一枚出して矢立の筆もてサラ〳〵と書て、筍の御禮ですトお嫁さんに渡したのを見れば例の狂歌

君がその厚い心のたけの子は
　お禮孟宗言の葉もなし

かくて次第に進みて山崎、高槻、茨木、吹田、梅田で乘かへて玉造停車場につきしは十二時前なりき。

（つゞく）

天くものたえずたなびくみねにだに
　住めばすみぬる世にこそありけれ　惟高親王

手枕のすきまのかぜもさむかりき
　身はならはしのものにぞありける　讀人不知



小説　花日記

佐藤露英女史

（上）

垂れたる伊豫簾の一と揺れ揺れて、松の木下に鳴き切りたる蟬の聲途絶えぬ。

樟腦の薫り一室に充ちて、八重十文字に引張りたる麻縄の上より、疊の下にも、椽にも、足を踏み入るる隙なきまで、並べられたる書籍の中に、机を夢の置き所、良人はすや〳〵と眠り安氣なり。夕風の涼しさに夢、破らるゝ途端、虚弱き御身に風邪召し給ふな。と妻は優しう後より小掻巻着せかけて、足音忍ばせつゝ、室内を出でんとせしが、不圖、傍の書棚の上に、緞子の表紙美しき畫帖めきしもの唯一冊、斜に置かれたるが目に留りつ。

何ならむ、伯林に在はす友の君より、送り越し給へる油畫の畫帖とは是れにや、凄まじきもあり、笑ましきもあり、折あらば見よやと許されたる其れにか。と立寄りて妻は靜に取り上げしが、表紙を繰れは次ぎに良人の手蹟もて、「花日記」、と記してあり。　花日記と云ふに先づ心を動かされて、西へ東へ良人が

旅寐の其折々、採り集めし紀念なるべし、と妻は躊躇もせず、懷かし氣に抱へて、丸窓の許に涼しき風を背に受けつゝ、正しう膝を折りしが、美しき笑み含みたる眼に、嚴しき花日記の文字を熟と見入りて、暫時は開きもやらず。

氷賣る兒の哀れなる聲門に聞えしが、何れへか消えて、濟ませて歸る髮結を捉へて、婢女共の浮世話に耽くると見えたり、幾室か隔たりたる勝手元の彼方に、さゞめき笑ふ聲のさわがし。

(中)

萩の花一と本、色褪せたり、十文字にしたる細き紙もて二箇所留めてあり。

目黒の不動より停車塲への途次、茅葺の屋根低く、柴垣高く結ひ繞らして、竹の編戸を内へと開け放したる儘の家あり、風情ありと中を覗けば、髢一つ、さらりと掛かりたる袖垣の許に、小さき莚敷かれて、麥藁細工の籠の仆れたる傍に、萎れたる秋草亂れ、可愛らしき人形、俎板、庖丁など散亂れるに、我れはれい子を見返りて、仲間に入りて遊び度しとは思はずや、と笑へば、其には氣付かず、垣の外を見詰めて立てるに、何ぞと眺むれば垣越しの白萩、半ば外面に溢れて美しく咲けるなり、れい子は其れを欲しと云ふ、主ある花なり、思ひ捨て給へと云へど聞かず、兩の手を我が腕に絡まして、取れよ、とせがむに、密つと三本ばかりを手折りて與ふれば、邪氣なき笑顔して、一つを我が制服の胸に挿しながら、奇麗なりとて喜ぶ事かぎりなし。

我れは花盗人の罪を犯しぬ、されど情知り給ふ神は許しも仕給ふべし。

紅葉二葉、くれなゐの色昔の儘なり。

千しほの楓、一としほの楓、取り交せて自轉車の把手に結び付け、眞間より、都の湯島まで直走りに走りぬ。

れい子の微笑はこの紅葉に落つるよと思ひしは仇なりき、告げずして我れ一人遊びしを恨みて、枝には指も觸れず、果ては何れへか姿を隱して、呼べども出でこず、探せども見えぬに、れい子の涙を拭ひやりて、執りなし給ふ母人は今日はお不在なり、我れ一人の力にてれい子が機嫌を直さん事の難きを思ひて、其儘家に歸る、紅葉の半ばを椽に置きしが、明日までも猶そを打捨て置くべきか。

菫の花一輪、形くづれず。

潛り戸の開く音す、誰や訪ひ來しと窓より覗けば、千代田袋に蝙蝠持ち添へたるを重氣に左手に提げて、菫の花束を右手に持ちたるれい子の、靴穿きたる足を引摺りながら、敷石傳ひて庭の方へと歩み來るなり、今日は大宮へ遠足と聞きしが、其れの歸途なるべし、大方ならず疲れしと見えて、意氣地なき歩み振りするよ、とをかしく、椽に出でゝ打笑へば、物云はで、袋も菫も其處に投げ出だして、腰下せしが、可愛き頰を膨らして、靴脱がしてよ、椽より上へ抱き上げてよ、と迫るやうに云ふ、我れの賴みて大宮へ行きて貰ひしにもあらず草臥たりとて、さほど恩に被せらるゝ理由なし、と云へば、この菫花を參らせ度きばかりに、上野より此處まで迂曲路して、猶更に草臥しなれば、少し位は恩に被せてもよき筈なりとて、亂れたる下げ髪の頭を振る、果ては袴までも取らせられぬ。

白薔薇一輪、色醜く黄ばみて、香もなし。

假初の風邪に打臥したるを誰より聞きけむ、出校間際に認めたりと云ふれい子よりの見舞狀、屆きぬ。友に誇らんとて簪したる白薔薇、墨摺る折にこの文の上に落ちたれば其儘封じてとあり、今日は母人の御手もて、桃割れとか云へるに結ひ上げしや、節立ちたる薔薇の短かき幹に、日本油の移り香高し。

白百合一と本、花片に記されたる紅の文字鮮明に殘れり、

高木氏が送別の宴果てゝ、深夜家に歸りて見れば、床の間の花籠に、睡魔を拂ふやうなる眞白き百合の花數本、投げ入れてあるに、れい子が我れの不在に來ての仕業、と微笑みつゝ近寄れば、俯向ける美しき花の面の一つに、紅のインクもて「折角參りしにお不在にて、あんまりに候、れい子」と記してあり、思はず我れは其花に接吻しつ、されどれい子に代れる紅の筆は、酒の匂を厭はしとて、面も向けざりき。

桔梗の花一輪、花片一つ缺けたるまゝ。

穩なる今日の日曜を、れい子はいかなる事して暮すやと、我れは湯島を訪れぬ。友に誘はれて枯野に遊べると云ふ、いさゝか力落ちて、我れも何れへかと思ひ立ちしが、れい子の不在を機會として母人の、來年は是非に其方との式を擧げさせ度しと思へど、彼女が振舞の何時までも稚く、大人しからぬに其れのみ氣遣はるゝ、と云ひ出でられしに、繰り言とばかり聞き流しもならず、種々に云ひ宥めて、遂日を暮したり、戻りがけにれい子の書齋に入りて見れば、片付きたる小さ

き塗机の上に、我れより贈りたる水入れを中央に据えて、薄紫の色ゆかしき桔梗二輪を挿せしが、其花に印し紙をつけて、片々に「兄様」、片々に「れい」、と書きてあるに、我れ知らず笑まれて「れい」の印つきたる方を胸に挾みて戻りぬ、歸途、海老茶の袴、幾群れかに逢ひたれど、れい子の姿は見えざりき。

白菊二輪、葉の添ひたる儘を、藤色のリボンにて結びてあり。

昨夜れい子は泊りたり、我れは思ひの外に寢過ごして、軒を傳ふ霜解けの雫、大方絶えし頃目覺めしが、れい子は、と爺に聞けば、出校時間を氣遣ひて疾くに歸りたりと云ふ、常のやうに起きよとて困らせもせざりしは、昨夜調べ物にかゝりて、三時過ぐるまでも我れの臥床に入らでありしを、知りてなるべしと、起き上がれば、庭より手折り來し白菊二輪、リボンにて結びしを、角帽の横に挾みて机の上に載せ、傍の白紙に「私もこれとお對の簪を、學校へ挿して參り候、兄様もこの儘被りて學校へ御出であそばさるべく、必らず途中にて落し給ふな」と鉛筆の走り書き、我れは思はず苦笑したり、れい子が聞かば、何故と怪むべし。

櫻の花一片、吉野紙のやうなり。

常よりも勝れて元氣好きに聊安堵して、今宵は一と先づ我家に歸るべしと、別れを告ぐれば、れい子は悲し氣なる面して我れを眺めしが、さらば明日。と聲音も明瞭と云ふ、點首きつゝ、附き添ひ給へる母人に何かと注意して、いざとて扉を押せば、兄様、々々、と惶たゞしく呼ぶに、驚きて振り返

れば、細りたる指に櫻の花一片持ちて、今兄樣の其處を開き給ふ途端、花瓶に挿してある櫻の花の、眼の前に散りて參りたり、共に行き度しと云ふにやあらん、我れと思ひて伴れゆき給へと云ふ、をかしき事を仰せらるゝよと、看護婦は笑ひたれど、我れは中々に胸迫つて引き返しつゝ、花片持つ左手を輕く握りて、この花に琴も彈かすべし、花も活けさすべし、病ひの身に苦しうはあらぬや、と云へば頭振りて微笑む、紙に包みて風呂敷に入るゝまで、眼も離さで見守り居しが、明日は早くに來ませよ、さらば。と我れを仰ぎて再び微笑むに、昨夕までは唯笑みかとばかり、果敢なき影の青き唇に射せしのみにて、笑ふべき力さへ失せ果てしか、と我れを泣かせしものが、僅一日にてかゝる經過を見んとは實に思ひよらざりき、と我れは心勇まれて、退院も程なきにあるべしと、身も心も輕く始めて病院の門を出でたり。

椿の花一つ、

禮子の墳墓に手向けたる花なり、明日を契りて去らんとする時、足許に落ちたる花の我れと思ひて伴へよ。と墳墓の下にて呼びつゝあるにや、今宵も母人と二人して、泣きつゝ在りし世の君を語るなり、其折この花を傍に据えて、三人まどゐせし昔の樣を忍ぶべくや、れい子の代りて笑みてもくれよかし、泣きてもくれよかし、物云はではあるまじきぞ。

（下）

後幾枚かの白紙を殘して、他には一文字の痕もなし、悲し氣の色迫りたる面色して、妻は再び繰り返さ

んとする時、圓かなる夢を何にや破られたる、奥の方に幼兒の泣く聲頻なり、妻は我れを忘れて立ち上がりしが、日記を元の處に直しつゝ、良人の寐顔を見守りて、實にもよ、嫁ぎてよりこの方、始めて夫の君が笑顔を見しは、彼子が風車を見て笑み初めし其の時なりけり。と恍惚と其儘佇むを、促す如き幼兒の泣く聲再び聞こえつゝ、妻は出で行きぬ、良人の夢はいまだ安らかにして、淋しき面ながら、口許に微笑を浮べたり、果敢なき瞬間の熟睡に、幼兒が甘ゆる顔や見し、故の人が愛度無き振舞や見し。

五万圓の結納

コークツェイン原著

滄浪生譯

第一章　ローマ彫刻室の場

オヽ、ジョージ様、妾は、郎君を愛します。

可愛メリ様、私は夫れをよく知つて居ます、阿孃の父様は、なぜあんなに頑固でせう。

父様は、惡い積りではないんです、けれどネ、美術家などは、馬鹿々々しく見えるのです、父様に只

藥種の事限り分らぬのですから、郎君は妾を餓死させるだらうと思つてるのでせう。

阿孃の父様にも困りましたナ。あゝ私は立派な技量のある彫刻家でも、こんなに何も十分に食べられないものにならんで、なぜ澤山金儲の出來て、ソウして腕のない藥種家にならなかつたらう。

マー氣を落さないで下さいネ、ジョージ様の父様の反對は若し郎君が五萬圓さへ儲さへすれば、皆消えて仕舞ふのです。

エー五萬圓……私は未だ先月の家賃も拂つて居ません。

第二章　住居の場

どうも、汝様何程談仕たつて、埒ちが明かないサ私は、何も、汝様に反對仕ては居ません、だが私は自分の可愛い孃をヤレ愛するとか、ヤレ美術家――飢渇とかソンナ用の尠ないものと結婚さすることは出來ません。汝様は夫より外何にもないでせう。

貴下の仰る通り、私は、貧乏です。併しながら、名譽……名譽、これは、何でもないんでせうか、アルカンサスのベラフードル閣下は私が此間亞米利加に送つた新彫刻は、實に秀逸らしい技量を示して居る、彼人は、何日か有名なものになるだらうと仰いました。

馬鹿々々しいアルカンサスの豚が何を知つて居るものか、名譽とは何でもありません。ソンナものはどうでも可いんです。夫よりは、汝様の彫刻した物の直段が肝要なんだ。ソラ夫れを造るのに汝様は六ケ月かゝつたでせう、ソウして百圓にも賣れないでせう。サゝ愚圖々々言つても仕方がありません。五

萬圓です、五萬圓御出しなさい。ソンなら汝様が私の嬢の手を携いて伴れて行つて可いです。ソンなに一生懸命なら六ケ月の間に其金を拵へなさい、へえサヨナラ。

あゝ困つた、あゝどうしたら宜らう。

第三章　彫刻室の場

オヽ、ジヨン君、君は僕の小供の時からの友達だが僕は不幸なものだ。

君は、間抜だ、間抜だヨ。

僕には彼の肖像の外には、何にも愛するものがない。けれど君見て呉れ玉へ、彼の白い冷い顔には、僕に對して、少しの同情もない。アンなに美麗だが親切は少しもない。

君は白痴だヨ

えヽジヨン君

阿房だヨ阿房だ、君は金子を拵へるのに六ケ月も猶豫があるといふのか。

ジヨン君まア、ソンナニ僕の苦しいのを嘲弄し玉ふな、僕には六ケ月はヅッと六百年あつてもどうなるもんか。僕のやうな名もない、資本もない友達もない詰らぬ者が何が出來るものか。

馬鹿々々――臆病　赤ん坊金を拵へるのに六ケ月あるといふのじやないか。五ケ月でも澤山だ。

君は氣が狂ふては居ないか。

六ケ月は多過ぎる位だヨ、まア僕に任し玉へ拵へて遣るワ。

君は如何する積りで、どうして、ソンナ澤山の金を拵へる事が出來るのか。

君は夫れを僕の仕事として、少しも干渉しないか、一切僕の一手に任して其處置に服從するか。又僕がドンなことを遣つても咎めないと堅く約束するか。

あゝ僕は眩暉する分らない、けれど約束せう。

此時ジヨンは鎚を採つて暫時肖像を打守つて居たが、意を決して先づ肖像の鼻を打落し、次いで兩手の二ツの指、耳の全部足の全指を打落し膝より下の脛を削り、殆んど肖像の形影を打毀つて、其帽を頭にし悠然戸の外に立去つた。

ジヨージは暫時目を瞬たゝき無言で、其碎かれた肖像を打眺めて、居たが、あわれ床上に打倒れて氣絶して仕舞つた。

ジヨンは、直ちに、馬車に打乘つて歸つて來て、氣絶して居る彫刻家と碎かれた肖像を其馬車に積み微かな聲で、何ごとか呟きながら極めて落付いて、其馬車を飛ばしたが、彼は、氣絶した彫刻家を其寓に殘して、肖像と共に、ビーヤク、イリメリスの方角に消え失せた。

第四章　住居の塲

今日の二時で、此六ヶ月も終る、オヽ苦しい、オヽ苦しい、私の生命は亡くなるのか知ら。アヽ死んだ方が優しだ、昨夜も夕飯を食べなかつた、今朝も食べない、けれど、飲食店にはゆく金はない。アヽもう言ふまい、言ふまい。靴屋は死ぬほど私を攻むるし、服屋は喧しいし、家主は私を脅迫るんだもの、

ア、憐れなもんだナ、ジョン君には彼の日此方會はない、彼の孃は此間大街道で會つた時、私の方を見て優しく笑つた、けれど、頑固爺の一言で他の方に向つて仕舞た。

アラー今誰れか戸を叩いて居る、誰れか又僕を脅迫に來たのか知ら、屹度人惡の靴屋だ御這入なさい。

へえ旦那樣旦那は御仕合ですな、天運が開きましたナ、へえ新らしい靴を一個持つて參りました、イヤ御拂ひは、何時でも可いです。へえ些とも急ぎません、どうか宜しく御目を懸けて、へえサヨウナラ。

自分へ靴を持つて來た、御拂ひは入らない……華族樣にでもするやうな丁寧な御辭儀を……目を懸て呉れなんて……マーどうしたんだらう。

トントン

御這入なさい。

御免下さいまし、旦那樣、旦那の新らしい服を仕立て丶參りました、へえへえ、サヨウナラ。

トントン

御這入なさい。

マー御邪魔でせう、御免下さいまし、此室は、餘り汚れて居ますから、下に立派の室を調へましたへえサー、御早く。

トントン

御這入なさい。

へえ貴下の借越は悉皆拂へました、何卒御手元の不自由ない様に是非共手前共の銀行から引出して下さい。

トントン

御這入なさい、

ア、見上げた賀殿、私の娘は汝様に上げます。何卒彼の娘と結婚して下さい、彼を愛して下さい、ソウして二人共に幸福にハア………

トントン

御這入なさい、

オヽ、可愛いジョージ様、私共は助かりましたネ、眞誠に助かりました。

オヽ可愛いメリ様、私共は確かに助かりました、全く助かりましたヨ。けれど、どういふ譯でかどういふ事でか、私には頓と分りません。

第五章　コーヒ店の場

驚く可き一大發見

一人の米國人が群がる客人の眞中に衝立つて其手に高くローマ日々新聞を讀み揚げた。

數年前ローマに移住せる米國人ジョン、スミス氏は、六ケ月以前カンパクナに於てシピヲ一家の墳墓に近く些やかなる土地を買へり。地所の持主はボルギ侯の一族にて破産したる人なり、スミス氏は間

もなく其地所を其友人米國の彫刻家ジョージ、アルナルド氏に讓りたるが尚好意を以て十分に其土地を整理せんとて、一の穴を穿ちつゝありたるに、此程古き女の肖像を發見したるが。這は往時ローマの美術舘に納めたる寶像の中にも比ぶなき佳品なり、粘土の爲に汚れて且つ幾春秋を經したため已に鼻左足の膝より下の脛右足の指兩手の二指は朽ち落つるも、其精密なる製作卓越したる技能は、立派に保存せられ、何人にも驚愕を以て、見らるゝなり、此大發見あるや、ローマ政府は、一方には武官を派遣して、其肖像を占領せしめ、一方には美術監査官考古學者敎會大僧正等を委員に擧げて、其性質及び時價に付きて、專ら調査中なりしに、昨夜に至りて、同彫刻は、紀元三世紀の卓越したる技術家の手になり一の欠點なき神聖なる肖像にて時價十萬圓と決定したり。此に於てローマ政府は其法律に從ひて、時價の半額五萬圓を土地所有者ジョージ、アルナルド氏に渡し、該肖像はローマ大廟に安置したり。

へえ、まア、ハー、

仕合な男だな、まア何といふ事じやろう。

諸君吾等は、土地の賣買や、肖像採掘會社を建てやうじやないか、ソウして一儲仕様じやないか。

第六章　ローマ大廟の場

メリやこれがそら世界第一の肖像だヨ。汝も聞いた事のあるビナスの肖像サ。此處に來るとナンダカ奇妙な感がする、十年前此處に立つた私は、金持ではなかつた、一錢も持たなかつた。

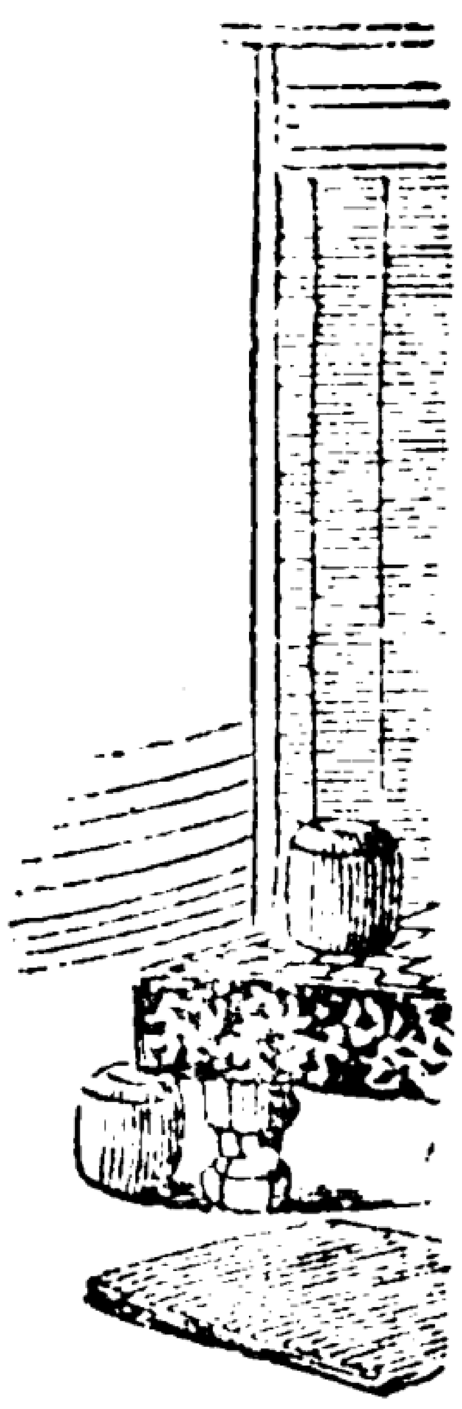
ア、拝んでも宜いやうな肖像ですネ。

ア、爾うです。併し好い親切なジョン君が其足や鼻を毀たなかつた前のものとは、比べものにならないヨ、けれど妙智のあるジョン君、英俊いジョン君、凡べて余等夫婦の造化であるジョン君の恩は忘れてはならないヨ。

終

有名なるビナスの肖像は、今尚ローマ大廟に世界古美術中の白眉として立つて居る。たが誰れでも、生涯の中、其像の前にて稀世の技能を褒むるとき、此一大秘密の源因を思ひ出しては不可ん、又何國でも化石した肖像を掘り出すことがあつたときは、如何に高價の買手があつても、之を斥けて、ローマ政府に送るべしだ。

（をはり）





夕立

德大寺實則

ゆふ立はいつしかすきの木末より
落るしつくそすゝしかりける

避暑

佐々木高行

山もとのあさき流れもたちよりて
むすへは夏をわすれけるかな

夏夕

壬生基修

こぬ秋もそとにかよひて夏ころも
あつさをはらふのきのゆふ風

秋露

長谷信成

うつろひしま萩か枝をふくかせに
花こきませてつゆそこほるゝ

鎌倉右大臣

宮地嚴夫

思ひきやたのみしちゝの木陰より
われをうつへきあた出むとは

電話

荻原嚴雄

隔たりし人にもあへるこゝちせり
はりかねつたひ言をかはせは

彫刻

芝葛鎮

世と共に進みたりけりかねに木に
きさむ手業のねりてみかきて

小式部内侍

小出粲

先たちし此世のみかはくちとさも
おやに後れぬあはれよめの子

朝露

植松有經

朝さむくなりにけるかな秋はきの
したはしとろに露のみたれて

浦鶴鳴月　遠山英一
あしたつの聲さやかにも聞えけり
月すみわたるうらのまつはら

藤原百川公　蜂須賀隨子
川の名の清きこゝろのありてこそ
よの穢れをもすゝかれにけれ

夜話　前田朗子
しめやかに語るとすれど聲たかく
聞ゆるまでに夜はふけにけり

夏海　本多芳子
なつくれは賑はひにけり潮あみに
來る人おほき江のしまのうみ

砂月涼　南鄉栁子
月かけもまさこの上にきらめきて
なみのよるこそ涼しかりけれ

鶏　佐藤艶子
にはつとりねくら放るゝ聲はして
また夜はくらし山もとのさと

外交　北島以登子
打とけて語らふまゝに外くにの
ひとのまことも顯はれにけり

夏田　田中瀧子
日にやけむことも厭はす打むれて
たくさぬく見ゆ賤の少女ら

檜　小川直子
わけいれは日影もさゝぬひの木原
幾とせへたるはやしなるらむ

張良　服部磯子
捧けたるくつよりつひに一まきの
ふみの奥をもきはめつるかな

教の庭

九月一日兼題

樞密顧問官
正三位子爵 黑田清綱先生撰

初秋虫

（黑田先生目下不在中に付き菊池武則先生代撰せられたり）

天　　大和　栗山たか子

八重むくらしけれる庭になくむしの
　こゑたてそめつあき來たるらし

地　　名古屋市中市場町三丁目　水野そう子

秋來ぬとをぎのうは葉をふくかせに
　まかきのむしもなきそめにけり

人　　羽後國由利郡院内村　三浦ふさ子

むしのなくにはのをすゝきなかりせは
　あきくることをいかてしらまし

甲

　　秋田　三浦せつ子

夕されはかきねにむしのこゑすなり
　ひるはあきともおもはさりしを

　　東京　山田ふみ子

吹くかせは荻のうは葉におとつれて
　ねをなくむしのあきは來にけり

　　秋田　古瀬惟子

ふたつみつ桐のひろはのちるなかに
　またこゑほそききり〳〵すかな

　　秋田　佐藤かつ子

秋としもしらてあつさをかこちしは
　むしのねきかぬきのふなりけり

　　河内　辻本ひさ子

あふきさへいまたすてさる閨のうちに
　きこえ初めけりこほろきのこゑ

　　東京　荒井あさ子

秋きぬとつゆもおきそふわけかたに
またよをかこつむしのこゑかな
東京　荒井こと子

庭のおもへたつるなかのそてかきに
こゝろさひしきはつあきのむし
三河　鵜野くわ子

おくつゆのみたるゝのへのゆふ風に
むしもわきとやなきはしめけん
三河　河合ぬひ子

秋きぬとむしなきそめつわかやとの
つゆまたあさきにはくさのうち
埼玉　横田音羽子

あきもまたあさ澤野へのくさむらに
つゆをたつねてむしのなくなり
埼玉　横田秋子

來ん秋のゆふへのかせのすゝしさに
むしもひとこゑなきはしめけり
肥後　德永萬壽子

秋たちて日かすはいまたあさけれと
あはれはふかきむしのこゑかな
東京　河田いし子

きのふよりはしゐすゝしくふく風に
こよひきこゆるむしのこゑかな
北見　中川伊代子

いつしかと秋かせ立ちてむしのねも
いよ〳〵しけくなりにけるかな
埼玉　前野房子

秋きぬとくさの葉ことにおきあまる
つゆをよすかにむしそなくなる
伊豫　吉良貞子

かやりたく賤がけむりはみゆれども
よは秋なれやまつむしのなく
名古屋　瀬木せき子

あつしとて秋の立つ日をまつむしの
こゑきく夜ともなりにけるかな
大阪　吉田英子

秋の庭

そよとふく風のおとにもさきたちて
　あきをつけたるむしのこゑかな
　　東京　大枝庸子

きのふけふ秋はきぬらしやへむくら
　しけれるかけにむしのなくなり
　　東京　金原玉城子

初あきのけしきのもりのむらさめに
　ふりいてゝなくすゝむしのこゑ
　　東京　河合象子

秋きてもまたほにいてぬすゝきはら
　そこはかとなくむしのこゑする
　　東京　安井みし子

こよみなきみやまのおくにすむ人は
　むしのなく音にあきをしるらん
　　東京　小松きく子

子の日せしのへは千草のさきそめて
　ひとまつむしのなくねをそきく
　　東京　山本茂子

あきゝぬと人こそしらねゆふつゆの
　おくくさむらにこほろきのなく
　　東京　山本梓子

秋たちてほとなきのへもおくつゆの
　さむしろなれやむしのなくなる

乙

月をまつにはのすゝきにおとすれて
　まねかぬあきをつくるむしのね
　　羽後　三浦さわ子

なく虫のこゑもあはれにきこえけり
　あきたちけりとおもふはかりに
　　肥後　岡山登壽子

秋かせはかと田のいねにおとつれて
　またこゑわかきむしをきくかな
　　肥後　坂本螢子

さびしさはいつもなからになく虫の
　なみたをさそふあきは來にけり
　　東京　山田靜子

すゝをふる音にまさりてわかにはに
　あきをしらせてまつむしのなく
　　福井　平田さう子

秋かせのふきそめしよりなにとなく
　あはれをそふるむしのこゑかな
　　福岡　武田龜子

こゝろなき虫のこゑとはおもへとも
　かなしさそふるあきはきにけり
　　福岡　武田外代子

ちりそむる桐のひとはにつゆみえて
　はつあきつくるむしのこゑかな
　　筑後　鐵山増代子

はつ秋のしるしはかりをきりきりす
　まとのとちかくなきそめにけり
　　肥後　佐々小琴子

はつ秋のかせのおとつれまつむしの
こゑもひとつにきこえつるかな　肥後　佐々有鄰子

秋もまたあさちかはらのゆふくれに
こゑかしましくむしのなくなる　野州　佐藤興子

虫の音はなか〳〵しけし野邊はまた
あきのけしきのさやかならぬに　下野　藤原のふ子

たへかたきあつさもいつかすき去て
むしのねさゆるあきはきにけり　東京　荒井幸子

夏すきてあきそきにけるはなそのに
むしもこゝろやしめてなくらん　東京　荒井千代子

花すゝきまねく野はらになくむしの
ねにあらはれてあきはきにけり　信濃　今井萬子

秋かせのふきそめにけんわかやとの
くさはかくれにすゝむしのなく　播磨　和住千鶴子

あきはまた淺ちかはらのゆふつゆに
うらめつらしくむしそなくなる　三河　本多きさ子

三か月のかけもほのめくゆふつゆに
こゑたてそめつにはのまつむし　三河　服部正子

あきはまたあさちか原になくむしも
ゆふつゆまちてうこきそむらん　三河　服部萬子

秋かせのふくかまに〳〵すゝむしの
こゑさゝやかになきそめにけり　香川　林　靜子

風もまたおとせぬやとのくさむらに
つゆをたつれてまつむしのなく　大隅　山田よれ子

しらつゆもまたおきあへぬ萩かくれ
あき來にけりなむしのなくなる　大隅　山田よれ子

いまよりのあきのあはれを袖かきに　大隅　稻垣政子
まつつけそむるむしのこゑかな

いひしらぬあはれそこもる秋きぬと
なきはしめたるむしのこゑにも　大隅　稻垣政子

夕されはにはのちくさのむしのねは
はやはつあきのしるしなりける　山口　伊藤まつ子

秋來ぬと目にはみえねとつゆむすふ
くさむらことにむしのなくなる　肥後　徳永多瑠子

さよふけてまくらにかよふ虫のねの
あはれおほゆるあきはきにけり　香川　大山豊子

秋としもいふはかりにやもゝくさの
はなにさきたつむしのなくらん　肥後　徳永廣子

いつのまに秋はきぬらんひさかたの
つきにすみゆくすゝむしのこゑ　東京　林　艶子

萩か枝につゆおきそめしゆふへより
たれまつむしのなきしきるらん　東京　櫻井清子

おのつから秋のあはれをさそふらむ
きのふにかはるむしのこゑ〳〵　東京　敷島うた子

あき立てかせにこほるゝゆふつゆに
ぬれてやむしのなきそめぬらん　東京　山崎文子

あき來ぬと荻の葉そよくかせのみか
むしのこゑにもおとろかれぬる　東京　大町律子

桐の葉もいまたさそはぬあきかせに
つゆもこほれてむしそなくなる　東京　三好珍子

ひもとかぬ千草のもとにこのゆふへ
あきをつけたるむしのこゑかな　愛媛　高市もと子

むらさめの露もかはかぬくさむらに
あきを知りてやすゝむしのなく　長野　小泉みつし子

敎の庭

こほろぎの鳴音かなしくきこゆなり　秋田　和田りつ子
けさたつあきのにはのおきはら

秋かせのけさふきそむるにはの面に　東京　椎野秀子
くろゝもまたてむしのなくなる

けさよりは荻のうはかせおとかへて　東京　椎野蕭子
した枝にむしのこゑそみだるゝ

はつあきの風ふきはらふくさむらに　東京　椎野ぬき子
みたれそめたりむしのこゑ〳〵

しかすかに秋たつよひのさむければ　和泉　福原董子
つゝりさせてふこほろぎぞなく

なつもはや秋をとなりのなかゝきに　遠州　積山鏡子
すたくもすゝしまつむしのこゑ

秋来ぬとこよひそしりぬゆふつきの　大和　栗山しゆん子
すゝしきかけにまつむしのなく

秋はまたあさちかはらのつゆしけみ　東京　森島靜子
そこともわかすむしのねそする

あつきひはきのふと過てさひしけに　東京　山口琴子
つゝりさせよとむしそなくなる

風にちるひとはにあきのたつ見えて　東京　杉田慈子
ゆふへさひしくむしそなくなる

あきされはいとゝあはれに虫そなく　東京　添田みつ子
身のゆくすゑをいかにせはやと

秋あさきひかすにあれとなか〳〵に　東京　添田秋子
ゆふへさひしきむしのこゑかな

夕つきよのすゑのくさもつゆおきて　東京　安井じゆん子
むしのなくねにあきはきにけり

桐ひと葉まつおちそめてあきたては　東京　林環子
あはれをこむるむしのこゑかな　若松　高橋久子

秋はまたあさちか野邊のゆふつゆを
たつれわひてやむしのなくらん　若松　川島謙子

秋かせの身にしみそめしゆふへより
れいろゆかしきむしのこゑ〳〵　若松　髙橋泉子

淺ちふのはきのしたつゆいろことに
わけてやむしのなきしきるらん　東京　牛山棠子

くさむらに今宵そむしのこゑたてゝ
みにしみわたるあきのはつかせ　東京　牛山棠子

あきかせのたちおくれたる山さとは
むしの音よりそつけそめにける　東京　小杉きよ子

秋の色もあさちかはらにみえそめて
まつおとつるゝむしのこゑ〳〵　東京　牧　稼子

たえかぬるあつさに秋をまつむしの
のきにかきれになきそめにけり　東京　村山かよ子

我にはのつゆまたあさきあさちふに
あきほのめかすむしのこゑかな　東京　永井ざき子

なきそよく秋のはつかせたちし野に
ふりすてかたきすゝむしのこゑ　東京　永井房子

荻のはの音たてそむるにはのおもに
ひとまつむしのなきそめにけり　長崎　岩田春子

いつしかと秋は来ぬらしよもすから
まくらにきなくこほろぎのこゑ　攝津　駒井登雄子

きりきりす秋またあさきゆふへより
こはきかもとになきそめにけり　攝津　大岡幸子

秋のきてなれしあふきもすてぬ間に
みやきのはらにすゝむしの鳴く

秋きぬと誰かつたへけんゆふへより
しすかかきねにこほろきの鳴く　攝津　大岡はな子

昨日けふふくかせよりもむしの音に
はやくもあきとしられぬるかな　攝津　森本芳江子

あれはてしにはそなか〳〵面しろき
むしのこゑするあきはきにけり　攝津　鹽見文子

昨日今日あきくるすのに來てみよと
ひとまつむしのこゑそきこゆる　名古屋　木下鶴子

あき風のけさたちそめしにはのもに
あはれもふかしむしのこゑ〳〵　東京　後藤喜代子

はし居してひめのかゝみのひもとけは
はつこゑたかくこほろきのなく　陸前　前田河みさを子

みにしむる風はさまてもかはられと
つゝれさせてふきり〳〵すなく　陸前　前田河千年子

三日月のかけのほのかになくむしの
こゑにもあきはまきれさりけり　三河　永井さい子

おく露にあきのあはれをやとしつゝ
つゝれさせとてきりす〳〵なく　東京　柏田靜子

秋かせのふきて日かすはたゝれとも
むしのなく音のたえぬにはかな　熊本　田代綾子

あつけさは昨日のなつにかはられと
むしのなく音にあきをこそしれ　熊本　田代豔子

丙

ひとりぬるまくらへ近きむしのこゑ
よもふけゆきてはつあきのかせ　三河　白井よし子

たまとちる露とみたれてもろともに
あきのはしめのむしのなくかな　横須賀　岩橋花子

鈴虫のなく音さひしき小野のゆふへ
さやかにあきのはつかせそふく　横須賀　上田雪子

ひさかたの月もすみけりむしの音に
おのつとおほゆあきのはつかせ　三河　石原逸子

はつ秋のむしのねほそき夜な〳〵を
ひとりさびしきやまのいほかな　鳥取　大塚信子

うたゝねに秋をおほえしゆめさめて
まつきくものはむしのこゑかな　下野　川連美喜子

きのふけふ色つきそめし葉かくれに
なく日くらしのこゑよはりけり　下野　菅沼ます子

化むしろ尾はなかくれにいとゝしく
きそひてなけるきり〳〵すかな　下野　菅沼德子

あきの野の千草のなかをわけゆけは
たれをまつむしまねくをはなに　下野　菅沼德子

あれはてゝ月かけきよきあきの夜に
こゑあはれにもすゝむしのなく　下野　菅沼德子

秋の野のとふひともなきくさむらに
われをまちけんまつむしのこゑ　下野　菅沼淑子

萩すゝきまたわかやけるはつあきに
ともれかたるやむしのこゑ〳〵　東京　荒井滿武子

きのふ今日あきは來にけんあさち原
むしのこゑ〳〵めつらしきかな　下野　川中子てつ子

夏ころもまたぬきやらぬこのゆふへ
つきにうかれてむしのなくなる　大阪　廣瀨さき子

きり〳〵すあきもたつたの山のほる
つきになくなるむしのこゑかな　三河　石川滿壽子

秋の庭

初つきのかけまつむしのこゑきよく　三河　石川代志子
はれわたりぬるみやきのゝはら

みにしみて秋はきにけりむしのねの　埼玉　前野壽賀子
はたおるまでにたもとすゝしも

八千草のにしきもやかて見ゆるかな　伊豫　小松千代子
はたおるむしはなきはしめけり

つれさへもかなしく見ゆる秋ののに　東京　中林英子
まつむしなきていやまさりけり

秋はまたあさちかはらになくむしの　美濃　吉村せむ子
こゑめつらしきこころにもあるかな

草の戸にすゝしくおもふすゝの音は　長野　山本直枝子
はやあきつくるむしのこゑかな

おとろへぬ暑さなれとも鳴くむしは　長野　山本基子
はやあきつくるこゑあはれなり

きくたにもこゝろさひしき荻の葉に　東京　椎野銳子
かよへるあきをまつむしのこゑ

秋くれはをりしりかほに八重むくら　若松　高橋操子
ちくさのもとにまつむしのなく

ふりいでゝなくれや秋のいろならん　東京　小松うた子
あさちかはらのすゞむしのこゑ

おきそめしつゆをわけつゝ蟲おへは　東京　小松みつ子
たもとすゝしくうるほひにけり

悲しさをとくはつけすとこほろきの　攝津　駒井この子
あきのはしめをしのひてそなく

月みんとにはのしは生におりたては　陸前　三浦ゑん子
またいとけなきこほろきのこゑ

あはれともまた樂しともいひなまし　下野　森田みと子
わか住むさとのはつあきのむし

さやかには秋のけしきの見えれども　下野　岩森さと子
鳴くむしの音に知るへかりけり

秋來ぬと知らせかほにもわかやとの　下野　岩間あさ子
まかきのはきにすゝむしのなく

啼く虫のこえもあはれにきこえけり　駿河　渡邊八重子
はつあきかせのふきそめしかは

ゆく夏ををしみてやなくむしの音の　駿河　渡邊八重子
はつあき來しとひとにつけつゝ

秋つくるかせもよふけてすゝむしの　筑前　ふさ子
こゑのたかくもなりまさるかな

雨さむくくさにしつむやむしのこゑ　茨城　中里希武子
わかいほすみにこほろきのなく

なつよりもしのひ〳〵にきこえにし　山口　村上操子
むしそおのれかあきになくらむ

昨日けふふきしはかりのあきかせに　清國　稻田衆子
くさむらしけくむしのこゑ〳〵

あきゝぬと野もりか庵のやつれかき　宮城　大槻初音子
つゝりさせとやはたおりのなく

このゆふへはたおり虫のおとすなり　宮城　大槻慶子
あきやきぬらんこころもてさむし

秋來ぬとおもへはいともみにしみて　陸前　鈴木しき子
はたおるむしのこゑあはれなり

あきあさきゆふへの庭のむしのねに　陸前　鈴木千代子
ものゝあはれのふかくなるかな

よは秋になりにけらしなやまさとの　大阪　長野悦子
かへのやれまにきり〳〵すなく

なくむしの聲のひゞきはまたあきの　松山　上原のふ子
なみたのつゆやすくなかるらむ

しのひ音に夏よりなきしすゞむしの　山口　田村多豆子
こゑのすゞしきあきは來にけり

華族女學校教授　井上頼圀先生撰

地

思を記して女鑑に送る

大阪北區堂島濱通二ノ五　廣瀬さき子

いとなつかしき女鑑の君よ。妾が始めて君に見えしは、まだ幼き時なりき。絶えず新らしき教訓と、慰藉とを與へらるゝによりて、さなきだに幸ある身の一しは希望の光をも添えて、益〻幸福なる身となりぬ。今小學時代の友は三人四人のみにて、それさへ遠國にてとひ來給はず。然るに君のみは、月に二度遠き處よりかならずおとづれ給へり。あゝ其の時はなつかしさのあまり、食事をも忘れて側をはなれず。あゝかくするは我のみにか、否わが學びやの友も皆然るならん。あはれこの多數の忠實なる愛讀者を有する女鑑は、げに幸なるかな。されど君よ。あまりに讀者をもとめんとしてかの表紙、口繪にのみうつくしうにしきをかざりて外には何の價値もなきかのいまはしき雜誌のごとくなる勿れ。君の後には常に物の窺ふありて油斷あらば、打たはさんずとうかゞへり。君よ心し給ひて常に時勢を察し、將來を案じて、天晴婦人界に大功を立て給へや。

人

播磨國揖保郡新宮村　和住千鶴子

うつし世に、文てふ文はおほかめれど、女鑑といふなるふみこそ、その名に負ふる女の道、はまの眞砂の數々を理つくして、ねもごろに敎ふるなり。さればにや、おこなるひなの賤の女も、なにはの

事のよしあしを、知りそめにけるぞ、いとうれしき通ひ路もありやなしや、みやま木の埋れし里に、うつせみの世をはかなみ過す身は、たゞこの文きたらん日をぞ初秋の雁がねならねどいと待ちぞわびぬる、胸しら糸むすぼれし時ぬば玉の夜すがらねられぬをり、手引の糸のくりかへし／＼よみもてゆけば、おのづから、こゝちさはやぎて、いとたのしかりけり。これなん文の徳なりける。あなたふとや。されば、この文、久方のみ空あらんきはみ、人の住むなるこのつちのあらんかぎり、とこしへに、かはることなう、いや榮えにさかえて、野邊に、さまよふ撫子に玉ぼこの道、こま／＼と、みちびきまさんことこそ、願しけれ。

人

横須賀中里
山田秀治方
岩橋花子

心ある人々の口に、喧しかりし女子敎育も、今は盛んになりて、そがしるべともなる、新聞雑誌の類ひも、多かる中に、女鑑てふ、名さへいみじき雜誌こそ、妾が師なれ友なれ、春は霞める遠山の端に、日の入り初むるをも知らでひもとき、秋は月影さやけき窓の下に、小夜更くるをもしらで物しつ、月にも花にもかへがたくなん、つゞりたる言の葉の數々は、みな女の道の寶にて、ふりし昔しの賢こき女性の傳へに、賤が身もそゞろかへり見られつ、父母に仕ふる道、夫につくす業、或は子に敎ゆべき理りなど、記されて、家庭に母たる、妻たる、はた學びの庭に敎草つめる乙女子が、日々の栞ともなりて、わが國の女子に裨益を與ふること限なきは、洵にうれしきとにこそ、あはれ此、かしこきいみじき文記し給へる記者の君達が、妾等女子の爲に御心くるしめ給ひし御惠みを、深く謝し參らすと共に、幾久しく敎への光かゞやかし、玉鉾の直なる道を照らし給はらん事を乞ひまつるになん。

優等

肥後　佐々有郎子

田舍人の口さがなしと、都の女子に、見すてられては、かひなけれど、陸奥の信夫もぢずり、こゝろに忍びはつべき、ことにしあられば、一つふたつ、舊暦の七夕祭の頃なれば、梶の葉にしるして女の鑑にてらし見んとてすなり。そもそも生としいけるもの、その長たるひとは、たかきいやしき、朝夕晝夜の勤なくては、有べからず。君に忠に、父母に孝に、夫に貞なる、千里の海の表の國にても、おなじ務とこそはしらりつれ。いはんや萬世一系の皇國民は、婦女子といへども、四季なりなりに、忠孝の心を守り、神代より連綿たる歌に文に、一時もないがしろにせぬこそ、吾國民なれ。近ごろの敎の庭の撰歌を見るに、雨後蟬の地賞を得たまひし日高氏の歌三四句を添削せられ、池蓮の撰歌の天賞の林氏、地賞の大町氏、人賞の金原氏の三女史、ともに原作歌の上下の句を添消せられたまひぬ。如此の歌をば、撰歌の秀逸として、黑田正三位の歌を、短册にして贈られける事を、田舍女は、いと心くるしうおもひ侍りぬ。撰者の君は心用ひせられし、撰歌なるべけれど、歌はよむ事のかたきにあらず。よく詠むことのかたきなりと、故人の金言うべなりけりな。

肥後　德永廣子

ひらけゆくよの幸には、眞柴かる山里、しほやく浦曲にも、學びの道進み行きて、女の學事をはげむこそ、最と目出度かりけり。そが中にもみやびやかなる、みや人は其みめかたち麗はしく、ゆかしきが上に、學の業を深くつとめ給へば世に愛たき人のみ多からん。妾のごとき山里にそだちし身は學術もいと淺きに、まいて見惡き容は、いかに鏡にむかひて、繕ればとて、心の鏡にうるはしくなり立つべきにもあられば、朝夕女鑑にうちむかひて、見侍れば、おろかなる身にも、正しくうるはしくあきらかに、數多の詞花見る度に、心姿つくらふべき、心ちし侍るとて、父母もいとよろこび侍りぬ。妾は一しほ貴く愛たく思ひ侍りて、師とも友ともせまし、此の女鑑よ。老後までもなづかしく侍れば、御社ますます此鑑のうるはしき光を、世にみがきたてたまはらんことを、ねがひ奉るになんかしこ。

東京　中林英子

大御代のひらけ行くと共に、女子教育も、月に日に進み行き、未來の良妻賢母を、敎育する學校は、數へ能はざる程、創立せり。然して在學中は、專ら女德てふ玉を磨き、人に嫁して後は、專ら良人を助け、又た子女を敎育するの、大切なる義務を盡さんとて、日夜孜々として勉强す。然るに、世の人、ともすれば、女學生を非難し、あやしき名をつくるなど、實に口惜しき限なり。常に心に掛り居りしが、聊か非難を受くべき處あるを見もし聞きもするぞうたてき、されば、世の女學生たる者、心を一にして、益々女德を磨き、日本婦人の、優美なる心の光を、海外へ輝かしたくぞ、思ふ。

長野　松澤まつ子

かしこけれど、九重の御あたり千代八千代榮えませ、父母の君安らかに、百年の齢を保ち給へと祈り奉り。次に、我身もつゝがなう、よろづまめやかに、立ちはたらき、姉弟むつましくして、ふたおやの御心を安め參らせ。嫁しなば、よく舅姑に事へ、夫を扶けて、家を治め、及ぶ限り陰德をも施し、第二の國民を敎育して、大君に答へ奉らん、はた家の風をも吹かせてしかな、などおもほへども、學もなく、德もなき身には、ともすれば、耐忍の心やぶれて、怠りの駒くるはんとするぞ、うたてき。はた又、女子とて

も身の境遇により、ぜひなくも、一生を獨身にて、過ごす事もあるめれば、あらかじめ、自活の心がまへなくてはと、おもほゆる程、いとゞ我身の、行末心もとなければ、此に思ひつきて、今より東の都に、うち上り、うつくしみ深き叔父君がり倚りて、普通の物學びをなし、身を修め、志を堅むる、もとゐ、つくらまほしうて、せちに、かぞいろの君に、乞ひまつりつゝあるなり。今や秋蠶はごくむに、いとまもなければ、やがて蠶のまゆ成らん日には、妾が願ひも成るらんかと、いと、心頼母しうてなむ。

〔本兼題には以上所掲の外なほ二十餘通の寄稿あるも紙面の都合に據り遺憾ながら優等の分のみを掲ぐることゝしたり幸に諒せられむことを乞ふ　記者〕

女鑑兼題豫告

月	日	歌	文
九月	十五日	殘暑	山家に月を觀て記す
十月	一日	名所鹿	燈火親むべし
	十五日	擣衣	故郷の母に
十一月	一日	浦千鳥	野戰演習を觀る
	十五日	落葉	菊花を贈る文
十二月	一日	遠山雪	冬の家庭
	十五日	寒月	歳暮

投稿心得摘要

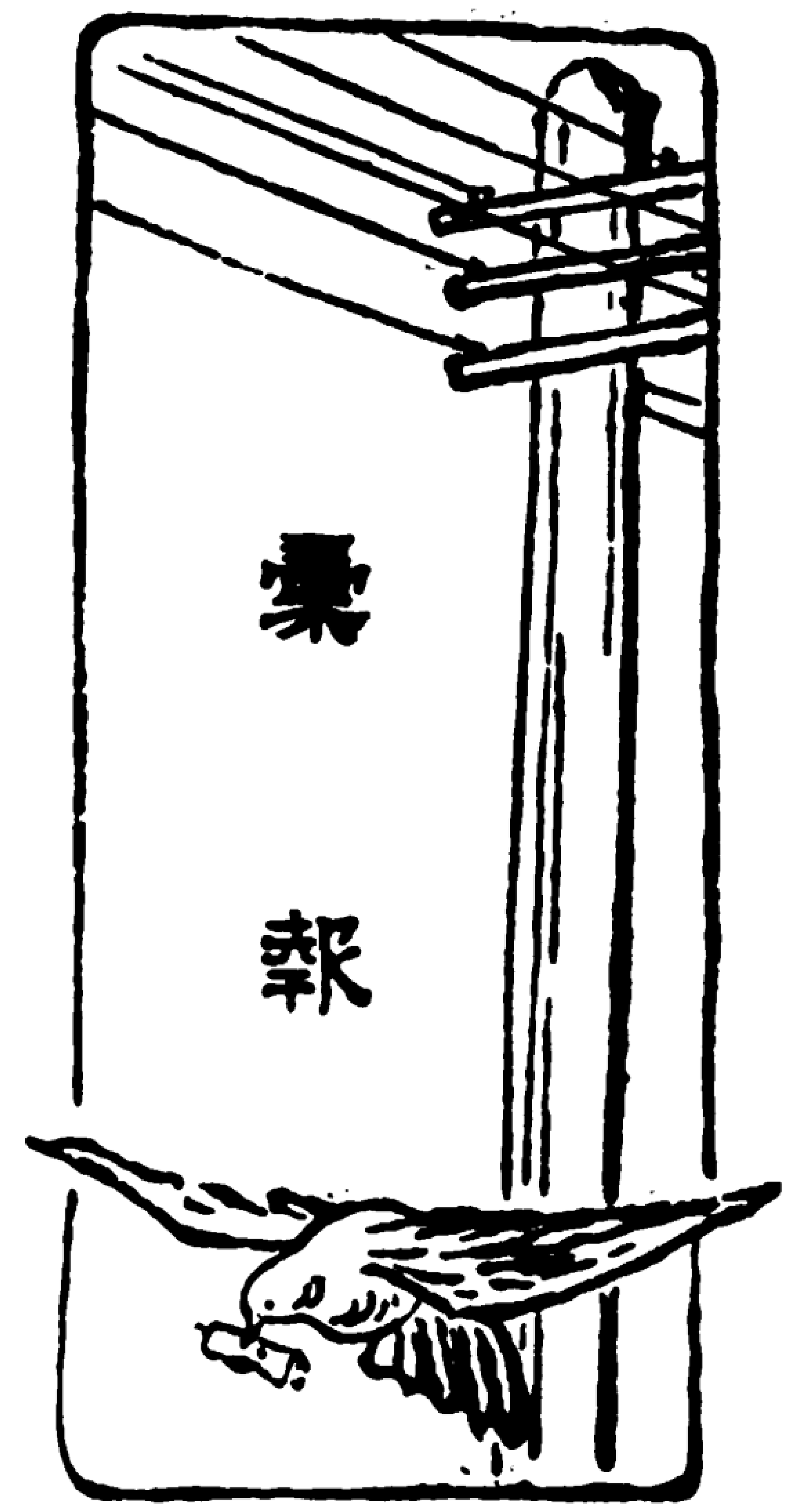
一歌は題毎に用紙を別にし一題には一人一首若くは二首を限りとす上句に**二音の漢字**一字入れ其他は悉く**平假名**又は**一音の漢字**にて認むべし

一文は毎行**十五字詰三十行**以内を限りとす必ず**楷書**を用ゐ字體は**鮮明**ならむことを要す

一其他從前の投稿心得を熟讀詳知せらるべし

注意

編輯上の都合により拾月分より**和歌投詠ノ切期限を廿日前**とす即ち一日の分は先月十日迄十五日のは前月二十五日迄とす遲れたるものは沒書すべし



○海軍下士卒共勵會の光榮

海軍下士卒の家族を愛護するの目的を以て海軍士官の有志夫人を幹部に下士卒の家族を會員とし曩に横須賀軍港に組織せる海軍下士卒家族共勵會は創始以來幹部幷に會員相互の共勵により着々實績を擧げ彼の集會所の事業と相俟て兵員慰安の方法、將に緒に就かんとするより世人の之に對する同情漸く多からんとし既に東宮妃殿下を始め有栖川宮、東伏見宮、山階宮、華頂宮の各妃殿下より獎勵の令詞と金品の御下賜ありたるに此程又皇后陛下より特別の御思召を以て金五百圓の御下賜と優渥なる御令詞を賜はりたりと云ふ同會に從事の夫人等は右の恩賜を此上なき光榮とし一同感激、益〻事業の發達に勗め誓て其目的を達せんと期し居る由

○北海道婦人音樂會　北海道出身の婦人を以て組織せる北海道婦人同志會は松前子爵夫人を會長として加藤政之助氏夫人安子を委員長とし事務所を麴町區飯田町五丁目三十七番地に設け同道婦人教育の普及發達を計畫する由なるが今回寄宿舍設立の資本を集めんが爲め本郷春木町中央會堂に慈善音樂會を開きしと云ふ

○節婦岡田つる

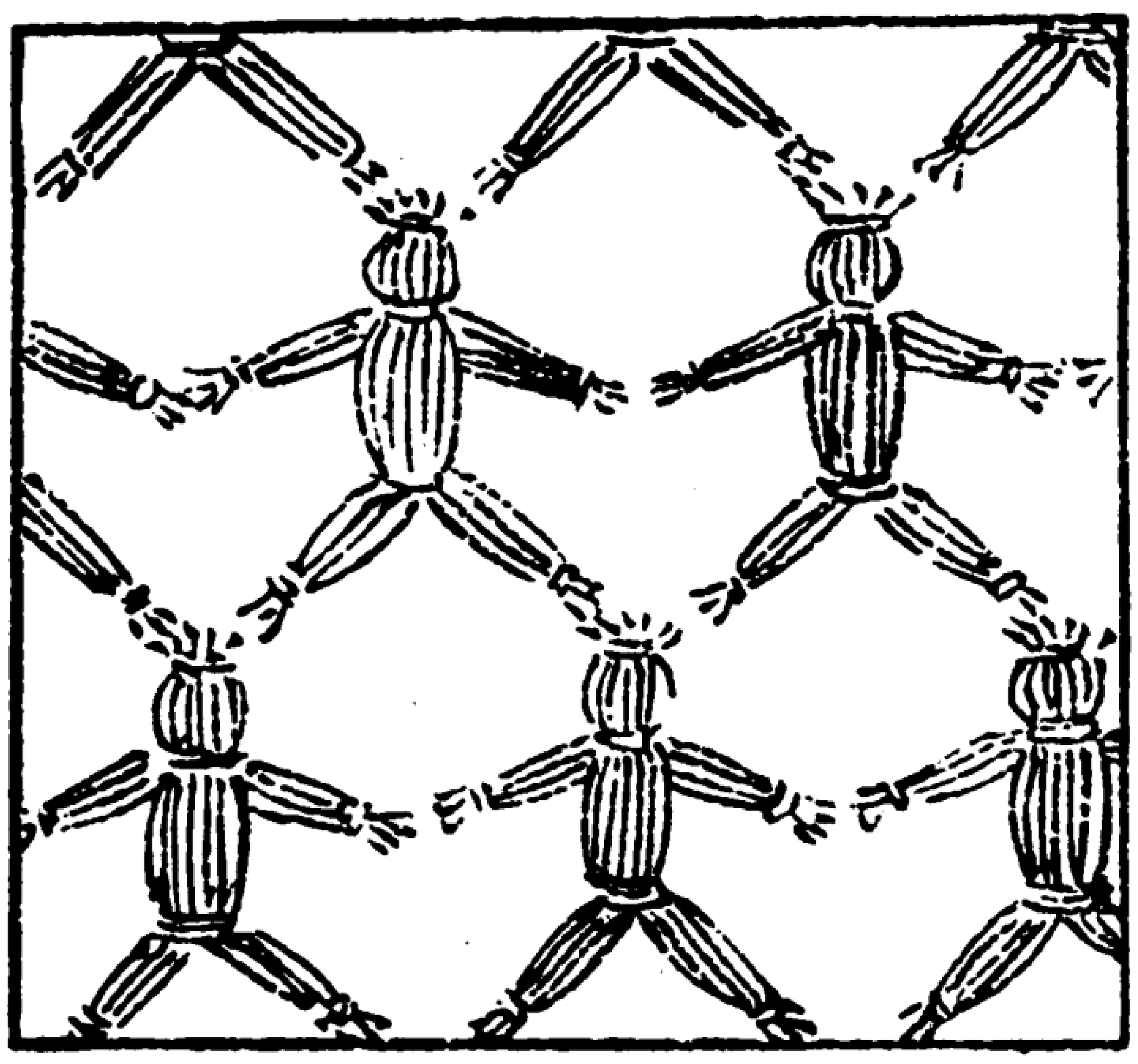
婦人の龜鑑として奇特の行爲を賞せられ東京府知事より賞與金を下賜されたる小石川の節婦岡田お

鶴が是迄親しく嘗め來りたる經歴を左に聊か紹介せん。

◎閑靜な住居　小石川原町の巡查派出所より小半丁を隔て生垣を幾曲りせし同町十三番地に雅めきたる柴門の一と構わり一方の柱には木村金政、岡田津留、一方には福島本勝と記したる三名の標札を掲げたり、當家は木村氏の住居なるもお鶴は親戚の故を以て目下當家に同居し居れり

◎お鶴の良人　は岡田力二郎と云ひ舊幕臣にて當時德川慶喜公のお附にてありしが維新瓦解の際家族を引纏め公の御供爲して靜岡に赴き同地に住居せり、力二郎は平素酒を好みたるが是が爲めにや卒中症に罹り明治六年遂に四十六歳を一期となして歿せり。

◎お鶴の上京　當時岡田の家族は夫婦の外に姑お仲、長男政孝(先妻の子)長女お龍(實子)次女お靜(同上)の都合六人にてお鶴は良人の歿後前記の四人を抱へ翌七年上京し小石川區同心町に住ひ後ち現住の原町へ轉じてより既に十有五年に及ぶと云へり、お鶴は良人に死別れてより爾來



わら人形

◎三十年間　克く姑に事へ先妻の遺子なる政孝を我子の如くに養育し其間に二女子の教育を爲しつゝ有りたり、政孝は成長して農商務省に勤めたりしも性來虚弱にして先に二十五歳にて歿し二女お靜と云へるも次で病死したり。

◎姑の病氣　斯る中に姑のお仲は去る明治十八年中より癇の病に罹り老衰するに及びて之に痰症さへ加はり年中臥床し居るとにはあらざれど隔月に

一回位は必ず癲癇の如き氣味となり殆んど人事不省に陷る事あり突然夜中に家屋を馳廻り或は屋外に馳出さんとする抔、危險にして目も放されぬ病の上に大小便の如きも無論自由ならざる事とて常に三個の便器を備へ附け介抱看護至らざるなく斯の如くにしてお仲の持病は前後十日間位にて漸く鎭靜するなり

◎負て湯屋に行く　お鶴は老衰せし病軀の姑に事へて毫も厭へる色なく姑が持病の起らざる平時に在つては九十餘に達せる高齡の姑を脊に負ふて一町餘も隔たる湯屋に赴き懇ろに入浴せしめたり是を見る近所の者は「岡田のお婆さんが負さつて行く」と噂し合ひ誰知らぬものもなき程なりき、而して姑お仲は老衰の上にても有らんがナカ〳〵に無理なる望みを言ひ

◎時候外れの物　を欲がり寒中に枇杷を呉れとか、又は核なき枇杷が喰たいとか殆んど愚に返りたる小兒同樣の無理をお鶴は決して無理として之を斥ず出來能ふ手段を以て姑を滿足せしめたり、斯く姑に事へつゝある間に於て一面には

◎娘の教育　に怠る事なく、長女お龍を礫川小學校へ通はせ、見事同校を卒業せしめたる後は又もや多少の漢學を修めしめたり龍子は去る二十二年大阪商業學校教授なる福島氏に嫁して今や温かき家庭を作りて同地に滯在せり

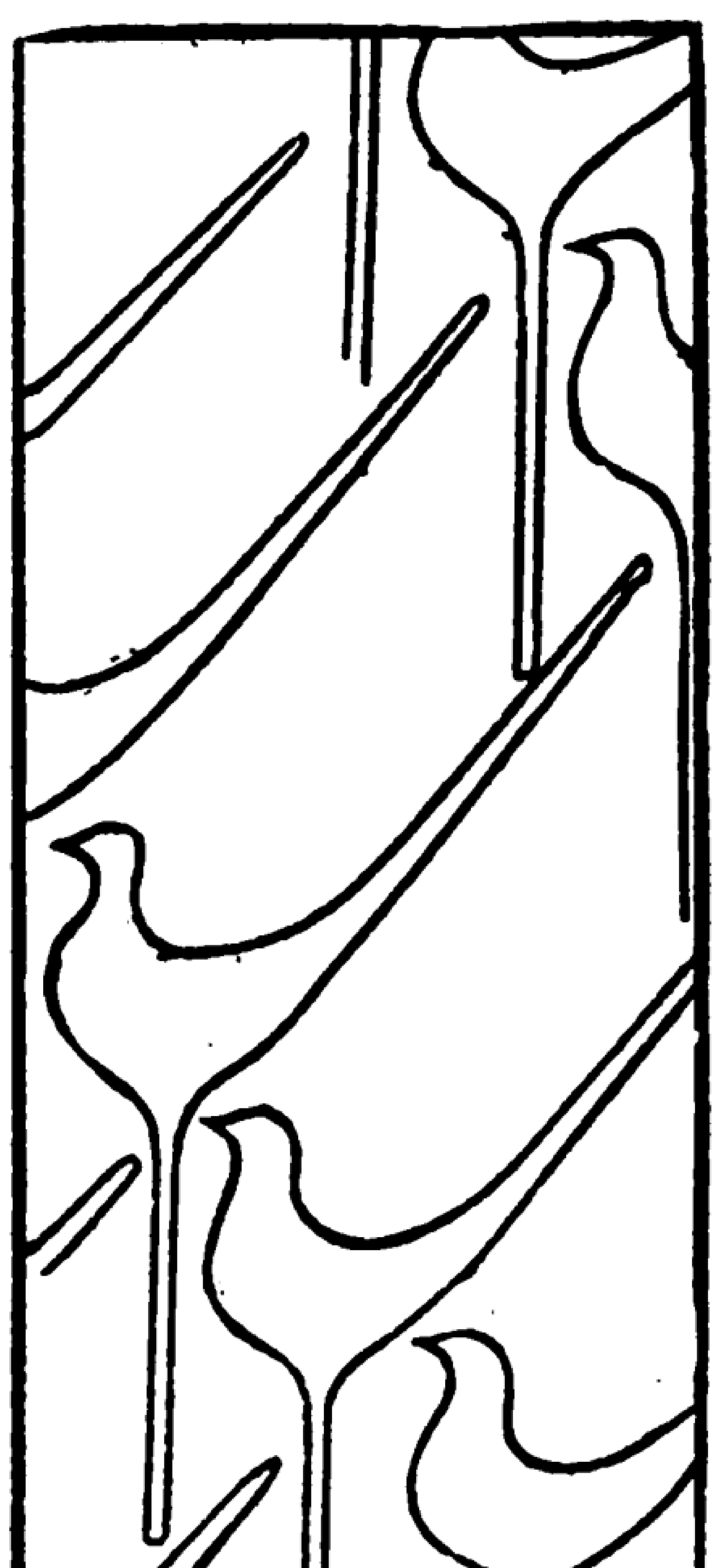
◎高齡者の賞與　お鶴は久しく姑と倶に小石川區に住し居るを以て甞て同區にて高齡者に褒賞を下賜さるゝ事ありし際、姑お仲も此選に當りて受賞せし事前後二回に及びたり、人生稀なりと云ふ七十を既に過ぎ去り米壽を超へ九十の長壽を保ちたるお仲は厚きお鶴が介抱の下に去る三十年五月遂に九十五歳にして歿しぬ

◎姑の歿後　お鶴は只獨り身となりたるが徳必ずしも孤ならずして木村氏に嫁し居る自分の妹が何與れとなく世話するより其身も同家に同居し木村方にて内職に營業せる封筒製造の手傳ひなど爲し居れり

◎お鶴　は當年把つて六十四年なるが色光澤よく言語明晰にして頭髪は切髪に爲しをるが一寸見は五十四五を出でざる如くに見受けらる

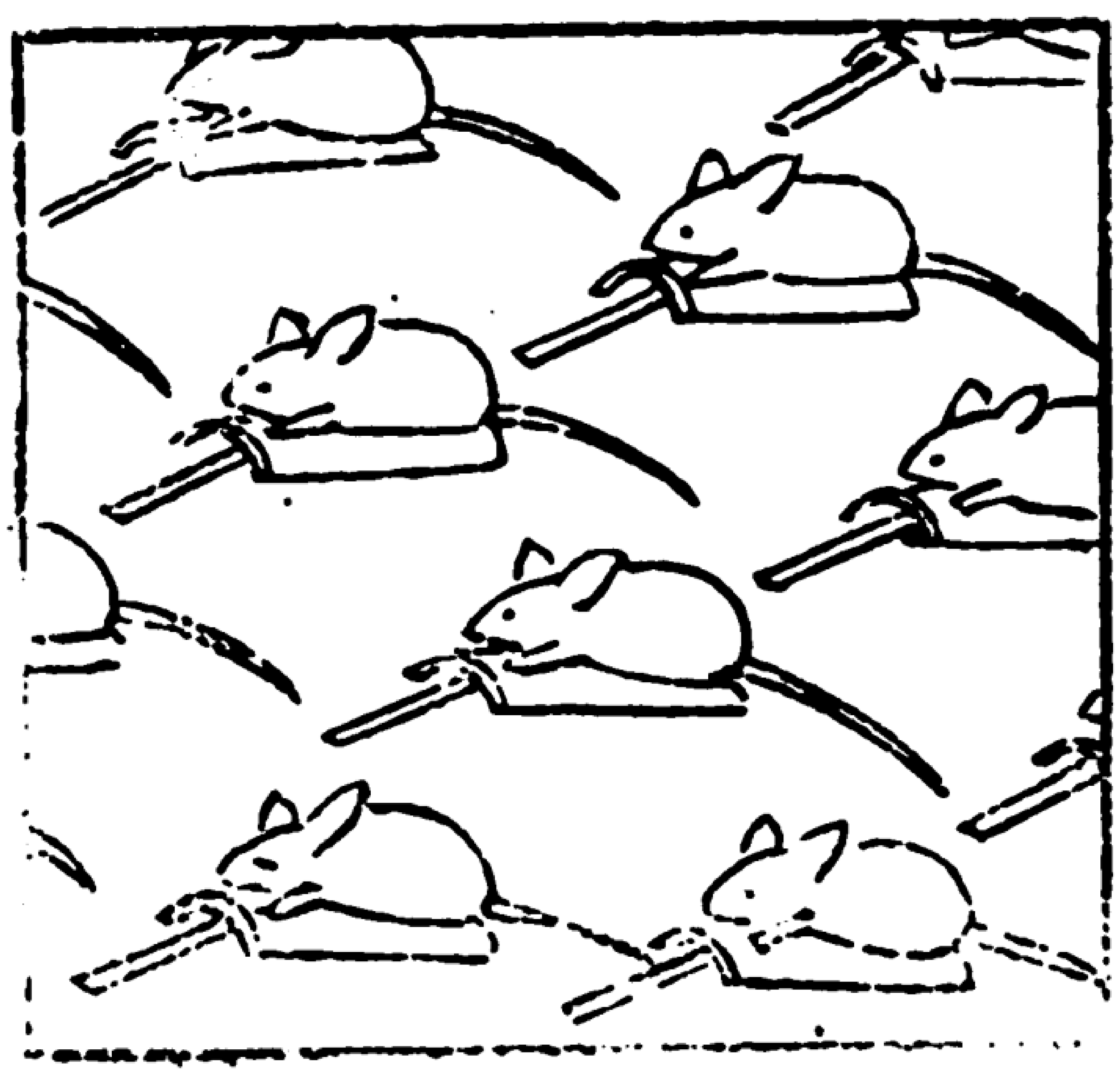
世間、多くの子女、嫁して一家庭を作るに及ぶや相應の辛酸は無論負ふべき婦人の義務なるにも拘らず、少しく小六ケしき姑に遇へば「か〻る姑の側には三日と辛抱が出來ぬ」など〻駈出したがるが常なる中に三十餘年の久しき病餘の老姑に事へ而して其間克く子女を教育して倦まざるお鶴の如きは又稀に見る節婦ならずや

◎感ずべき少女　下谷區入谷町三百四十九番地荷車挽野村彌吉(四十)は女房たつ(三十七)長女はの(十二)長男重太郎(八つ)の四人暮しにて朝は四時に起出で厩橋向ふなる材木問屋の材木運搬をなし夜は深更まで働き居たるに本年一月六日女房おたつは次男金次郎を産みてより産後肥立惡しくどつと床に就きたれば彌吉は十一を頭に乳呑み子を抱へて如何せんと思ひ千々に心を惱ませ居たるに當年十一歳なる娘のはのは親父が稼業に出なければ其日の暮しに困るより朝も親父より先きに起きて煮焚の世話をなして仕事に出し遣りし後は乳呑子の世話は愚かお袋の看病に怠りなく毎日同じ事を繰り返して居る中に飽迄不幸に生れし一家と見



あめざいく

へおたつは段々病氣重なりて遂に血脚氣と云ふ忌はしき病の爲に四月廿一日歸らぬ旅へ先立たれば親子の非嘆甚だしく二三の身内の者の世話にて漸々野邊の送りもソコ／＼に濟したるがかくても生れた許の乳香兒金次郎を如何せんと又候彌吉は其處置に困り元より乳母を置く資力はなく里に遣ることも出來されば壹その事親知らずに他人に呉れんものと獨り思案する顏を見て娘のはのは感心にも及ばずながら私が金次郎を育てますから御安心なすつて御父さんは矢張常の如く稼いでくれと切に望みたれば彌吉とて元より他人に渡し度くないが世間並々の心今娘の云ふを聞いて他人百倍の力を得然らば何うぞ世話して呉れと其れよりは毎日相替らず仕事に出て行く樣になり跡にはのはの一人乳香兒を見ながら三食の仕度は勿論ス丶ギ洗濯をなし其餘暇を得て貰乳をなしては乳を呑しめ弟重太郎をいたわりて夜も重太郎を先きに寢かして自分は金次郎を抱寢し丸で我子を保育するやうな有樣は外他の見る目も哀れにして世にも珍し心掛のよき少女なりと近所での噂なりといふ

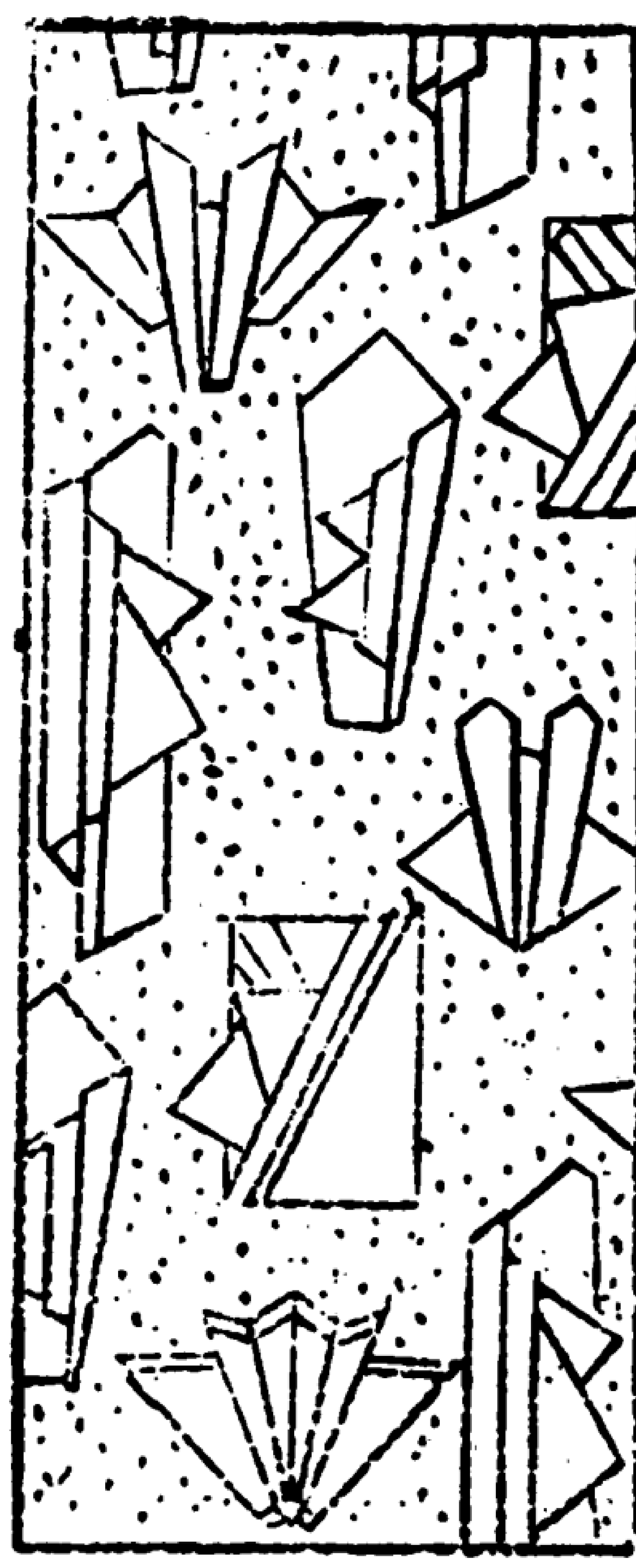


ねずみ小もん

○大學卒業の聾盲婦人　不具者として社會から除物にされて居た盲人啞人も今は文明の恩澤に因て教育の道備り眼明き耳明きも中々に及ばぬ學術藝能を有する者も少なく無がこれとて盲人は耳は不自由なく啞人は眼が明かであるから彼等が學業を修めるは深く怪しむに足らぬ、されど盲にして聾、人間五官中の二大官能を失ふたも

のが十八にして高等女學校を卒業し、二十有二にして大學を卒業し行く〳〵大に筆を文壇に揮はんとすと云ふに至つては大に驚歎せざるを得ない。そを誰れかと云ふに米國アラバマ州タスカムビアの人ケラー孃である、一八八〇年六月二十七日を以て其の地に生れた、父はアーサー、ケラーと云ふてヴアーヂニヤに殖民してスウエッツル人の後裔、其の風采、其の識見、共に立派な紳士であつた、南北戰爭の時には南軍の將校としてすさまじき働きをなしケラー孃の生れた頃はタスカムビヤで發行する一新聞の持主兼發行人であつた。

ケラー孃は生れながらの不具者ではなかつたが生れて十八ケ月許りの時甚い〳〵疳を煩ひ耳も目も共に官能を失つて口きく術も覺ゆることを得ずなつたのである、今日でこそ溫順優雅のいと愛らしい乙女であるが幼少の時は父の云ふ事でも母の云ふ事でも容易にきかぬ强情我慢の娘、或日のことであつた鑰の用方を知つたので母親が物置の中に入つた後から戸を閉めて錠を卸して了ふた、母親は驚き頻りと下婢を呼んだがかけ離れた臺所までは聞えず哀れ數時間禁獄の墓なき身となり内より戸を叩く音も孃には石佛に念佛戸外の床の上に座を占めて唯ニコ〳〵と笑ふて居たのである是れ正に孃が六歲の時で此の儘歲を重ねて體も心も次第に强くなつたらば行末は如何と兩親は心配一方でない、如何で此の娘を敎育して少しは物の道理も分らす人もがなと切りに家庭敎員を求めたのであつた。



小笠原おり

するとかの電話發明を以て有名なアレキサンダーベルと云ふ人の盡力で南ボストンの訓育院長からこの至難の事業に當らす爲め其の名をサリヴアンと云ふ一人の女教師を差遣して與れた、サリヴアン女史はサシユーユル博士の教授法により手指字と云ふて指頭の感覺にて讀む樣工夫したアルハベツトと凸字を以て物名を記たカードを用ゐた生徒は未だ學問の何物たるを知らず先生が教えんとすれば頻に抵抗しサリヴアン女史をして多少腕力を用ゐねば教授の功を收むることを得ずと竊に覺悟せしむる程であつた斯て女史は如何で教授の功を捕へんものと晝夜孃の傍らに居て千々に心を碎くこと七週間の後遂に其目的を遂することを得た孃は指頭の手指字とカードの凸字とは同一の物名を表はすことを理解したのである此時師弟二人の喜びは譬ふるに物なかつた是より教師一歩を進むれば弟子も一歩を進め智識の窓日々に開け學問の興味次第に深くなるまゝに流石強情我慢の女子もいつしか生れ替つて溫順にして而も忍耐つよき少女となつた且つ數週間の後には手指字を知るものとは談話を交へ一年ならずして書簡を認め得るに至り其の進歩の速かなるには一驚を喫せぬものはなかつた



やましな

一八九六年九月にはラドケリフ大學の入學準備のため其の師を伴ふてケンブリツヂ女學校に入學し翌年の六月の試驗には各科とも好成績を得殊に英語と獨逸語の二科は最優等の榮譽を博したそれより九九年には同女學校を卒へ今やまたラドクリフ大學をも卒業し羅甸語希臘語は其

の最も得意とする所である嘗てケンブリッチ女學校長ギルマン氏は孃が修學に關し或る雜誌に掲げた文章の中に左の如く曰ふて居る

ハーヴアート大學やラドクリフ大學にも英文に練達せることヘレン孃の如きはあるまい殊に女學校の第一學年を修めた許りでかゝる成績を得るとは驚くの外ない是れ一にはヘレン孃の英才にもよるが又た一には家庭教師サリヴアン女史の苦辛の結果である女史は孃に伴ふて日々學校に行き教室に入り各教師の教授する所を悉く孃に通辯し孃の學ぶ書籍は先づ普通學典及び百科字彙を相手に充分に下調をし孃家に歸れば女史また歸り頭腦明敏なる孃が忙しき質問に應じて一々說明を與へる學課は獨逸語、文典、佛蘭西語の物語シーザルの語錄と次第に歩を進むるも女史は必ず先づ之を研究して其の教授に差支なき樣力めた云々

又數年前一人の客が孃を訪ふたが其記事は孃の學術と人と爲りとを知るに最も適當なる者である。

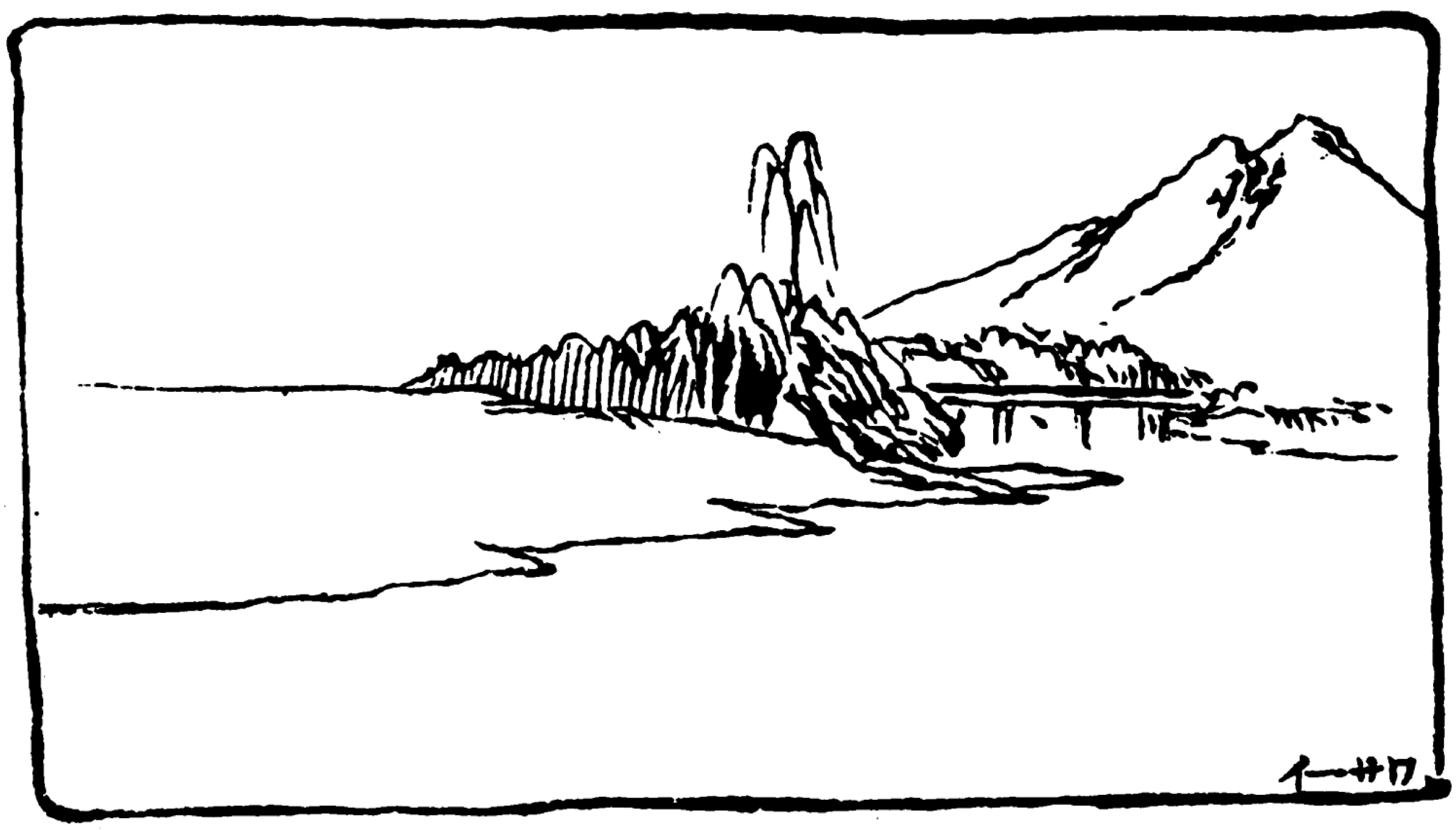
予は數日前サリヴアン女史の許諾を得てボストンなるニウベリ街の邸宅で始めてケラー孃に會ふた孃は其の時ラドクリフ大學の入學試驗の準備をして居たが太陽のさし込む大きな窓の傍に低い動搖椅子に寄り質素な黑地の上衣に桃色の袴を穿ち黄金色の髮日を受けて其の廣くして白き額より櫻色せる頰にかゝる優者なる其の姿今も目に在る心地がする孃の膝の上に小さき褥樣のものがあり其の上に銅線を以て幾何學の圖を書いてあつた孃は之を見て頻りに其の解釋を試み居たがサリヴアン女史がその指頭に手を觸れるや直ちにそれを傍に措き手を差し延べて予が名を呼んだ當初は理解りかねたが忽ち馴れて明

に聞き取ることを得たけれども女史は二人の間に始終通辯の勞を取つた。

(予)大學卒業の後は何をなさる御考へですか

(孃)筆を執つて兒童文學を書かうと思ひます併し創作ではありません希臘語から飜譯するのです兒童文學として之に優るものはない樣ですキングスレイやアライスなども色々兒童の讀物を書ますが何うして〳〵希臘のには及びませぬ

孃は萬事に就きて希臘の崇拜者で希臘の語學文學美術及び歷史は最も深く孃の心を動かすのである。



(予)貴孃は希臘へ行きたくはありませぬか

(孃)ハイ、空想は抱いて居ます私しはこれッぱかしの時から床上二三尺許の處まで手を下げて常に其の事を想ふて居ました

(予)イヤ、何時かそれが現實になりませう

(孃)ハイ、何卒かさうしたいのですけれども當にはなりませんわ(と少し聲を曇らせて)何うせ世の中は何事も思ふ樣にはなりませんからね

(予)貴孃は何の學科が一番御好きですか

(孃)希臘語と羅甸語です、私し

は今ヴアーヂルの牧人歌シセロの演説集ホーマーのイリヤット、オディセイ抔讀んで居ます

(予)貴孃は衣服に就いて何んな考を御持ですか

(孃)左様、花が美しい色をして居る如く女子は服装に氣を付けねばなりませぬ、が、もし鳥の様に羽毛や翼があつたら衣服の面倒もなく思ふ所へ行かれて嘸愉快でありませうね

(予)貴孃は第一に希臘へ飛んで行き度いでせう

(孃)否エ(と笑ひながら)私しは自分が愛する人々に遇ひに一番先に故山へ飛んで行きます

(孃)貴君は何業をして御出でゞすか

(予)青年雜誌の投書家であります

(孃)そんなら小供が御好きでせうな

(予)イヤ、大ひに好きです小供に弓を射るのを教へる程面白いことはありません

(孃)弓を射ぬ様に教えるのでせう物を射殺すなんと云ふことは可ないことです

(予)それでは貴孃は戰爭は不可ないと云のですか

(孃)可けません／＼、自由のための戰爭でなかつたならば斷じて可けませぬ

(予)そんなら貴孃は非帝國主義者ですな

(孃)左様思ひます可憐な蠻人を幾らも／＼殺すなんて殊に自由を得ようと戰ふものを殺すなんて實に殘酷な話です

(予)貴孃は成功に必要なことは何だと思ひますか

(孃)忍耐と剛毅と誠實であります(と考へながら徐ろに答へた)

(予)貴孃は世の中で一番欲しいものは何でありますか

(孃)友達です(と直ちに答へた)

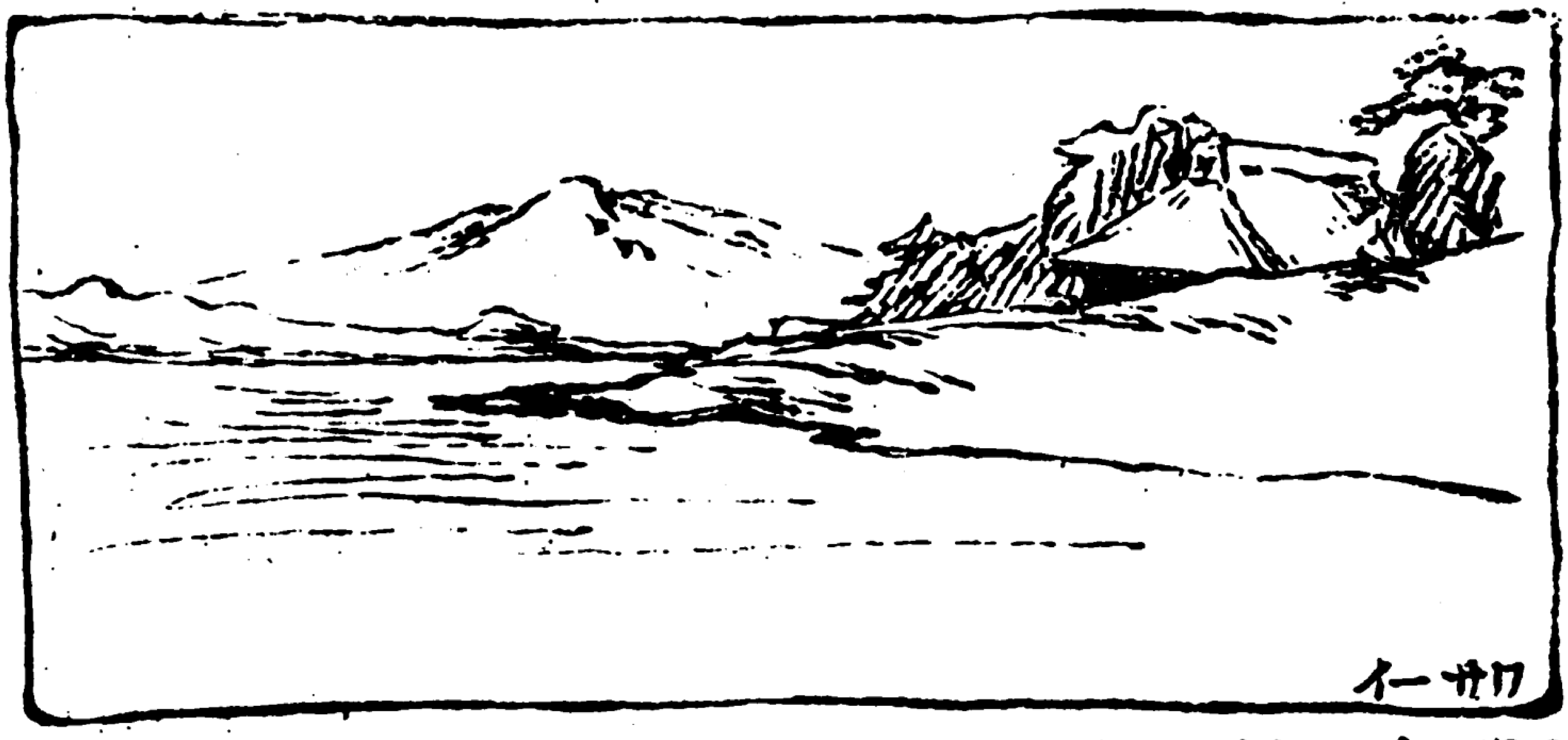
(予)教育と富とは何方を取りますか

(孃)教育です教育は富を得る階段であります、け

れども私しは富を得ようと思ふのでありません（と微笑ながら古語を引いて云ふた）「我に貧も富も與へるな唯だ滿足を與へよ」と云ふが私しの望みです讀み去り讀み來れば孃の人と爲りが躍然として紙上にあらはれる、ア、誰れか孃を不具者と云ふであらう、孃が心眼はよく宇宙の眞理を見孃が心耳はよく良心の聲を聞き得るではないか、孃今年二十有二、其の前途の發達は測り知ることが出來ないのである

○湖上の美人

時は去十九日の午前六時、琵琶湖上の朝靄晴れ初めて、膽吹山の邊よりうらうらと茜さす旭は、萬頃の瑠璃に反射



して、瀲灔たる波光畫にも寫されず、西を顧みれば比良の高嶺を初め、青螺打重なりて美人の黛を描けるにも似たり、折しも大津市橋本町白崎嘉七が和船に乘りて、犬上郡松原村を出帆し、長濱を距る一里程の處に來りし頃にて、波の上を見渡せば、コハ不思議、一人の女抜手を切て泳ぎ來る樣子、綠の髮は藻鹽の如く掻き垂れて、雪より白き腕を自在に働かせ、漸く舷に近くを見れば、年齡十八九にて、紅粉の粧ひを假らざるも自然の國色、玉をのべたる雙頰に笑を浮べつゝ、其船の親方に物申さん、昨夜瀛船に乘り込み、途中粗忽して水に落ちたるもの、お慈悲にお助け

あれと呼び掛けたり、餘り意外の事に乘組の人々打驚き、竹生島の神が假に姿を現したるか、又は世に云ふ人魚の類ひならずやと、左右なく應答もせざりしが、よく〳〵見るに魔障變化の者にもあらず、全く人間と見極めたれば、早速救ひ上げて段々樣子を聞くに、此婦人は滋賀郡小松村大字北平の伊藤キヌ(十九)と云へるものにて、年久しく京都のさる方に宮仕へを爲し、何か用事ありて彥根へ赴かんと、去十八日の午後八時三十分太湖社の汽船第二庚辰丸に乘込み、大津を出帆せしが、同十一時三四十分の頃、彥根より一里ばかりの湖上にて便所に入りたる後、手を洗はんとて舷門に至り、湖中へ手を差出せしが、屆かぬまゝに、身體をノリ出したる一刹那、忽ち筋斗打つて水中に陷りたり、されど夜深の事とて船中誰一人知る者なく、進航を續け、キヌが頻りに助を呼ぶ聲も、波を輾る火輪の聲に妨げられて少しも聞えざりき、キヌは元來水練の達者にて衣服を着たるまゝ靜かに手足を動かし、先づ高島郡の方に泳ぎ附かんか將た彥根に向はんかと、其方角を考へ居るうち、西南の風烈しく吹き起りて、大波小波遠慮なく蔽ひかゝりたれば、風に逆へば却て危し、まゝよ夜明けまで漂ひ居らば、救助の船もあらんかと、心靜かに身體を波にまかせ、殆んど七時間の長き間鳰の浮巣と共に漂ひしに、翌朝漸く白崎嘉七の船に助けられたるなりと、さて長濱へ着きたる上、嘉七より右の次第を長濱警察署へ訴へ出で、係り官も健氣の婦人もあるものかなと驚歎し、猶水中にありし摸樣を尋ねしに、キヌは一向驚ける氣色もなく、實は衣服を脫いで裸になれば如何なる風波も恐れませんが、苟且にも女の身として裸體になるのは、見苦しいもので……と此危急に臨ん

で、女の嗜みを忘れざる心掛の程こそ殊勝なれ、我邦は四面海を環らして海國男兒など、大言を吐く者も、船となれば頭痛、鉢卷、靑瓢簞の如くなりて唸々呻き苦しみ、もうとても助からんなど、弱音を吹くに、孱弱き京女郎の身として、男子も及ばぬ擧動、稱賛すべきものにこそ

○流行の束髮花月卷　婦人の髮の流行は上流界より下流界に移るもあれば又下流界より上流界に及ぼすもあり時によつては高尚に傾き或は野卑に陷り束髮の輸入以來は婦人の髮も既に幾變化を來したが昨今又々花月卷といふ束髮の新形が現れた此流行の勢ひは素晴しいもので上は貴顯紳士邸宅の奧向きから下は裏店社會の女房連にまで及ぼし其の猛勢はあたる可らずである元來この花月卷と稱する髮は最初長崎及び馬關邊より漸次東して本年の春頃新橋其他の花柳界に流行したもので其の起りは外國の下婢などより新嘉坡、香港、印度其他へ出稼の婦人に傳へ終に今日に至つた次第だといふが其の結ひ方も頗る簡易にしてピン又は束髮止を用ひ自分の手業で容易に出來るのである

○英國に於るの下婢の權力　歐米諸國の下婢は驚く可く傲慢にして主婦は却て下婢の前に低頭する有樣なるが此程或る人の家に雇はれ居りし下婢の許へ其家に雇はれんとする或る女より元の主家の樣子を問合せたるに下婢は答へて「御手紙拜見致候御尋の家は惡るき所には候はず夫人は能く働かれ候て萬事注意深く自身の務めは萬々心得居られ候迷惑なるは朝早く起きよと勸めらるゝ事に御坐候これ丈は全く餘計な御世話と存候まゝ申上度事山々有之候へ共くどくしくは不申上候愈御出被成候ならばお前樣の外にまだ一人若き貴婦人（他の下婢）居られ候こと御承知被成度候一月

許り御試し被成候も宜しくと存候妾は交際好きに候故同家の樣な寂しき家は厭になりし丈に御坐候可祝」と申送りたりと云ふ

○ピアノと小兒の神經　英國の或る醫士はピアノを奏することが小兒の神經に及ぼす影響を研究したるに十四歲以前に稽古を始めたる女兒千人中六百人は何等かの神經病を有し全くピアノを習はざる女兒千人中には神經病を有するもの僅に百人なることを發見したり其結果として右の醫士は十六歲以下の女兒に決してピアノを習はしむべからずと主張し居ると云ふ

○米國の結婚富籤　米國コンチクチカットの獨身者倶樂部にては此程結婚抽籤なるものを組織し二十五人の會員にて每年一回抽籤を爲し黑き籤に當りたるもの一名は必ず其年內に妻を迎ふることを約し若し年末に至りても結婚する能はざるときは罰金として百圓を拂ひ倶樂部に預入たる貯金を沒收せられ其上に除名せらるゝ筈にて約束通り結婚したるものには倶樂部より結婚賞として四百圓を送ることに定めたりと云ふ

○犬に咬まれて一萬圓　米國ドルチエスターに住するエメリン、ウエークハムと云ふ十三歲の少女は昨年の四月自宅の廊下にて植木鉢の花を折り居たるとき家主なるクインシーと云ふ人の犬に顏を咬まれ容貌醜くなりたるより家主を被告として二萬圓の損害要求の訴を提起したるに此程裁決の結果一萬〇五百圓の損害賠償を請取るに至りたる由なり



新刊批評

◎春草秋草（大町桂月著）　春くさには田園雜興、花譜、橋守、鷄が淵、金華山又た秋くさには少將、烈婦可留子、天鈿女命、お春お花、勾當內侍なぞありて、文章さらりとして更に厭味なければ夏日の讀物として最も適當なるべし。（定價金二十錢神田錦町二丁目新聲社）

◎女子運動法（坪井玄道譯）　巍然たる五百頁の大冊女子運動の方則に就いて殆んど洩らすところなきが如し、公私女學校體操科の參考書として最も適當の良書なるべし原書は伯林府高等女學校長クラチ、ヘスタレグ女史の著述にして目下同府各女學校に於て專ら採用せられ居るものなりといふ。（定價金一圓二十錢京橋區銀座一丁目大日本圖書株式會社發行）

○新刊書目

日本婦人	四五六	府下豐多摩郡澁谷村	帝國婦人協會
工談雜誌	一六一	東京々橋區新榮町	工談會
女學雜誌	五一九、二〇	府下北豐島郡巢鴨村	女學雜誌社
國學院雜誌	九卷八	東京麹町區飯田町	國學院
佛教文藝	一卷八	同淺草區新谷町	佛教社
新聲、水	十編二	同神田區錦町	新聲社
たんな	三卷八	同麹町區下二番町	大日本女學會
圖書月報	一卷一二		東京書籍商組合事務所
六合雜誌	二七二	芝區三田四國町	日本ユニテリアン弘道會
慶應義塾學報	六八	芝區三田四國町同	發行所
大八洲雜誌	二〇六	神田區三崎町	大八洲館
婦人世界	二七	大阪南區末吉橋通	浪華婦人會
工手の母	一四五	同北區西野田新家西ノ町	同新聞社
藥石新報	四七三	大阪西區江戶堀下通	同新報社
婦女新聞	一七一	牛込區東五軒町同	新聞社
通商月報	九〇	大坂市北區堂島濱通	府立大坂商品陳列所
女子の友	一四三	東京市神田區鎌倉町	東洋社
白鳳新聞	八三	大坂市西區西長堀北通	仝新聞社
うらにしき	一三〇	東京市神田區北甲賀町	尙絅社
偕行社記事	三二〇	仝麹町區飯田町	偕行社
東京感化院月院	二四		東京感化院
帝都事務新報	一一	東京日本橋區本銀町	帝都社

次號以下の女鑑

陽春白雪の歌は、固より下里巴人の調と同しからず、高尚なる趣味の文學は、卑陋なる娯樂の文字と相容れざるなり、女鑑が多年江湖に歡迎せられ、貴婦人、令嬢諸子の愛讀を受くる所以また偶然ならざるなり。

是を以て益々從來の旨義を擴張し、愈々高潔なる趣味を供給して、興趣と實益とを兼備せる良雜誌となし、内にしては家庭日夕の好伴侶となり、外にしては交際社會の益友となりて、聊か讀者諸子の厚願に酬ゆるは、女鑑が當に任務とすべきところの道なりと信ず。

九月十五日以後の女鑑は、則ち以上の旨趣により改良を加へたるもの、廣く名家、學者、文士等の敎育、學説、科學、文學等に關する意見、談話、小説、雜錄等を掲載し、其他の記事をも精選するを以て、紙上の光彩躍如として眼を射るが如きを見るべし。

樞密顧問官子爵黑田清綱先生並に華族女學校敎授井上賴圀先生の歌文添删選定は從來の如くにして諸嬢の投稿隨意なるを以て和歌、文章等に資益する亦鮮少ならざるなり。

今は節早く立秋に入りて、暑氣やうやく都門を去らんとす、希はくは燈火の下、金風蕭颯たる夕、九月以後の女鑑を讀みて、その如何に翩々たる幾多の女學雜誌中に一頭地を拔くかを見認められむことを望む。

九月十五日發兌 女鑑第拾參年第拾八號豫告

重要目次

其他口繪挿畫等を精選し從來に比して優に一新面目を開くべし

株式會社國光社發賣書目

著者	書名	體裁・定價
宮内默藏著	王學指掌	菊版クロース美本 定價一圓郵稅十錢
栗田文學博士著	天朝正學	菊判洋裝 定價卅五錢郵稅四錢
吉九一昌編纂	名家修養談叢	菊判洋裝美本 定價三十六錢郵稅八錢
高瀨眞卿著	學校家庭修身一夕話	菊判總クロース美本 上製金六十錢郵稅八錢／菊判洋裝美本 並製三十八錢郵稅六錢
國光社編纂	日本教育	定價廿一錢 郵稅四錢
三輪田眞佐子著	女子の本分（十四版）	菊判洋裝大和綴 定價金二十五錢 郵稅金六錢
堀内新泉著	家庭の鑑	菊判洋裝美本 定價金十八錢郵稅四錢
三輪田眞佐子著	女子處世論（八版）	菊判洋裝大和綴 定價二十錢郵稅金四錢
杉谷正隆編纂	修身百首	菊判洋裝 定價二十錢 郵稅四錢
内務大臣官房編纂	明治國民龜鑑	菊判洋裝大和綴美本 定價二圓 郵稅十五錢
清藤正輔編	皇后陛下御略記 坤德	菊判大和綴 定價二十五錢郵稅四錢 特製三十五錢郵稅四錢
國光社編纂	明如上人遺芳錄	菊判洋裝 定價二十錢 郵稅四錢
矢田七太郎著	幕末之偉人 江川坦庵	四六判大和綴美本 定價金三十錢郵稅四錢
水主天姥著	千古寃魂 石田三成	四六判洋裝美本 定價金三十錢郵稅四錢
安田巖城著	西鄕從道	菊判洋裝美本 定價二十五錢郵稅四錢
大町文學士著	山中鹿之助	菊判洋裝美本 定價十九錢郵稅四錢
三好文學士著	上杉謙信	菊判洋裝美本 定價十九錢郵稅四錢
大町文學士著	常磐御前	菊判三切袖珍 定價十三錢 郵稅二錢
清藤正輔著	聖德太子傳	四六判洋裝 定價 郵稅 二十錢錢
國光社編纂	新編ひめかゞみ	菊判洋裝美本 定價二十五錢郵稅四錢

株式會社 國光社發賣書目

- 國府犀東著 **靜御前** 菊判三切袖珍 定價十三錢 郵稅二錢
- 長田偶得著 **顔世御前** 菊判三切袖珍 定價十三錢 郵稅二錢
- 笹川文學士著 **本多平八** 菊判洋裝美本 定價十九錢 郵稅四錢
- 工藤重成著 **藤田東湖** 菊判洋裝美本 定價十九錢 郵稅四錢
- 小林文學士著 **勾當内侍** 菊判三切袖珍 定價十三錢 郵稅二錢
- 田岡嶺雲著 **小早川隆景** 菊判洋裝美本 定價十九錢 郵稅四錢
- 白河文學士著 **立花宗茂** 菊判洋裝美本 定價十九錢 郵稅四錢
- 濱田文學士著 **袈裟御前** 菊判三切袖珍 定價十三錢 郵稅二錢
- 中内蝶二著 **大石良雄**（新刊） 菊判洋裝美本 定價十九錢 郵稅四錢
- 太田法學士著 **木村重成** 菊判洋裝美本 定價十九錢 郵稅四錢

- 甲秀輔著 **徳川の孔明** 菊判半切洋裝美本 定價十九錢 郵稅二錢
- 山崎忠和著 **日露の英雄** 四六判洋裝 定價二十錢 郵稅二錢

◎

- 小澤政胤編纂 **慶長以來國學家畧傳** 總クロース美本 定價一圓五十錢 郵稅十錢
- 大林弘一郎著 **中等國文學史** 總クロース美本 定價六十錢 郵稅八錢
- 大宮兵馬著 **國語漢文假名遣ひ法** 菊判美本 定價金十八錢 郵稅二錢
- 指原乙子著 **女子文章軌範** 菊判洋裝大和綴 定價金三十錢 郵稅四錢
- 故富士谷御杖述 **土佐日記燈** 菊判大和綴 定價金一圓五十錢 小包料十五錢
- 大宮兵馬著 **中等日本文典** 菊判總クロース美本 全一冊定價金七十五錢 小包料十錢
- 平野秀吉著 **國語聲音學** 菊判總クロース美本 定價六十錢 郵稅八錢

株式會社 國光社發賣書目

明治三十六年九月一日發行　毎月二回一日十五日發行　第拾參年第七號　明治廿五年三月二十日第三種郵便物認可

東京築地活版製造株式會社印刷